

---

# 獣の檻

ブナ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

獣の檻

### 【Nコード】

N3013Q

### 【作者名】

ブナ

### 【あらすじ】

寒い冬に起きた、ある連続殺人事件が解決してから二カ月後のこと。西野沙夜と藤山啓介は、元通りの生活を送っていた。他人を踏み入れさせない、二人だけの世界に。

学期末の試験も終わり、春が訪れ出していた、ある日。二人は買い物に行った。そこで、知り合いの中年女性に会ったとき、沙夜の勘は何かを予感し……？

強すぎる愛でつながれた二人が、殺人事件に挑む。狂愛ミステリ  
― 第二段。

## 序章 許されざる愛情

世界には、許されない恋というものがあります。法律からも、倫理からも見捨てられた、哀れな恋。禁じられているために、よけいに心は膨れ上がり、いつか弾け、世間一般で言う“間違い”へとつながります。不倫、同性、兄弟姉妹、親子、年齢、身分、敵同士……。その種類は、挙げたらキリがありません。

けれど、いったい何が“間違い”なのでしょう。好きであること、愛することに、そんなものはありません。存在するのは、相手への愛情だけ。違うのは、周囲の物の見方。それによって、あたかも特殊なもののように映るのです。

禁じられているがゆえに、普通ではない愛は、強烈なものになります。そうそう受け入れられないから。もしくは背徳感を抱くから。時には、罪を犯すことすらためらわせません。

理性などというものは、心の底からの感情に抗えません。世間が許さない関係であっても、得たい人があるなら、一番有効な手段を選べばいいだけのこと。自然に生きる獣のように、敵は排除してしまえばいいのです。

だから獣は牙を剥きました。自分の愛する人を手にするために。たとえ、許されないことであろうとも。

## 一章 本能的嗅覚

三月下旬。厳しい寒さは和らぎ、春の足音が聞こえ始めていました。

今日の天気は快晴。暖かな風が吹いていて、過ごしやすい気候です。

「西野」

窓から入る日差しも気持ちよく、窓際の席である私は、段々まぶたが重くなつて、うとうとしていました。

ですが、

「西野沙夜！」

「は、はい？」

授業中だったために、安眠は許されませんでした。いつの間にかそばに来ていた先生に名前を呼ばれ、寝ぼけまなこで顔を上げます。「まったく。お前は本当に、目を離すとすぐに寝ようとするな」

「えっと……、ごめんなさい」

「すぐに謝るのは、いいところなんだがな」

先生はこめかみを押さえました。渋い表情です。

「とにかく、夜にちゃんと寝ろ。テストの答え合わせまで聞き逃してたら、本当に危ないぞ」

そう言つて、約二ヶ月前から、ある“事情”によつて私のクラスの数学を受け持っている先生は、黒板の前へ戻つて行きました。学年末テストの答え合わせが再開されます。寝起きの頭には、まったく内容が入ってきません。ほどなくして、私は再び眠っていました。

「沙夜」

「ふわっ？」

再び名前を呼ばれて起こされました。うつすらと目を開いて、声のした右上方向へ首を動かすと、

「もう、授業終わったよ？」

茶色の短髪で、目のくりっとした、幼さの残る少女が、ニヤニヤしながら私を見下ろしていました。友達である、大野美鈴おおのみずすずです。あだ名は名前の一部をとって、すず。

「んー……」

目をこすりながら、返事とつかない返事をします。前方の黒板の上にある時計を確認すると、すずの言ったとおり、六時間目は終わっている時間でした。

「しっかし、よく寝るよね。最後の方、もう先生あきらめてたよ」

すずが声を弾ませます。見た目の活発さに反さず、朗らかな性格でした。

「だって……、眠いんだもん」

言い訳らしい言い訳もなく、そう言うしかありませんでした。とにかく、授業はいつも眠くて、前日に何時間寝ても、起きていられないのです。最近、少し本気で睡眠障害を疑っています。病院へ行く気はまったくありませんが。

「そう言われると、なんにも言えないなー」

私の言葉に、すずは機嫌よく笑みを浮かべました。同姓の私から見ても、可愛らしい表情です。“二カ月前の事件”など、まるでなかったかのようでした。

「ま、あの騒ぎの渦中にいたときでもいつもどおりだったのに、収まった今になって変わるわけないか」

何度見ても、明るい表情に、影は微塵もありませんでした。

すずが口にした騒ぎというのは、二ヶ月前に起きた、私の通う浜野高校の生徒と教師四人が、相次いで殺された事件のことです。“表向き”の犯人はすでに亡くなっているので、警察の捜査は打ち切られています。

死んだ人が多いのも相当な事態でしたが、それ以上に“私たち二

人”にとって大変だったのは、事件の中心にいたために、マスコミの人たちがたくさん来たことでした。お父さんたちが守ってくれたので、相当マシではあったと思いますが、二度とごめんです。

それほど盛り上がり過ぎていたのに、今では事件など忘れ去られたかのように、学校は平穏を取り戻しています。一皮剥けば、傷痕は随所にあります。日常が帰ってきていました。変わったことといえば、先生たちの仕事分担と、クラスでの私の扱いが、どこか腫れ物を触るような感じになったくらいでしょうか。

「しかし、早いもんだよねー。あれからもう二ヶ月だよ?」

「そうだね」

同意を求められ、私はうなずきました。種々の問題はあちこちにありますが、“私たち”の生活を邪魔するようなものはすっかりなくなっています。学校の入学試験の合格倍率低下や、親からの苦情などは、関係がありません。

それから、しばらく二人で話し続けていましたが、担任の先生が教室に入ってきたので、打ち切りました。

放課後になり、私はすと別れました。私たち二人は美術部に所属していますが、今日は休みでした。

美術部も事件でゴタゴタしましたが、二ヶ月経って、ようやく落ち着いてきていました。被害者が部長だったうえに、美術室が一度殺人の舞台になったため、気味悪さが勝り、事件解決後は活動がなくなっていたのです。

顧問である高橋茉莉先生たかはしまりの尽力で、避けられていた美術室での活動が再開されたのが先月下旬。最初は部員誰もが、抵抗感を隠せませんでした。日が経つにつれ、段々と軟化しました。先生が、以前となんら変わりなく自身の製作に没頭していたのが功を奏したのかもしれない。死者を悼む気持ちを忘れないようにしつつも、徐

々に雰囲気は元に戻ってきています。一人欠けてしまっているがために、完全な元通りは望めませんが。

部活だと、私の扱いは以前と変わりません。部長が殺された理由が火種になり、先輩から責められたこともありましたが、今は和解除いています。

美術部は、私の中で大きな存在なので、今の回復具合にはほっとしていました。

ですが、最も大切な存在は別にあります。

隣のクラスの前の廊下で、その彼を待っていました。

しばらくして、大勢のさよならという声が聞こえ、教室から生徒たちが出てきました。その波を簡単にすり抜けて、

「ごめん。待ったか、沙夜？」

背が高く、モデル体型で、顔もスラリとした少年が、私のところに来ました。かつこいいいという表現が一番手っ取り早く、つり目であることに着眼するのなら、第一印象は怖い、という感じですよ。

名前は藤山啓介<sup>ふじやまけいすけ</sup>。互いの両親が知り合いで、幼なじみです。私と同じ高校一年生。私が弱気でお母さん譲りのドジな性格かつ、世話焼きで、勉強は英語以外苦手なのに対し、啓介は強気といかないものの冷静な性格で他人に無関心。失敗はほとんど起こさず、勉強面は学年トップを誇る秀才です。マイナスを上げるとしても、本と人混みが嫌いなことくらいしかありません。

そして、私がすべてを捧げ、私にすべてを捧げさせている男性でした。

「ううん、大丈夫」

問いかけに対し、首を横に振って、向かい合った啓介を見上げました。こうして見ると、外見も逆です。私は女子の中でも背が小さいのですが、啓介は男子の中でも高い方でした。ただ、私の女子として啓介と違ってほしい部分は、残念なことにはべったんこでした。

気にしてないとは言ってくれていますが、気にせずにはいられなかつたりします。

「なら、よかった」

啓介がつり目を和らげ、優しく微笑みました。私だけに向けられる、私だけの笑顔です。

「行こうか、沙夜」

「うん」

笑い返し、肩を並べて（背の差で並べてませんが）、私たちは下駄箱へ向かいました。

今日は、一緒に買い物です。

私と啓介は、互いの両親が知り合いだったこともあり、幼なじみとして育ってきました。生まれたときから一緒だったと言ってもいいと思います。

でも、物心ついた時にはもう啓介は、はっきりと異性として存在していました。すでに、私の心は啓介に捕らえられていたのです。ぼんやりとした記憶の中で、啓介はずっとそばにいて、私を守っていてくれたので、それが理由なのかもしれません。しかし、理由はたいした意味を持ちませんでした。啓介が好きだという感情が、すべてだったのです。

そして啓介は、私が抱いた好意に、応えてくれました。正式に付き合いだしたのは中学生になってからですが、始まりはもっと前です。

今も、その想いは変わっていません。いえ、変わってはいるのかもしれません。より深く甘美に、狂おしいほど重たく。

制服姿のまま、私と啓介は、学校の最寄り駅から二駅いったところにある、大きな街に来ていました。都会の中心街には遙かに見劣りしますが、人が多すぎない分、人混み嫌いの啓介にも優しい環境

です。

「最初は本か？」

改札を過ぎ、駅の出口に来たところで、啓介に尋ねられました。

「うん。買うか分かんないけど、服を先にすると荷物になっちゃうし」

「なら、いつものところからだな」

啓介の言っていたいつものことは、駅の周りに点在している百貨店などのビルの囲いを抜け出した場所にある古本屋でした。チェーン店で本以外も扱っていましたが、この街のものは規模が大きく、広さのある二階建てで、品揃えが豊富でした。

さっそく二人で歩き出しました。

私が読む本は、もっぱらミステリーでした。この嗜好は、お父さんの影響と言っていていいと思います。なぜなら私のお父さんである西野正彦しのまひこは、探偵なのです。普段の仕事は浮気調査などなのですが、お父さんの場合、さながらミステリー小説のような事件に幾度となく立ち会ってきていました。直接私がその場にいたことはないのですが、家に来る職場の人や警察官の友人さんたちの話を聞いたかぎり、間違いありません。

それに、私のお母さんである西野浅美にしのおさみは、助手としてたびたびお父さんの仕事について行って、そのときにつけたのであろう手帳を私は何度か目にしたのですが、殺人事件の情報っぽいものを書いてありました。

そんなわけで、ミステリーを数多く読んできている私は、絶対と言い切る自信はないものの、最近は途中でだいたい犯人が分かるようになってきました。啓介にこのことを言うとすごいなと感心してくれませんが、正直そこまでのことではないと私は思っています。

いい例が、二ヶ月前の事件です。私たちが真っ先に疑われてしま

って、日々の生活がしづらくて仕方なかったので、自分たちで真相を突き止めようと動き出しました。その結果として、犯人を割り出しましたが、本当の犯人ではありませんでした。私はまだまだなのです。

一方の啓介は、ミステリーはおろか、本をまず読みません。おまけに、いざ読み出すと着眼点はいいのに、いつも真相へはあと一歩が足りません。頭がいい啓介にしては、意外な部分です。ただ、二ヶ月前のときは逆で、本当の犯人を見つけたのは啓介でした。

「またミステリーか。買うより、正彦さんに話を訊いた方が面白そうだけだな」

本屋で私が品定めをしていると、横で本を興味なさげに見ていた啓介が言いました。

「確かにそうかも。でも、話してくれないと思うよ」

「だろうな。うちの親たちも、何にも教えてくれないし」

啓介の両親はさつきも言ったように、私の両親と知り合いです。

高校時代の同級生で（啓介のお父さんは一ヶ年下ですが）仲がよく四人でいることが多かったそうです。

啓介のお父さんは、藤山剣路さんふじやまけんじ。刑事さんです。階級は、たぶん警部だったと思います。お母さんは、藤山江摩さんふじやまえま。専業主婦です。

学生時代にも、私たちの両親は色々な事件にあっていたようで、顔を合わせると時たまその話題になっています。

「凄惨な事件だったから、話さないのかな」

ですが、私たちに詳細を話すことはありません。酔っているときに、ちらりと漏らすくらいです。

「さあな。なににせよ、聞かせたくないのは明らかだけど」

特別気になっっている様子なく、啓介は別の本をめぐり出しました。

啓介が関心を持つものは、この世に数少ないのです。

「そうだね」

うなずいてから、私は二冊のミステリーを手にしました。

本を買った後、服を見に何店か回りましたが、結局試着すらしませんでした。

「今、何時？」

「五時前。服を全然見なかったから、いつもよりだいぶ早いな」

私が時間を尋ねると、啓介が腕時計を確認して答えくれました。

「でも、買わなくてよかったのか？」

「うん。また今度にする」

「そっか」

何気ない会話をしながら、駅の方へ向かいます。その途中、ビルの立ち並ぶ大通りを歩いていたら、

「あら、もしかして、沙夜ちゃんじゃない？」

女の人の声に呼び止められました。

「ふえっ？」

振り向くと、肩より少し長い髪の中年女性が立っていました。すぐにその人の記憶が引き出されます。

「三山さん？」

確信が持てなかったので、おずおずと口にしました。すると彼女は、明るい笑みを浮かべました。

「そう！ 覚えててくれたんだ。嬉しいわ」

合っていました。内心、ほっとします。

「誰だ？」

啓介が、身をかがめて耳元で訊いてきました。

「三山凛子さん<sup>みやま凛子</sup>。昔、お父さんが解決した事件の関係者だったみたい。お母さんと仲がよくて、何回か私も会ったことあるの」

「ふーん」

私と二人でいるのを邪魔されたので、私にしか分からない程度に、啓介は眉をひそめました。こういうところを見るとにやけそうになるのですが、知り合いの人の手前なので、ぐっと堪えました。

「そっちの男の子は、彼氏？」

三山さんは世のおばさんの例に漏れず、にやけながら啓介のことに触れてきました。

「はい。藤山啓介くんっていいいます」

誰に対しても関係を隠さないなので、素直に認めます。啓介が私の紹介に合わせて、

「どうも」

無愛想に頭を下げました。明らかにへそを曲げています。

しかし、三山さんにそれを察した様子はなく、

「この子が啓介くんか。浅美さんから聞いてたとおり、いい男じゃない」

いかにも楽しそうに笑いました。

「はい。本当に」

言うまでもないことなのですが、肯定を返しておきます。正直、いい男という言葉だけでは、啓介のよさを表すにはあまりにも足りません。

「言ってくれるじゃない。若いわね。羨ましいわ」

本心からの発言ではないでしょうが、嫌味っぽさがありませんでした。

「浅美さんも、何言ってるんだか」

私の隣で、啓介がため息をついて、額に手を当てました。

「お母さん、隠し事できない性格だから」

私が苦笑すると、

「というか、よほどのことじゃないと隠さない人だな」

啓介が言い換えました。確かに、正しい表現はこっちっぽいです。しかし、偶然であるのね。こっちまで用事で出て来たら、まさ

か沙夜ちゃんと会えるなんて思ってたわ」

私たちのやりとりが聞こえていない三山さんは、また別のことを口にしました。言われてから、初めて疑問を覚えます。

「そういえば三山さんって、お住まいはこっちの方じゃないですよ  
ね」

「ええ。昔馴染みに呼ばれて来たのよ。ただ、早く来すぎちゃったから、時間が余って、今はブラブラしてたの」

尋ねると、軽快に自分の状況を話し出しました。私は気にせず聞きますが、啓介は若干イライラしていました。外から見た感じ分かりづらいますが、普通るときより微かにつり目の角度が上がっています。

「そうだ。今から、その昔馴染みの娘さんと会うんだけど、沙夜ちゃんたちも来ない？ 私とじゃ歳が違いすぎて、間を持たせる自信がないのよ」

いきなりの提案でした。そばで啓介がぼそりと、  
「別に、受け答えがなくてもしゃべり続けるだろうに」

文句を口にしました。実際、私もそのとおりだと思っただのですが、何かが後ろ髪を引きました。

「沙夜？」

断ると思っていたのでしよう、考え込む私を見て啓介は怪訝な顔を向けてきました。

「勘か？」

「うん」

私の考えを読み、啓介が尋ねてきました。おずおずとうなずきます。

「なら、沙夜の好きにするといい」

「うん、そうする」

優しい微笑に、さつきより大きくなうなずきを返しました。

それから三山さんに向き直って、

「私もついて行きます」

そう言いました。

本当に、ただの勘で決めたことでした。

三山さんの誘いを承諾した私たちは、駅前の喫茶店へと連れて行かれました。古馴染みの娘さんとの待ち合わせ場所なのだそうです。その子が三山さんを家まで案内する間に、古馴染みさんは晩ご飯の準備をするという段取りとのことでした。

店内は、壁も床も木の模様にされていて、森の中にいるような落ち着いた雰囲気でした。流れている音楽も、聞こえるか聞こえないかの微妙なところで、いい味を出しています。ただ、外の通りが見える窓は無機質な銀色の枠で、周りともまったく合っていない感がありました。

私たちは同席させてもらうだけなので、コーヒーを一杯だけ飲むうと思っていたのですが、「なんか頼みなよ。お代は私が持つから」という言葉に始まった三山さんの押しに負け、私の前にはチーズケーキがありました。頼んでしまったからには、仕方ありません。おいしくいただくことにします。

それから、主に私と三山さんと雑談していると、  
「あつ、三山さんですよね」

私たちの座っている席の前に、肩にかかった薄い茶色の髪をヘアピンでとめている、目の大きな女の子が来ました。身体が細く、背は私より高そうです。なにより気になったのは、同じくらいの歳と聞いていたのに、見た感じ高校生より上だということでした。

「あら、天音ちゃん。久しぶり。また綺麗になったわねー。声だけじゃなくて、見た目もますます麻子に似てきたわ」

三山さんが顔を上げ、笑いかけました。どうやら、この子が古馴染みの娘さんのようです。

「まあまあ、座りなさいよ」

立っている彼女に、三山さんが二人掛けの席を詰め、自分の隣に

作ったスペースをバンバンと叩いて示しました。

「あつ、失礼します」

天音さんと呼ばれた女の子は、それに従って席に腰を沈めました。「ところで、この人たちは？」

それから、私たちへ目を向けてきました。物腰は柔らかいですが、たぶん警戒していると思います。当然の質問でした。

「ああ、この子たちね。私の知り合いの子供さんたちなの。左は西野沙夜ちゃん、右は藤山啓介くん。たまたま会ったから、つれて来ちゃった」

三山さんの紹介に合わせて、私たちは一言挨拶を添えて、軽く頭を下げました。

「そうですか。私は日橋<sup>ひはしあまね</sup>天音です。大学一年生。あなたたちは、高校生？」

「俺も沙夜も、高校一年生です」

問いかけに答えたのは、啓介でした。初対面の人への窓口は、基本啓介なのです。

「まだ一年生ですか。若いですね」

「何言ってるのよ。天音ちゃんも、まだまだ若いじゃない」

天音さんが漏らした言葉を、三山さんは笑い飛ばしました。

「からかわないでくださいよ、三山さん」

天音さんが目くじらを立てます。けれど、三山さんは意に介さないように、

「からかつてるわけじゃないわ。本当のことじゃない。私から言わせれば、天音ちゃんも沙夜ちゃんもおんなじようなもんよ」

私たちたちにとっては大きな差を、同じようなものとくりました。天音さんが額を押さえ、ため息をつきます。えてして、元気なおばさんには、誰もかなわないものです。

「それより、天音ちゃんもなんか頼みなよ。お代はおばさんが出すから」

「けっこうです。お母さんから、早く連れて来るように言われてま

すし」

さっきの年齢の話で疲れたのか、天音さんは肩をがっくりと落としていました。うつむいたまま、三山さんの勧めに断りを入れます。と、そこで携帯のバイブ音がしました。自分の携帯をとっさにカバンから出し待ち受けを開きましたが、午後十七時十分と表示されているだけでした。私ではないようです。啓介を横目で見ると、自分の携帯を確認したりはしてなく、天音さんの方に顔を向けていました。どうやら、振動しているのは彼女のもののようです。

「誰だろ？」

本人もそれに気づいたようで、そうつぶやきました。テーブルの死角になっていて見えませんが、彼女は自分の左側に置いた小さなカバンを、膝の上に移してまさぐっているようでした。数秒でスライド式の携帯を見つけ出すと、すぐに通話にしました。

「もしもしお母さん？」

画面の表記で分かっていたのでしょう。一言目から、お母さんと呼びかけました。

「うん、会えたよ。隣にいる。あつ、そうだ。ちょっと待って」

彼女は一旦、携帯から耳を離し、マイク部分を抑えながら私と啓介の方を見てきました。

「ここで会ったのもなんかの縁ですし、あなたたちもうちでご飯を食べに来ませんか？」

「えっ、そんなの悪いですよ」

突然の申し出に、私は胸の前で両方の手のひらを向けて、わたわたと動かしましたが、

「大丈夫ですよ。うちのお母さん、料理好きですよ」

「でも……」

「遠慮しないでくださいよ。お母さん、晩ご飯、もう二人分追加ね」強引に話を通されました。会ったばかりである人を誘う方法とは思えません。私は口を開けたまま固まりました。

「まあ、もう少し付き合ってみてもいいだろ。沙夜の勘も気になる

し  
見かねた啓介が、私にだけ聞こえるくらいの声量でつぶやきました。

「勘だから嫌なの。これで何もなかったら、時間の無駄だし」

口では、反論してみたものの、

「でも、気になるんだろ？」

啓介には通じません。私の考えは筒抜けなのです。

「うん」

今度は素直に、うなずきました。

「三山さんも、もういるよ。……そんなに心配しなくても大丈夫。

……うん、了解」

電話なので切れ切れではありませんが、天音さんは元気よくはきはきとしゃべっていました。残念ながら私の耳では、彼女のお母さんの声を拾えません。きつと向こうも笑っているだろうなどは想像できる口調です。

それから天音さんは、電話口では必要ない首肯をつけ、幾度か相づちを繰り返してから、

「分かった。今変わるね。三山さん、お母さんが替わってほしいって」

携帯を三山さんに差し出しました。

「私に？ あとどうせ話すでしょうに」

呆れたような言い回しでしたが、顔にそんな様子はなく、笑いを堪えきれずに、目や口が緩んでいました。携帯を受け取ります。

「ごめんなさい、三山さん。私、ちょっとお手洗い行ってきますね」

「はいよー」

渡してすぐに、天音さんが立ち上がりました。三山さんが彼女と目を合わせて、了解の意を示します。そのまま、言っていたとおりお手洗いへ向かって行きます。

「もしもし、麻子ー？」

彼女が見えなくなるよりも前に、三山さんは相手の名前を呼びま

した。天音さんのお母さんは、日橋麻子ヒナシマコというようです。

「あれ……？」

と、三山さんが訝しげな表情を浮かべ、携帯を離して画面を凝視しました。

「どうかしたんですか？」

私の代わりに、啓介が尋ねました。彼女はポリポリと頬をかいて私たちの方を見て、何か言いかけてましたが、

『凜子ー？』

「あつ、うつん、なんでもない」

麻子さんの声が漏れ聞こえてきたことに、ほっと一息つきました。私たちに問題解決を示して、左手を振ってきたので、身を引きました。いったいなんだったのでしょうか。

それにしても、三山さんが携帯を離していたおかげで、初めて麻子さんの声を聞くことができました。かろろじて耳に届くくらいの音量でしたが、娘さんと同じように元気のある声でした。

「ああ、なるほどね。って、危ないじゃない、それ！？」

何を言われたのか、三山さんが目を丸くします。それを皮切りにしばらく彼女は高らかに笑ったり、寂しげに目線を落としたり、肩をすくめたりと、せわしなくしていました。

やがて、

「えっ、ホントに？ 分かった。じゃあまたあとでね」

三山さんは、電話を切りました。携帯が天音さんのものであるのを思い出し、どうするか迷って固まっていたいましたが、テーブル上のまだ戻ってきていない彼女の位置に置きました。

「切ってしまったってよかったですか？」

尋ねたのは、また啓介でした。

「ええ。誰か尋ねて来たから、またあとでって」

「そうですか」

質問しておきながら、啓介の反応は無感情でした。本当に質問したかったのは私なので、興味がないのです。その私も、少し気にな

っただけだったので、あまり変わりはないのですが。

「沙夜ちゃんも、もうケーキ食べ終えてるし、天音ちゃんが戻って来たら、出ましようか」

しかし、無愛想な対応を気にとめず、彼女はお手洗いのある方へ半身を向けました。すると、ちょうど天音さんが戻って来ました。

「あれ、電話切ったんですか？」

席に座る前に、テーブルの上に置かれた携帯と三山さんを交互に見て、首をかしげました。

「うん。どうせ、あとで会うしね」

「まあ、別にかまいませんけど」

お母さんとまだ話しておきたいことがあったのでしようか、引っかかるものの言い方でした。頭をポリポリとかき、腰を下ろします。「ああ、座ったところ悪いんだけど、沙夜ちゃんがケーキ食べ終えたいし、そろそろ出ようと思うんだけど」

あまり悪いと思っていなそうな言い方をし、三山さんは天音さんへ顔を向けました。

「まだ、コーヒー一杯も飲んでないんですけど」

天音さんはじとりとした目で見返しました。声も低めで、非難の色が見てとれます。

「そついえばそつか。じゃあ、天音ちゃんがコーヒー飲んでから出ましょ」

それを分かっているのかいないのか、三山さんは承諾しました。朗らかな笑顔を見せているので、たぶん後者だと思えます。すぐに天音さんはコーヒーを頼み、私はそれを待つ間にお母さんへ晩ご飯がいらぬ旨を連絡することにしました。携帯を開くと、十七時二十分という表記が、目に入りました。

結局、私たちがお店を出たのは、十七時四十分でした。日が以前

より長くなっているとはいえ、すでにけっこう暗くなっています。

会計は、最後まで天音さんが遠慮しましたが、三山さんが全額持ちました。たいした金額ではありませんが、おごりというのはやはり好感を抱きます。

「じゃ、行きましようか」

会計を終え、最後に出てきた三山さんが私たちを見回しました。

「そうですね、行きましよう」

天音さんが応答し、彼女を先頭にし、私たちは歩き出しました。

大通りを、駅とは逆方向に進んで行きます。日橋家は駅から少し離れた場所にあるようです。

「ここから、どのくらいかかるんですか？」

私が持った疑問を、啓介が天音さんに訊きました。

「だいたい十分、十五分ですかね。ビル街を抜けて、そこからもう少し行かないからちよつと遠いんです」

「そうですね」

啓介の反応は、さっきとまったく同じでした。吹き出しそうになったので、下を向いてこらえます。

そしたら、

「笑うな」

「あたっ」

こめかみ辺りを軽く小突かれました。

「仲いいですね」

そんな私たちのやりとりを、三山さんは左前にいるので右肩越しに、天音さんは右前にいるので左肩越しに、こちらへ首を曲げました。発言したのは、天音さんの方です。

「ええ」

間髪入れずに、啓介は肯定しました。

「羨ましいの、天音ちゃん？」

ここぞとばかりに、三山さんが口を挟みました。私たちに向いていたニヤニヤが、天音さんに対象を移します。

「羨ましい……。そうですね、羨ましいかもしれないです」

「あら、素直に認めちゃうか。もっと面白いリアクションするかと  
思っただのに」

ですが、狙いがはずれて、三山さんは目をしばたたかせました。

「でも、天音ちゃん美人じゃない。男の子から人気あるんじゃない  
のー？」

すると今度は、また別の切り口でからかいにいきました。たくま  
しいというか、なんというか。

「もう。三山さんは、すぐにそういうことを」

「いいじゃない。若い人の話って、面白いんだもの」

天音さんががつくりとうなだれますが、三山さんは一向に気にす  
る様子がありませんでした。

「で、どうなのよ、実際。告白されたりとかないの？」

「ノーコメントです」

顔を上げないまま、天音さんは弱々しく答えました。

十七時五十五分。私たちは、日橋家へとたどり着きました。

中心街から離れた住宅街にある家の一つで、青い屋根を持つ二階  
建ての一軒家です。

「じゃあ、お母さんをお母さんと呼んで来ますから、ちょっと待ってくださ  
い」

二人で玄関から迎えたいということで、私たちを門の前に置いて、  
天音さんは家の中へ入っていきました。

「それにしても、家に呼ばれるなんて、ずいぶん仲がいいんですね」  
今度は、私が自分で尋ねました。

「そうね。昔から一番仲がよかつたし。それに……」

いつも朗らかな三山さんが、珍しく目線を落としました。

「それに……？」

彼女の意味ありげな態度を不思議に思い、私は続きを訊こうとしました。が、できませんでした。ただならない事態が訪れたために。「きやああああああ!!」

それは、甲高い悲鳴でした。間違いない、目の前に建つ家から聞こえてきたものでした。

「なっ、何!？」

慌てる三山さんを横目に、

「……啓介!」

「さすが沙夜。かなわないな」

私たちは家の中に踏み込みました。

「えっ、ちよつと二人共!？」

後ろから三山さんの声が聞こえましたが、無視して玄関に滑り込み、ドアを閉めます。

家の中は静かでした。というより、静かすぎます。正面左にある、リビングへ続いているのだろう廊下の先からテレビの音はしますが、料理をしているような音は一切ありません。右には二階に上がる階段がありますが、そちらからも物音は聞こえませんでした。

「沙夜、あれ」

とりあえず靴を脱いでいると、先にながった啓介が廊下の途中にある落ちているものを指差しました。私もそれを見ます。

「電話?」

床に破片を飛び散らせ、受話器部分も吹き飛んでいる、電話機でした。二人で近づいて確認します。

「沙夜、ハンカチあるか?」

「うん。はい」

「ありがとう」

まだ何があったのかは分かりませんが、最悪を想定し指紋を残さないようハンカチ越しにいじります。

「コードが切れてる。本体も反応なし。明らかに壊れてるな」

どうやら、見た目どおりのようです。

「リビングに行く」

「そだね」

素人にできる検証を済ませ、啓介が立ち上がりました。私も同意します。

「ま、待って！」

と、玄関のドアが開いて、三山さんが遅れて入って来ました。慌てながら靴を脱ぎます。

「入ろう」

どうせリビングはすぐそこです。彼女が横に並ぶのを待ってから開ける必要はありません。リビングへのドアへ近づき、ハンカチを手にしたままの啓介が、思い切り開きました。

「あっ、あ……」

啓介の脇から顔を出した私の目にまず入ったのは、腰を抜かし、青い顔をしてテーブルの足に寄りかかっている天音さんでした。声にならない声を出しています。私たちから見て左側につけばなしのテレビがあることから、おそらく右にあると思われるキッチンの何かから目を離せないらしく、私たちの方をまったく見ません。

「天音ちゃん！」

目を見開き、口をパクパクさせている彼女を見て、私たちを押しわけ三山さんが駆け寄って行きました。

「どうしたの、天音ちゃん!？」

「あ、うあ……」

肩に手を回し問いかけましたが、天音さんは返事すらまともにもできていませんでした。

「いったい何が……」

そして三山さんは首を曲げ、彼女の視線の先にあるものを確認し、絶句しました。私と啓介も、彼女たちが目にしているものが見える位置に動きます。

やっぱり、そこはキッチンでした。ただ、そこにあったのは、魚でも牛でも豚でもなく、仰向けの状態で目を見開き倒れ、首

に延長コードを巻かれている、調理なんてできそうにない、人間の死体でした。

「まさか、本当に起きるなんてな」

啓介がひそかに言いました。

## 二章 初動

「と、とにかく救急車を」

三山さんが、天音さんの肩に乗っけているのと逆の手で、携帯を取り出します。

「待った」

それを啓介は制止しました。多少は動揺していますが、冷静です。「なんでよ！ 早く呼ばないと、麻子が」

三山さんが啓介の方に顔を向け、声を荒げます。しかし、啓介は気にとめず、生死を確認するため、床に倒れている女性のそばに行つてしゃがみました。首筋に指を当て、続けて目をいじります。瞳孔を見ているのだと思います。もっとも、そんなことをしなくても、彼女の開かれた目を見れば、どんな状態かは察しがつきます。私もさつき一目見て、はつきりとそうだと思いました。

「もう死んでる。救急車も別に呼んでかまわないが、呼ぶなら警察だな」

彼女はやはり、すでに死んでいました。

「そ、そんな」

三山さんは、後ろから見ても分かるくらいはつきりと、肩を力なく落としました。天音さんは、まだ固まっています。私も、ただ立ちすくんでいました。

私たち女性陣の動きが止まっている間に、啓介は現場を観察し始めました。手始めに、死体の首に巻かれた延長コードを見ます。いじると、あとで警察の人に何を言われるのか分からないので、あくまで見るだけみたいですが。

「くう……」

その間になんとか踏ん切りをつけたようで、三山さんが喉の奥から絞り出すような唸りを上げて、電話をかけました。たぶん、警察に。

啓介は彼女に一瞥もくれず、続けて全身を眺めました。どうやら特別目立った部分はなかったようで、すぐに顔を上げます。次に、キョロキョロと首を動かして辺りを見回しました。すると、何かを見つけたらしく、一度止まりました。それから、他のところにも注意を向けていましたが、特別目を引くものはなかったようで、立ち上がりました。私の方へ戻って来ます。

「どうだった？」

私が尋ねると、

「死体はだいたい見たとおりだ。たぶん、絞殺での窒息死。首筋に残った痕を調べれば、凶器があつた延長コードだつて確定できるだろう」

啓介は淡々と報告してくれました。

「抵抗した様子はあつた？」

「いや、なかった」

「なかった？」

「ああ。本当に、何一つ見当たらなかった」

首をひねりました。普通、絞殺のような相手が死ぬまでに時間がある方法の場合、被害者が暴れたり首に巻かれたものをとろうとして、周囲が荒れたり首に自分の爪でのひっかき傷などがあるものなのです。

「まあ、何も痕がないのもありえなくはないからな。ただ単に、今回は残らなかつただけなのかもしれない」

啓介の意見には一理あります。ですが、何か釈然としないものがありました。ただの思い過ごしかもしれませんが。

「それよりも、見逃せないのは、後ろから首を絞められてることだ」  
啓介が話題を変えます。意図を汲み取り、私はその状況の示すところを口にしました。

「つまり、背中を見せるような、顔見知りの犯行の可能性が高いってことだよな」

「そういうことになる」

啓介がうなずきました。キッチンからはダイニングを見通せるので、仮に誰かが侵入したらすぐに分かります。犯人が知り合いでなければ、背後から首を絞めるのは難しいのです。

「あと、死体のそばに携帯があった。中は見えてないけど、どうしてキッチンにあるのがちよっと引っかかるな」

この言い回しだと、どうやら啓介が動きを止めたのは、携帯を見つけたときのようです。

「なんで引っかかるの？」

「まな板が出しっぱなしで、切り途中の食材がゴロゴロしてた。ふたは開けてないけど、コンロの上に鍋もあった。調理中だったのは間違いない。そんなときに、携帯を持ち込むか？ ありえなくはないが、リビングのテーブルの上でもいいはずだ。キッチンとなると水とか火に近い」

一理あるかもしれませんが。ただ、料理中でも携帯を懐に入れてる人もいてしかりだと思いますが。

「そういえば、食材は何人分くらいだった？」

キッチンに関連して、訊きました。私たちの分も足されているなら、五人分あるはずですよ。

「どう見積もっても、三人分よりは多くなかった」

「三人分……」

啓介の返答によって、一つの仮説が組み上がりました。

「彼女を殺したのは、電話を切るきっかけになった、訪問者さんかな？」

「今ある情報だと、そうなる」

啓介が同意しました。

料理の量が五人分と決まったのは、喫茶店で天音さんが私たちも晩ご飯を一緒にすると決まっていたからです。となると、キッチンに五人分の食材が出ていないことから、電話を切るときに来た訪問者が殺害したと仮定すればつじつまが合います。もう二人分を足す前に殺害されたと考えればいいのです。

「次は向こうだな」

啓介が、私の背後へ視線を送ります。私も振り向いて、「そうだね」と、同意しました。

キッチンの逆側には、右奥隅につけっぱなしの液晶テレビが台の上に鎮座し、それを見やすいように、L字型でソファが置かれています。真ん中には、リモコンが放置されている、小さなテーブルがあります。正面と右には、庭への窓もありました。鍵は閉まっています。カーテンは開いています。

「そんなに変なところはないかな？」

私が見た感じ、こちら側にもおかしいところはありませんでした。

「啓介はなんかある？」

隣で目を光らせている啓介に尋ねました。

「いや、俺もない」

同意見でした。こちら側には、今のところ不審な点はないようです。

「うーん。そうになると、取っ掛かりになりそうなのって、あれだけかな」

私が言ったのは、廊下に落ちている、壊れた電話機のことでした。本体の損傷だけならまだしも、コードが切れていたので、故意に破壊された可能性は高いです。となると、誰が連絡してきたのかを隠すためとするのが自然です。

「あ、あなたたち、さっきから何を話してるの？」

考えていたところで、天音さんの傍らに屈んでいる三山さんから声をかけられました。啓介と二人で、彼女の方へ首を動かします。

「現場の状況です」

啓介が、無表情で答えました。三山さんが、顔をしかめます。

「なんでそんなことを。あなたたちは、警察じゃないでしょう？」

なんだか怒っているようでした。お友達が亡くなっている状況で、私たちが平然としているのが気に入らないのでしょうか。

「確かに警察じゃないな。でも、沙夜は名探偵の血を持つてる」

彼女の態度をまったく気にせず、啓介は横目で私を見て微笑みました。そのアングルが素敵で、ドキツとします。

「名探偵の血……」

私の両親の世話になったことがある彼女は、その意味を察し、静かに繰り返しました。

「あんたも、知ってるはずだ。正彦さんの驚異的な推理力を。その娘である沙夜も、その能力を受け継いでる」

真顔に戻り、啓介はひとかけらの疑問さえも持たず、断言します。

「そう、なの？」

三山さんが、私に視線をスライドさせました。慌てて首を横に振ります。

「そんな、とんでもないです。私には、そんなのありませんよ」

「あるよ。俺が保証する」

けれど、私の否定を、啓介はさらに否定しました。

「小説であろうとドラマであろうと、沙夜は必ず犯人にたどり着ける。作中の探偵が、真実に至る前にな」

間違いではありません。ですが、あくまで小説やドラマは、架空の物語にすぎないのです。

「フィクションなら確かにそうだったかもしれないけど、現実の事件はそうもいかないよ。二カ月前の事件だって、私がたどり着いたのは誤答だったし」

目を伏せながら、反論します。例の事件で、私は真実に行き着けませんでした。啓介が気づいてからやっと分かったのです。こんな私では、お父さんの域はあまりに遠いです。山の頂上どころか、雲の上の存在。羽でもなければ、姿すら見えません。

「あれは、俺が意図的に情報を制限したからだ。推理に必要なピースが揃ってなかったら、名探偵でも真実には至れない」

啓介は、それも突っぱねます。

「それに、前にも言っただろ。沙夜が自信を持ってなくても、その分俺が信じるって。沙夜は、探偵の能力を持つてる。間違いなく」

さらに言葉を足しました。細められた目、まぶたの間から覗く瞳、わずかに持ち上げられた唇、横目で私を見下ろす角度、すべてが醸し出す妖艶さに魅了され、私は何も言い返せなくなりました。たぶんわざとです。とにかく信じてほしいということだと思います。

「まだ反論するか？」

「ううん」

もう十分でした。啓介がここまで言ってくれるなら、疑う必要もありません。とはいえ、前の事件でも同じような展開を踏んだ気がしますが、忘れておくことにします。

「なら、分かったの？ 正彦さんの推理力を受け継いでるなら、犯人が誰か分かるはずよ！」

再び啓介に押しきられたところで、三山さんが話を事件に戻し、問いかけてきました。眉はつり上がり、目は見開かれ、声は部屋の中に響き渡りました。言つては悪いですが、鬼のようでした。友人の殺害が、すでに犯人への怒りとなっているのでしょうか。

そういえば、いのちに確認すべきことを忘れていました。大前提になっていたのどつい思い込んでいましたが、亡くなっている彼女は私たちの思っている人なのでしょうが。

「まだ、犯人は分からない。探偵が推理するには、情報がある。まだ、それが全然足りない」

私が死体が誰であるのか尋ねる前に、血管を浮き出させている三山さんへ、啓介は平然と答えました。あまりに冷静すぎるからか、さらに噛みつかれます。

「知らないわよ、そんなの！ 殺人なんでしょう？ 麻子が殺されたのよ！？ 早く犯人を捕まえてよ！」

無茶な要求でした。まだ死亡推定時刻すら分かっていない現状では、とても推理など展開できません。お父さんなら、何かの取っ掛かりをすでに発見できているかもしれませんが、私はまだ何も掴めていませんでした。

とはいえ、偶然ながら誰の遺体なのかの確認ができました。やは

り、殺されたのは日橋麻子さん、天音さんのお母さんのようです。「落ち着いてください。じきに警察が来ます。そうすれば、もたらされる情報も増える。もしかしたら、探偵の出番なんていらない、簡単な事件かもしれない。とにかく、どう足掻いたって、まだ犯人にはたどり着けません」

面倒臭そうに、啓介は三山さんをなだめました。言い聞かせなければならぬ状態だからなのか、不徹底ながら敬語に戻しています。「何が探偵よ。お父さんの真似事のくせに」

三山さんは犯人にぶつけるべき怒りを私たちへの不満に変換して吐き捨てると、唇を噛んでうつむきました。

そのあと、啓介は一人であちこちチヨロチヨロしていました。警察が来るまで、私たち女性陣は何もせず、沈黙していました。

それから十分と経たないうちに、警察の方々が駆けつけました。まず来たのは所轄の人で、現場検証のために私たちはリビングを出され、二階の寝室に移されました。しばらくして、廊下から県警の捜査一課の人が合流したという話が聞こえました。

そして、

「げ。なんでお前らがいるんだ」

そこに在籍している啓介のお父さん、剣路さんが、事情聴取のために寝室に入って、最初に言ったのがこれでした。私と啓介がいることに、露骨に顔を歪めています。

「第一発見者だよ。言っておくけど、今回は間違いなく潔白だ。疑われる要素すらない」

啓介は軽く肩をすくめました。まったく動じていないようです。殺人事件が発生して、お父さんは捜査一課という環境からして、想像どおりの展開なので、当然だったりします。

「あれ、また息子さんがいるじゃないですか」

「藤山啓介さんに、西野さんまで。どうしてこんなところに」

その後ろから、部下である二人の刑事さんがついて来ました。どちらも二カ月前の事件で知り合った刑事さんたちです。先にしゃべった男の刑事さんが、鷹井さん。次に口を開いた、堅苦しい言い回しの女刑事さんが、中村さんです。

「あ、お久しぶりです」

二人を見て、私は頭を下げました。

「これはご丁寧にも」

「はい、お久しぶりです」

鷹井さんは苦笑しながら、中村さんは真顔で、それぞれあいさつを返してくれました。

「で、どうしてここにいるの？」

それから、鷹井さんがもう一度疑問を口にしました。啓介が受けます。

「第一発見者だからです」

「えっ、本当に？」

「本当です」

「それはまた、なんというか、血は争えないというか」

顔色一つ変えていない啓介に対し、鷹井さんは頬をポリポリとかきました。剣路さんがため息をついてから、

「正彦先輩が事件現場に居合わせてたときの島盛さんの気持ちを、こんなところで理解することになるなんて思ってもみなかったな。ため息の一つも出るわけだ」

がつくりとうなだれました。島盛さんというのは、私のお父さんや剣路さんがお世話になってきた刑事さんです。現在はすでに、定年まで数年というお歳だからかあまり表には出ず、指揮を執ることが多くなっているそうですが、的確な判断と指示によって、県警内でかなり信頼されているという話を聞いたことがあります。余談ですが、剣路さんは頭が上がらないそうです。

どうして今、その名前が剣路さんの口から出たのかはつきりとは

分かりませんが、言い様から察するに、昔はお父さんが、私たちのように事件現場に出没していたようです。

「何を言っても仕方ないでしょう。第一発見者であることは動かしようがありません。彼らが気になるのも理解はしますが、事件のことに戻りましょう」

剣路さんが肩を落としている理由を仕方ないの一言で流し、平然とした態度で中村さんが進言しました。

「分かってるよ。いつもどおり、一人ずつ別の場所に呼んで話を聞いていく。一番は日橋天音さんだな」

とりあえず私たちのことは脇に置いたのでしょうか、剣路さんは顔を上げ、寝室の中を見回しました。ベッドに腰掛けて、自分たちに背を向けている若い女性に目を留めます。さっそく、彼女の方へ近づいて行きました。回り込んで、話しかけます。

「日橋天音さんですね？」

「はい」

天音さんは、お母さんの死体を発見したときからずいぶんと落ち着いていて、弱々しい声ながら、しっかりと返事をしました。表情は、入り口に近い位置の私からだとも見えません。

「事件についてお話を聞きたいので、ついてきていただけますか」「分かりました」

了承すると、彼女は重たそうに腰を上げました。かすかに覗いた横顔は、まぶたが半分閉じられていて、消えてしまいそうな印象を受けました。

「それじゃあ、付いて来てください」

剣路さんが促し、彼らは寝室の扉へ歩き出します。私たちから天音さんの正面が見えました。顔全体が確認できても、表情の虚ろさは横顔で捉えたイメージと変わりません。

「中村は俺と一緒に来てくれ。鷹井はここで待機。トイレに行つてもらうのはかまわないが、全員から話を聞き終えるまではここにいてもらわないといけないから、頼むぞ」

「はい」

「心得てます」

扉の掴みを握ったところで、剣路さんが部下の二人に指示を出しました。それぞれが返事をし、中村さんを加え、三人の人間が寢室を後にしました。

「あなたたち、刑事さんと知り合いだったの？」

扉が閉まったところで、ベッドを挟んで向かい側の、化粧台のイスに座っている三山さんが、身体を乗り出して訊いてきました。声を落としています。鷹井さんは私たちのすぐ横にいたので、誰に聞かれたくないのかがいまいち分かりません。狭い部屋なので、もう一人いる制服姿の刑事さんにも聞こえているでしょうし。

「知り合いというか、あの仕切ってた刑事が、俺の父親なんです」  
「父親!？」

予期していたとはいえ、お父さんの登場に辟易した感じで啓介が答えると、三山さんは高い声を上げて、目を丸くしました。私の両親とは面識がありますが、啓介の両親はまったく知らなかったようです。

「あの人三山さん？」

鷹井さんが啓介に顔を寄せ、キョトンとしている彼女について確認してきました。

「そうですよ」

啓介が横目を向けて答えます。訊くまでもないだろうというようなニュアンスが入っていましたが、

「そうバカにしないでくれよ。一つ一つ、何度も確かめていくのが仕事みたいなもんなんだ、俺たちは」

苦笑いしながら、鷹井さんは弁明しました。私も、珍しく啓介ではない方にフォローを入れます。

「そうだよ、啓介。推理だって、そういう部分あるし。一つ一つの情報をきちんと積み重ねないといけないから、しつこいくらいの確認は大事なんだよ」

「ほら、沙夜ちゃんだってこう言ってるし」

後ろ盾を得た鷹井さんが、啓介に理解を求めました。

「分かりました」

すると、素直に受け入れてくれました。さすが、私の主張はすぐに認めてくれるのです。

「ありがとう、啓介くん」

「お礼を言われることじゃないですよ」

啓介は鷹井さんに向けて、肩をすくめて見せました。

「お礼ぐらい、素直に受けとればいいのに。まあ君は、沙夜ちゃんからのお礼しか喜ばなそうだけど」

鷹井さんが茶化します。啓介は何も返しませんでしたが、凶星でしょう。私としては、それでいいのですが。他の人からのお礼になんて、喜ばなくていいのです。

「にしても、どうしてこんなところに？ 君らの住んでる街じゃない上に、他人の家だろ」

返事は期待していなかったのか、彼は話題を変えました。

「あとで、事情聴取の結果を聞けばいいじゃないですか。二度手間はごめんです」

啓介は淡白でした。髪の手を目的なくいじっています。確かに、あとで剣路さんたちに話すので、いらない説明ではありません。

「別にいいだろ。暇なんだ。それに……」

「それに？」

含みのある言い方に、剣路が髪をいじるのをやめ、鷹井さんへ目を向けました。彼は、背後にいる制服の刑事さんを横目で確認してから、

「こつちの情報、ほしくないか？」

私たちだけに聞こえるように、ささやきました。

「いいのか、そんなことして。今度の俺たちは容疑者じゃないけど、リークは御法度だろ」

「何、島盛さんだって、昔は正彦さんにリークし放題だったらしい

し、バレなければ問題ない。それに、二カ月前に君らの推理を役立たせてもらったし」

ぼそぼそと、内緒話が進みます。三山さんは、怪訝そうに額にしわを寄せてこちらを見ていましたが、何かしようという気はないようで、ただそうしているだけでした。制服の刑事さんも、県警の人と用もないのに関わりたくないのか、特にこちらに気を払っている様子はありませんでした。

「君らの話を聞きながら、こっちの情報も出していく。推理には、しつこいくらいの確認が必要なんだろ、沙夜ちゃん」

「えっ、あつ、そうです」

唐突に話を振られ、私はただどしく肯定しました。鷹井さんは満足そうに微笑みます。

「どうだい。暇つぶしに」

問われた啓介は、私へ視線を送ってきました。笑って、うなずいてあげます。啓介も私に笑い返してから、鷹井さんへ向き直りました。

「分かりました。暇つぶしには、ちょうどいいでしょう」

「よし。じゃあ、さっそく始めよう」

声は落としたままながら、鷹井さんは嬉々として手帳を開きました。ペンを右手に持ちます。

「まずは、君らがここに来た経緯から頼む」

「はい」

受け答えは、いつものように啓介がこなします。三山さんに会ってから、死体の発見までを、手短かに話しました。要所を押さえた内容に、心の中で私は感心しました。さすがです。

「なるほど。だいたい君らの経緯は理解した。しかし、そもそも三山さんの話に乗った理由が、沙夜ちゃんの勘とはね。やっぱり、天性のものがあるんじゃないか？」

話を聞き終え、鷹井さんは私へ目を向けてきました。かなり真剣な表情です。何も返せずに困っていると、彼の視界の真ん中だろう

辺りに、啓介が顔を突っ込みました。「うおっ」と、鷹井さんが目を見開き、若干仰け反ります。

「それで、そつちからの情報は」

啓介の声は尖ってました。イラついた雰囲気を感じたのか、

「ん、ああ。話すよ」

頬を引きつらせた笑顔をして、コクコクと鷹井さんはうなずきました。

「殺されたのは、君らの考えどおり、日橋麻子さんだ。娘さんの確認は俺たちが来る前に取れてるし、部屋から見つかった免許証の写真とも一致していたそうだ。死因は頸部圧迫による窒息死。凶器は首に巻きっぱなしだった延長コードでまず間違いない。指紋はなしだ」

声はかなり抑えていました。ここまでは、だいたい見たままなので、素人の私たちでも想像がつくレベルの話です。啓介が、専門家でないと分からない部分を訊きます。

「死亡推定時刻は？」

「詳しくは解剖待ちだが、死斑と死後硬直を確認したかぎりだと、二時間は経ってないんじゃないかって話だ」

「二時間経っていない……」

啓介がつぶやきます。この部屋のベッドの枕元にある目覚まし時計の表示によると、現在時刻は十八時半。つまり、十六時半より前に死んでいたというのは、まずないということです。

「おまけに君らの話だと、喫茶店にいたとき麻子さんから電話があったんだろ？ それは何時だった？ 分かれば、殺された時刻がかなり絞れる。訪問者のこともあるし、思い出してくれないか」

「ええ。でも、時間はそこまで正確には覚えてませんね。十七時過ぎくらいだとは思ってますが」

鷹井さんに尋ねられ、啓介は口元に手を当てます。いつも万能ですが、完璧というわけにはいかないようです。

「えと……」

でも、今回はたまたまながら、私がフォローできます。あんまり記憶力に自信はありませんが。

「沙夜は覚えてるのか？」

私が口を開いた理由を、啓介がすぐに察して、こっちを見ました。まじまじと見つめられると恥ずかしいのですが、そんなことを言うのもまた恥ずかしいので、我慢して問いかけに答えます。

「うん。ちょうど、携帯の時計を確認してたから。電話がかかってきたのは、十七時十分で、切れたのは二十分だと思う」

「十七時二十分か。で、麻子さんが電話を切った理由は、例の訪問者があつたからってわけだ」

鷹井さんが、しゃべりながらペンを走らせます。とても早いのですが、ちゃんとした文字になってるんでしょうか。

「その訪問者について、何か分かったことは？」

私がそんなことを気にしていると、啓介が続けて尋ねました。

「詳しくはまださっぱりだけど、現状だと周辺からの聞き込みの報告で、どうやら男がこの辺りで見かけられているらしい」

「男ですか」

「たぶんつてところだけだな。情報元は近所の人間たちなんだが、だいたいが買い物帰りにちらっと見ただけとか、信憑性に欠けるものらしい。本当に訪問者なのかどうか分からない。見た人数も少ないようだし」

手帳をパラパラとめくりながら、鷹井さんは答えました。この感じだと、決定的な情報は期待できなそうです。

そう思った矢先、彼は手を止め、私たちに対して真剣な目をしました。

「ただ、気になる部分がある」

「気になる部分？」

啓介がオウム返しで訊きます。

「ああ。なんでも、その目撃されていた男っていうのは……」

鷹井さんが言いかけていたところで、寢室の扉が開かれました。

私たちを含め、全員の目がそちらに向けられます。

「こちらで待っていてください」

「分かりました」

すでに部屋にいる人とはまた別の制服警官さんに連れられ中に入ってきたのは、背のあまり高くない、やや痩せ気味の男性でした。

無表情で、まぶたが少し下がっています。物静かそうな印象でした。

「あなたは……」

彼を見て、三山さんが立ち上がりました。どうやら知っている人のようです。男性の方は思い当たっていないのか、彼女の方へ目は向けたもの、表情は変化しませんでした。

「どなたでしょうか？」

鷹井さんも腰を上げ、新しい登場人物に対します。男性は、小さな音量で問いに返答しました。

「日橋麻子の夫で、日橋京太ひはしきょうたといえます。麻子が殺されたと連絡を受けたので、急いでやって来ました」

麻子さんの旦那さんでした。

「ああ、旦那さんですか。今回は本当にお気の毒に」

素性を知り、鷹井さんは声を低くしました。表情は見えませんが、少なくとも私には、心の底から麻子さんの死を悼んでいるように聞こえました。

「ご丁寧に、ありがとうございます」

京太さんは眉一つ動かさないうえま、頭を下げました。入ってきた時からそうなのですが、どうも奥さんの死を悲しんでいる様子があります。

「奥さんの遺体は、もうご覧になりましたか？」

「ええ。真っ先に見させてもらいました」

続けての問いに対して、顔を上げた彼は、冷たすぎに思えるくらい淡泊でした。眉一つ動いていません。

「悲しく、ないのかな」

思わず私は、感じた疑念を口に出していました。かなり声は抑え

ていましたが、啓介には届きません。

「そんなことはないと思う。外見には、分かりにくいけどな」

「本当に？」

「本当に。あの人の両手を見れば分かる」

「両手を？」

言われたとおり、両手を見ます。どちらも下に伸ばされていて、拳は固く握られています。

「普通の状態なら、あんな強く拳は握らない。もっと楽にさせてるはずだ。逆に言えば、あの人は今、普通の状態じゃない。何かの理由で、感情を抑えてる。この状況で原因だと思えるのは、奥さんが殺されたことくらいだ。あくまで、ただの予想だけだな」

「そっか」

少し安心します。証拠はないので、もしかしたら啓介の見立ては間違っているかもしれませんが、私にはそれが合っているように思えました。愛していた人が死んだのなら、悲しくなるはずです。

「ところで、天音は、娘はどこでしょうか」

京太さんが、部屋を軽く見回しました。娘さんの姿がないのが、心配なのでしょう。無表情ですが、やっぱり見た感じとは違い、心の中で色々な感情が渦巻いているのかもしれない。

「天音さんなら、今は事情聴取中です。あとで京太さんにも受けていただくことになりますね。もし、今すぐ娘さんとお会いになりたいのであれば、上司に掛け合ってみますが」

気を使って、鷹井さんがそんな提案をしましたが、

「そこまではなさらなくてけっこうです。こちらで待たせていただきます」

やはり淡白に言って、京太さんは首を横に振りました。

「そう、ですか。そしたら、落ち着けないとは思いますが、こちらで待っていてください」

「はい」

今度は縦に首を動かし、彼は私たちがいるのとは逆側の壁に歩い

ていき、背中をつけて体重を預けると、うつむいて目を閉じました。部屋にいた誰もが、どこか普通の人と雰囲気の違いに、気を引かれていました。

その彼に、

「あんたが、京太さんね」

三山さんが立ち上がって接近しました。彼女を、無感情な瞳が捉えます。

「失礼ですが、あなたはどちら様でしょうか。麻子の友人の方ですか？」

発せられた声は、暗く冷たいものでした。問いかけに対し、彼女も同じような調子で返します。

「そうよ。あんたが半ば見捨てた、麻子の友達よ！」

急に、静かだった寝室に怒声が響きました。驚いた私は、思わず啓介に身体を寄せました。三山さんには動揺していなかった啓介は、私にはびっくりしたのか、バツとこつちを向きましたが、私であることに気づくと、

「大丈夫だ」

もつと引き寄せてくれました。啓介の左肩に、顔を埋める格好になります。鷹井さんが「なんでそうなるの？」と言ったのが聞こえた気もしましたが、無視します。私と啓介がすることを誰がどう思おうと、関係ないのです。

「私が麻子を見捨てた、ですか」

「そうよ！」

三山さんが激昂しますが、京太さんに動揺の色はまったく見られません。壁にもたれて、ただ自分に突っかかってきた人間を冷静に見つめています。

「あんたがちゃんと、麻子のそばに居てやれば、こんなことにはならなかったわ！」

さらに彼女は詰め寄りました。周りの人たちは、まだどう対応すべきか考えあぐねていました。そもそも、どうして怒っているのか

が分からないのです。啓介が動かないのは、単純に関心がないからというだけですが。

「私は……」

京太さんが何か言いかけたところで、寢室のドアが外から開かれました。

「おや。皆さんどうかしましたか？」

取り調べを終えた、剣路さんたちでした。自分たちが出たときと明らかに違う雰囲気を感じたのでしよう、全体に向けてそう尋ねました。

「えつとですね」

鷹井さんが説明しようとしたが、

「お父さん？」

天音さんの声で切られました。彼女を見ながら、弱く両肩を落とします。

「天音が」

「うん」

彼女はゆっくりとお父さんの近くに行きました。三山さんと険悪な空気になっているのに気づいたのか、二人を交互に見比べます。

「あの、どうかしたんですか？」

まず、三山さんに訊きました。

「それはその……」

問われた彼女は、しどろもどろでした。答えをまたずに、続けて京太さんに目を向けます。

「何があつたの？ それに、どうしてここに？」

「別に何も。あと、ここに来たのは、麻子が死んだっていう連絡を受けたからだ」

彼の振る舞いは、さつきまで絡まれていた事実などなかったかのようでした。態度も声も、非常に落ち着き払っています。

説明を受けた天音さんは「そう」、とだけ言って下を向き、事情聴取に呼ばれる前と同じく、ベッドの上に座りました。

寝室にいた人たちは、それぞれ沈黙して、彼女へ目を向けていました。三山さんや鷹井さんは呆気にとられていて、啓介や京太さんは興味がないのか涼しい顔です。剣路さんと中村さんは単純に何も分かっていないので、しばらくすると彼女から目を離し、寝室内の人たちを順々に見始めました。私とはいうと、周りを見つつ、頭を働かせていました。

考えていることを啓介に言おうとしたところで、

「三山さん」

剣路さんが淀んだ空気を切り裂いて、呼びかけました。

「は、はい」

応じた三山さんは、天音さんの介入のせいか、すっかり毒気が抜けてしまったようでした。怒気のかけらも残っていません。

「お話を聞きたいので、来ていただけますか」

「分かりました」

むしろ、どことなくしおれた様子で寝室を出て行きました。

「なんだったんだ？」

鷹井さんがぼそりと口にした、事情の分からない人たちの代弁を小耳に挟みつつ、未だ私を片手で抱き寄せてくれている啓介の顔を見上げました。

「ねえ、啓介。今の、どう思う？」

「ん？ そうだな……」

“今の”というのは、先ほど三山さんが京太さんに迫った一件のことです。啓介は、しばらく私から目を離して考えると、

「あの言い草だと、この家の夫婦は、あんまりうまくいってなかったって感じたな」

興味なさげに、肩をすくめました。やっぱり、啓介も私と同意見のようです。

三山さんは京太さんへ、“半ば麻子さんを見捨てた”と言い放ちました。うまくいっている夫婦には、まず使われない表現です。私が信じていた、京太さんの拳を握った理由がぐらつきます。不仲で

あつたとしたら、悲しみをこらえていたという推測は怪しくなってしまう。

しかし、

「ただ、三山があの人に見捨てた云々を言った瞬間、拳の握りもつと強くなつたけどな」

「それ、本当？」

啓介の追加した情報が、私の中でぐらついた京太さんへのイメージを、支え直しました。

「ああ。なんでもなさそうな感じを装ってはいたけど、明らかに拳に入れる力が増してた」

ただ、完全な立て直しではありません。まだ、イメージの軸が揺れていました。いい人と非情のどちらかに傾けられるほどの判断材料がないのです。

しかし、県警の捜査が初期段階も終わっていないので、鷹井さんからの情報は得られませんし、私たちも自由に動けません。今、判断材料を増やすのは、無理そうでした。

やがて三山さんの取り調べが終わり、続いて啓介が呼ばれました。私も一緒に行きたかったのですが、一人ずつだと、剣路さんに突っぱねられました。うう……。仕方なく、私は時々話しかけてくる鷹井さんにしどろもどろな言葉を返しながら過ごしました。

啓介の番が終わると、次は私でした。行きがけに、  
「三山さんから、天音さんの家庭事情を訊けそうだったら、訊いてみて」

と頼み、剣路さんと中村さんに連れられ、寝室を出ました。

事情聴取の場所は、彼らの乗ってきたパトカーの中でした。家の中では現場検証が続いているので、仕方ありません。私の事情については、すでにほとんど啓介から聞いているからなのか、説明して

いる私より、剣路さんたちの方がうまくまとめられていました。ただ、事件現場に居合わせたそもその理由が私の勘であるという部分に話が進んだとき、剣路さんはかなり大きなため息をついていました。結局、たいしたことは訊かれずに、私は寢室に戻されました。やっと、啓介の隣に戻ります。剣路さんたちは、京太さんと呼ぶと、またパトカーへと向かって行きました。

「大丈夫だったか、沙夜」

「うん、平気だったよ」

パトカー内での自分の受け答えを思い出すかぎり、大丈夫と言えるものではありませんでしたが、私個人の状態には問題がないのでうなずきました。

「親父たちは一苦労だっただろうな」

私の言葉の意味合いを察して、啓介は意地悪そうに唇の端を持ち上げました。それ自体は、この場にはない剣路さんへ対するものなのですが、私も一応言い訳をしておきます。

「だって、どうしてもうまく話せないんだもん」

「沙夜は人見知りだから仕方ない。でも、それで他人を避けてくれるから、俺としては助かる。俺以外と話すことが減るからな」

啓介はさらっとそんなことを言いました。恥ずかしさで顔が火照ります。

「そ、そういえば、三山さんから話は聞けた？」

啓介にはごまかしても無駄なのですが、それでも恥ずかしさをごまかそうと、話題を変えます。すると、啓介は表情を変え、真剣な目をして、人差し指を立てた右手を口の前に持っていきましました。

「声、落として。鷹井は気づいたうえで黙認してるけど、もう一人の警官に気づかれると面倒だ」

「う、うん」

言われるままに声量を下げ、首を縦に振ります。啓介も軽くうなずき返してきました。横目で、室内にいる鷹井さんとは別の刑事さんを確認します。私も啓介の横から顔を出して覗いてみます。退屈

そうに、窓の外を見ていました。

「大丈夫そうだな」

啓介は私と見つめ合うように、曲げていた首を元の位置に戻しました。さらに、声をできるかぎり絞れるよう、顔をかなり近づけてきました。ち、近いです。

「もう少し離れる？」

啓介がいたずらっぽく笑みを浮かべます。分かっているわざわざ訊いてくるのですから、なかなか意地悪です。

「このままで、いい」

「了解」

むしろ、こっちの方がいいです。啓介は満足そうに目を細めました。

それから、頬を引き締め、話を始めます。

「三山によると、日橋京太と日橋麻子は別居状態だったらしい。詳しい原因は分からないが、とにかく京太は、この家じゃなく、一人でアパート暮らしをしている」

「その話って、証拠はあるの？」

「三山は麻子から直接聞いたと言っている。俺の見たかぎり、あの女の中では嘘じゃない」

まどろっこしい言い方ですが、要するに三山さんの思い違いということはありえるということです。

「以前から三山は、何度か麻子と連絡を取っていて、その中で京太と疎遠になっっていることを知っていた。さっきも言ったが、理由は分からない。ただ、あの女の個人的な意見だと、京太が一方的に家族への関心をなくしたからだそうだ」

「うーん。簡単に切り捨てはしないけど、初対面のイメージって感じもするかな」

頬をかきまします。先ほどの三山さんは“あんたが京太さんね”というようなことを口にしていたので、顔を合わせたのは始めてのはずです。無表情な彼を見ての意見であるように思えます。

「そうだろうな。あの態度じゃ、仕方ないような気もするが」

啓介も同意して、首をすくめて見せました。含みのある言い方をしたので、私はすぐに尋ねました。

「啓介から見ても、京太さんって家族に無関心？」

「いや。断定はできないが、逆だと思う。拳を強く握っていたのもあるし、あの人は天音さんのことを気にかけているような態度や言動もあつた。無関心だとは思えない」

「だよな」

回答をもらい、うつむいて考え込みます。短い時間ですが、これまでのところ、端々に彼が家族を想っているような部分がありました。ですが、一方で麻子さんと親しかつたのであるう三山さんは、彼は家に居着いていなかったと証言しています。さらに、彼の振る舞いは無感情です。いまいち、別々の視点をつなぐ彼の像が見えてきません。どちらか間違つた内容なのか、それとも第三、第四と、視点を増やすことで像を作り上げることができるのか。

「もっと色んな人からの話を聞かないとだめそう、かな」

結局、今はこれに落ち着ざるをえません。小説でも、最初は決定的な情報は入らないものです。あくまで、これは現実ですが。

「天音さんからは何か聞けないかな？」

「沙夜が訊いてきてほしいなら、今行つてくるぞ？」

「うーん」

啓介に尋ねられ、口元に手を当てて考え込みます。この場で事情聴取されるのは、今の京太さんで最後のはずです。ある程度はバレるでしょうが、私たちが探っていることは剣路さんに知られたくないところです。

そこで寝室の扉がまた開かれ、剣路さんたちが戻つて来ました。考える必要がなくなります。

「皆さんお疲れ様です。京太さんたちには申し訳ないのですが、現場検証がまだ完全に終わってないので、まだしばらくこちらにいてください。三山さんはまたこちらから伺うことになるかもしれませ

んが、お帰りいただいてけっこうです」

室内の全員を見回しながら彼が言ったところ、

「いいえ。天音ちゃんが心配なので、私もこちらに残らせてもらいます」

三山さんは天音さんのそばに寄り、帰宅の意志がないことを示しました。天音さんは動きませんでした。

「はあ。別にかまいませんが」

剣路さんは少し額にしわを寄せましたが、禁止はしませんでした。天音さんに三山さんが語りかけます。

「今日はここに泊まっていくから、しっかりね天音ちゃん」

しかし、やはり天音さんに反応はありませんでした。

剣路さんは頭をポリポリとかいてから、私たちの方を向き、

「あと、お前らに関しては一さつさと帰れ」

右手の人差し指で玄関のある方向を差しました。

「分かってるよ」

啓介は、顔色を変えずに答えました。剣路さんは、さっきよりも深く額にしわを寄せましたが、それ以上何も言ってきました。

「帰ろう、沙夜」

「うん」

差し出された左手を右手で掴み、私と啓介は軽く頭を下げて寝室を出ました。今は、こんなものでしょう。ただ、玄関を出たところで一っだけ聞きそびれたことがあるのを思い出しました。

「そういえば、京太さんが来たせいで聞きそびれちゃったけど、鷹井さんが言ってた、死亡推定時刻の前後にこの辺りで見られた男の人って誰だったんだろ。啓介は聞いてる？」

「ああ、そういえば沙夜にはまだ言っていなかったっけ」

駅に向かって歩き出したところで、私は啓介から耳を疑いたくなる名前を聞きました。

「目撃されたのは、もしかしたら日橋京太かもしれないとさ」

### 三章 夫婦の矛盾

翌日の昼休み。私と啓介は空いていた自習室にいました。机を並べ、隣合って座っています。

「じゃあ、始めるか」

「うん」

私がお弁当を食べ終えたところで、啓介が手帳を開き、私を見てくださいました。うなずきを返します。

何をするのかといえば、

「鷹井さんからは、たつぷりと捜査情報をもたらしたしな」

これでした。机の上に広げられた手帳には、びっしりと文字が書き込まれています。昨日の晩のうちに、情報をもたらっていたのです。

「まず、何からがいい？」

「そうだな……。じゃあ、検死と現場検証の結果からお願い」

「了解」

啓介は手帳を指でなぞっていき、その二つに関する記述を声に出して読み始めました。

「検死からいく。死因はやっぱり頸部圧迫での窒息。凶器は首筋の痕から遺体に巻かれていた延長コードに断定された。死亡推定時刻はだいたい十六時半から十七時半の間。外傷はなしだ」

「十七時半……」

麻子さんからの電話が、十七時二十分の少し前に切れたことを考えると、かなり時間は絞られます。

「次に現場検証についてだが、かなり大事な点が一個上がってる」「大事な点？」

啓介の言葉に、私は身を乗り出しました。

「日橋麻子、天音親子以外の指紋が、リビングから見つかった。おまけにあんまり時間が経っていないものかな」

思わず、目を見開きました。かなり、重要な情報です。

「誰のかはまだ分かってない。ただ、ところどころに指紋を慌てて拭き取った痕があつて、その中に残っていたから犯人のものだつていう可能性はかなり高い」

「具体的には、どこに残つてたの？」

「リビングの入り口横の壁と、その下の床とかだ。あと、リビングではないんだが、例の玄関先で落ちていた電話にもわずかに残つていた」

「電話にも……」

うつむいて、思考を巡らせませす。となると、やはり何かしら犯人につながるものが記録されていて、それで壊されたのでしょうか。

「指紋以外だと、たいしたものは発見されてない。キッチンの様子から、調理中だったのが分かるくらいだ。電話の記録に関しても、今復旧できるか確かめてる最中らしいし」

「そつか。でも、通話記録は電話会社にもあるんじゃないの？」

「それが、公衆電話からだったらしいんだ」

「公衆電話？」

私は首を左へ傾けました。確かにそれでは、誰が日橋さんの家に電話したのか分かりません。それに、公衆電話からだとすると、通話記録自体はかけられたという情報しか残りません。とすると、犯人が電話を壊した理由は限られてきます。

「じゃあ、あの電話が壊された理由は、留守電のメッセージとかなのかな？」

「一番ありえるのはそれだ」

啓介も同意します。電話が公衆電話からのものであるなら、これが最も有力です。しかし、別の疑問が浮かびます。

「ねえ、啓介。昨日、麻子さんが家から出た時間があつたかどうかとか、分かる？」

「日橋麻子さんが家から出たかどうか？」

いつもなら、私の意図をすぐに察する啓介ですが、こと推理に係ることだと鈍くなります。個人的には、これはこれで啓介の困

惑顔という貴重なものを見れるので、内心ではかなり嬉がっていたりしますが。なにしろ、普段しない表情なので、私だけのようなものなのです。ちなみに、この感情はバレてます。

頬が緩むのをなんとか耐えながら、尋ねた理由を口にしました。

「だって、麻子さんが一日家の中にいたのなら、留守電なんて“残らない”んじゃない？ 一つ電話がきても対応できたはずだから。あの電話は相手の番号が表示されるタイプだったし、犯人が身近な人間だったという仮定をするなら、わざと受話器を取らなかったというのは、まずありえないんじゃないかな。トイレに入っていたとかは、考えられないこともないけど」

要するに、彼女が家に一日いたなら、留守電は残っていないはずということですよ。

「ああ、なるほどな」

説明に納得し、啓介は手帳をパラパラし始めました。やがて、ページをめくる手を止めます。横から覗いてみたところ、どうやら個々の取り調べ情報のようです。今更ですが、バレたとき鷹井さんがどうなるか心配になります。

「何か見つかった？」

とはいえ、気に病んでも仕方ありません。どうせ向こうから持ちかけてきた話です。啓介の顔を覗き込みます。

「ああ。日橋天音からの供述によると、天音が大学から帰宅した午後十五時半以降は、三山を迎えに家を出た午後十七時前まで麻子は外に出かけてないそうだ」

「そっか」

訊いておいてなんなのですが、在宅を証明できているのが一時間半だけというでは、正直弱いんです。

啓介もそこは分かっているようで、

「言っても、こんな短い時間帯だけじゃ意味がないか。麻子が一日いた証明には、足りなすぎるな」

左手で頬杖をつきました。

「他にはないの？」

「悪いけど、ない。そもそも、天音が家にいなければ麻子は一人だ。その間の在宅を証明するのは、かなり難しい」

私の求めたものを出せないために、啓介は額にしわを寄せました。いろんな顔を見るのは楽しいですが、あんまり気落ちさせるのも心苦しいので、話題を変えることにします。これ以上、電話に関して新しいことは分からなそうですし。

「じゃあ、それは一旦置いとこ。他に現場検証で分かったこと、ある？」

「他か。そうだな……」

私の言葉を受け、啓介は手帳のページを先ほどのところに戻します。

「窓はどの部屋のも閉められていた。ただ玄関は、天音の証言でも鍵が開いていたのが確認されているから、密室ではなかったことになる」

それは、私たちもある程度認識していました。啓介が続けます。

「あと、料理はやっぱり三人分だったらしい。元々は女性三人だから、少なめだったらしいが」

「三人分……」

私たちの分が足されていないことからすると、やはり天音さんからの電話を切つてすぐに殺害されたということでしょうか。

「残りは、現場に落ちていた携帯の履歴だな。これがまた、なかなか意味が分からない」

啓介がまた眉間にしわをよせます。どうしたのでしょうか。

「どうということ？」

「おかしな点が二つあるんだ。まず、指紋が拭き取られていた」

何か変でしょうか。触ってしまったから、拭き取られただけの話だと思つのですが。

そんな私の考えを読んで、啓介が説明を加えます。

「変なのは、指紋が消されてること自体じゃないんだ。データを消

されたりとか、そういう痕跡がないのに、犯人がどうして携帯に触れたのが問題なんだよ」

「犯人が携帯に触れる理由がなかった、ってことか」

確かに、それは変です。下を向いて考え込みますが、何も思いつきません。

「それから、もう一つだ。天音への発信記録はきちんと残っていて、それはどうということはないんだが、“京太への発信”が、ほぼ一日一回ペースで、かなり多く残っている」

「京太さんへの？」

どおりで、啓介が渋い表情をするわけです。三山さんによると、日橋さん夫婦は疎遠だったはずなのに、密に連絡を取っていたこととなります。

「ああ。事情聴取のときにはまだ分かっていたいなかったから、京太には確かめていないけどな」

「何か問題でも抱えてたのかな」

仲が悪化している夫婦が、そんなに話をしていたとすれば、理由はそれくらいしかないはずです。

「分からない。ただ、あの家には不自然なところがある。証言を見ると、より顕著にな」

「証言……」

私が一番気になっていた部分でした。すべてが明らかになるとは思えませんが、ある程度の取っ掛かりにはなるはずです。

「まとめていくぞ。まず三山からだ」

啓介がページをめくります。一人ごとの証言が、まとめられています。

「日橋夫婦は別居中だった。これは、麻子本人の口から聞いたことがあるらしい。原因は京太にあるに違いないというのは、三山の意見だ。麻子とはたびたび連絡を取っていたが、家庭についての相談はしてもらえなかった」

ようするに、別居だったということ以外は、個人の考えというわ

けです。信憑性に欠けます。

「次に日橋天音。両親は不仲というよりは、互いに関心を段々持たなくなつて、そのうちに離れたそうだ。ただ、時たま三人でご飯を食べることもあつて、京太は完全に家族への興味をなくしていたわけではないんじゃないか、と言つていた」

「食事……」

「どうやら、疎遠と言つわりには交流があつたようです。何か、携帯での発信の多さと関係があるのでしょうか。」

「最後に日橋京太。別居は事実で、理由は一緒に生活する意味を感じなくなつたから。ただ、妻と娘が嫌いになつたわけではなく、月に一度食事に行くなどしていた。今日は仕事を早めに切り上げ、自宅に帰るつもりだったが、妻が死んだという連絡を受けて駆けつけてきた。そういう経緯のために、職場を離れてからは一人だったのでアリバイはない。ちなみに職場は、日橋麻子らの家からもそれほど遠くない場所にある。と、まあこんなところだ」

三人の証言には多少の差違は見られるものの、別居中であることなど、客観的な事実では筋が通つています。逆に、疎遠になつている理由に関してはバラけています。

それよりも気になるのは、

「例の目撃証言については訊いてないの？」

昨日、日橋の家の近くで見かけられた人物が、京太さんなのではないかという情報のことでした。

「いや、訊きはしたらしい。でも、本人は否定した。警察の方も、決定的な証拠はないから、疑いの比重が増えたくらいで、進展するかどうかは未知数な状態だそうだ」

「未知数、か」

目撃証言がさらに増えるか、物証が出ればというところなのでしよう。なににせよ、現時点で重要な情報なのは確かです。

「他には何かあるか？」

「他は……」

啓介に訊かれ、伝えられてきた証言を頭の中で整理します。一つ、引っかかるものがありました。

「食事をしていたっていうことかなあ」

このことが、どうにも腑に落ちませんでした。

「そんなに気になるか？ 別に離婚はしてないし、京太も興味がなくなってきたとは言っても、会いたいときがあったとかつてくらいだと思っただが」

啓介は重要視していないようでした。しかし、私は妙に引っかかっています。喉に小骨が刺さっているような、微細な違和感がありました。

ぐるぐると、頭の中でここまでの情報を回します。別居していたわりに、密な連絡と月一ページの食事。現場での、京太さんの強く握られていた拳。一つ一つを糸でつないでみると、一つの仮説が導き出されました。ただ、そうだとすると、理由が分からないことがあります。

「どうなってるんだろ？」

抱いたことを、そのまま口にします。私の推測に対して、あまりに彼らの証言は矛盾していました。

「情報不足、か？」

悩んでいると、啓介が口を開きました。私が推理を巡らせていたので黙っていてくれたのでしようが、行き詰まったのを見て取って区切りを入れてくれました。

「そうなる、かな。とりあえず、事件と関係してるか分かんないけど、一つ仮説ができたから、確かめてみないと」

「仮説？」

「うん」

深くうなずきます。

「で、どうやって確かめるんだ？」

「自分の足で回ってみようと思う」

鷹井さんに調べてもらおう気はありませんでした。どうせなら、暇

つぶしも兼ねた方が得です。さらに他の利点もあります。

「かなり風変わりなデートになりそうだな」

その利点は、やっぱり啓介には見透かされていました。

放課後、美術部顧問の高橋先生に一度顔を見せて、私は啓介と、ある場所へ向かいました。

街の中心から離れた住宅街。その中にある、青い屋根を持つ二階建ての家の前に私たちはいました。昨日も訪れた、日橋さんのお家でした。

「しかし、初っぱなからここに足を運ぶなんてな。どんな仮説を立てたんだ？」

家を見上げながら、啓介が疑問を口にします。推理の内容を、私は伝えていませんでした。正直、まだ曖昧な部分が多いので、言うべきか迷うのですが、

「啓介には話しくべきかな。調べてもらいたいこともあるし」

これからしようとしていることを考えると、選択の余地はありませんでした。

啓介が門の横にある呼び鈴を押すと、

『どちら様でしょうか？』

恐々といった感じの音がスピーカーから聞こえてきました。カメラはついてないみたいです。

「藤山啓介です」

『啓介くん？ ちょ、ちょっと待ってくれる？ 今行くから』

名字だけだと剣路さんと間違われるのを考慮して、啓介がフルネームを伝えました。今度は、驚きからかスピーカーからの声が高く

なっていました。女性のものなのですが、三山さんでしょうか。

ほどなく、その三山さんが玄関の扉から姿を見せました。私たちであるのを確認すると、外に出てきて、こちらに近づいてきました。

「あら、本当に啓介くん。それに沙夜ちゃんまで。どうしたの」

口角を上げていますが、目が笑えていません。瞳に生気が足りないので。麻子さんが死んだのは昨日なので、当たり前前なのですが。

「皆さんに、色々お訊きしたいことがありまして」

啓介がニコリともせず、用件を言いました。悲しんでも、死を悼んでもいません。三山さんの顔から、無理して作っていた笑みが消え、眉間にシワが寄ります。

「あなたたち、まだ探偵ごっこをする気？ これは、現実で起きた殺人なのよ。小説とか漫画とは違って、本当に人が亡くなってるの。面白半分で、素人が、それも子供が首を突っ込んでいいことじゃない」

眉をつり上げ、かなり厳しい表情を浮かべました。抑えてはいませんが、たぶん怒ってます。自然と私は、啓介の背中に回りました。

「そうですね。確かにそのとおりです。でも、一つだけ訊かせてください」

後ろにいるので、目で見ることはできませんが、三山さんと正面から向き合っている啓介は、まったく動じていません。私だから分かります。私以外の人では、私に関わる話でないかぎり、どんな感情を向けても、啓介は涼しい態度なのです。

「あなたは、早く麻子さんを殺した犯人を見つけたいと思いませんか」

問いかけた瞬間、三山さんはまぶたを目一杯広げ、啓介を凝視しました。言葉を待つまでもなく、彼女の答えは明らかです。

「沙夜には、確かな推理力がある。俺が保証します。あなたがもし本当に犯人を早く知りたいなら、たどり着く可能性は多い方がいいと思いますよ」

その反応を見て、啓介がさらに押しをかけます。言われた後、三山さんはうつむき加減に視線をあっちこっちに飛ばし始めて、迷っている様子でした。

と、

「何かあったんですか、三山さん？」

玄関から別の女性の声がしました。私たちは、一斉にそちらへ顔を向けます。儂げにまぶたを三分の一ほど閉じている天音さんが、そこにいました。

「天音ちゃん！ 表にはでなくていいって言ったじゃない！」

三山さんが私たちに背を向け、慌てて駆け寄っていきます。

「そんなに心配しなくても大丈夫ですよ。私ももう大学生ですし」

「そうは言うけど、ただでさえお母さんを失ったばかりのあなたに、負担はかけたくないの。何かあるか分からないんだから、私に任せてちょうだいな」

気丈な態度の天音さんに、三山さんは両肩に手を置いて訴えます。彼女なりの心配なのでしょうが、

「そういうわけにはいきません。ここは、私の家ですから」

丁寧に、両手は振り解かれました。彼女の横を、天音さんが通り過ぎます。

「天音ちゃん……」

天音さんの身体と重なって、わずかにしか見えませんでした。三山さんの表情は、目元が下がり悲しげでした。

「こんにちは。藤山くん、西野さん。何か御用ですか？」

私たちの方へ歩いてきた天音さんは、痛ましげな笑みを湛えました。

「少し、皆さんに事件のことでお訊きしたいことがあって」

彼女に対しても、言葉を返したのは啓介でした。

「そうですね。そういえば、藤山くんは昨日の刑事さんの息子さんで、西野さんは有名な探偵さんの娘さんでしたね。母を殺した犯人を、突きとめてくださるんですか？」

「ええ。そのつもりです」

ためらいなく啓介はうなずきます。天音さんは、考え込むようにうつむいてから、

「分かりました。できるかぎりの協力を約束します。刑事さんたちは、捜査の進展具合を話してくれませんか。どうぞ、中へ上がってください」

再び、微笑みました。

それから彼女は、私たちに背中を向け、玄関へ歩き出しました。啓介と一緒に後ろから続きます。

「本気なの、天音ちゃん？ この子たちは素人なのよ」

すると、玄関へ行くのを邪魔するように、三山さんが立ちふさがりました。悲しげな瞳ながら、真っ直ぐに天音さんと目を合わせています。

「本気です。普段の私なら、きつとしないと思いますけど、賭けてみたいんですよ。何かの巡り合わせのように、昨日出会ったこの子たちに。普通ならありえないことをしてくれそうじゃないですか」

対した天音さんの回答はとても漠然としていて、まったく論理的なものではありませんでした。彼女はきつと、“特別”に頼りたいのでしょうか。自分のお母さんが殺されるといふ悲劇の日に、初めて会った人間。しかも、刑事と探偵の子供ときたら、何か運命めいたものを感じても、おかしくありません。

しばらく、二人の女性が見合ったまま、静かになりましたが、

「分かったわ。天音ちゃんがそう言うなら、私も協力する」

先に天音さんが口を開き、あきらめたように肩をすくめてました。「ありがとうございます」

ゆったりと穏やかな口調でのお礼と共に、天音さんは軽く頭を下げました。それから、私たちの方を向きます。

「どうぞ、上がってください」

彼女に対し、私たちは二人でうなずきました。動き出そうとしたところで、

「沙夜」

啓介が私にだけ聞こえるよう、抑えた声で呼びかけてきました。横顔が微かに見える程度に、振り返ってきます。

「何？」

「日橋天音には気をつける。奴からは、何か嫌な感じがする」

なぜ、その判断を下したのか私には分かりかねましたが、素直にうなずきました。普通の人よりも数段上の観察力を持つ啓介の言うことです。それなりの根拠があるのでしょう。気を引き締めて、日橋さんの家へと上がりました。

私たちはリビングに通され、真ん中にあるテーブルに座りました。死体があつたキッチンにはもう何もありませんが、どうしてもそちらを見るたびに昨日の光景が頭をよぎります。

「大丈夫か、沙夜」

「うん。平気」

啓介が、私の顔を覗き込んで心配してくれました。微笑んで見せます。死体の状態が凄惨ではなかったので、思い出しはしても、前の事件で殺人の瞬間を目の当たりにしたときよりは、辛さを感じませんでした。

「やっぱり、羨ましいですね」

私たちのやり取りを目にして、向かい側に腰掛ける天音さんがポツリと言いました。三山さんはお茶を入れに行っているため、今は席に着いていません。

「何がですか」

尋ねたのは私です。天音さんは、どこか寂しげな笑みを浮かべていました。

「あなたが、いえ、あなたの方が、ですね。とても自然に互いを想い合ってる」

「はあ……?」

返す言葉に困り、私は首をひねることしかできませんでした。言っている意味は分かりますが、なぜ今それに言及するのでしょうか。まるで、自分の手にはないものかのように。

「ごめんなさい、待たせちゃって。はい、どうぞ」

話していたところへ、三山さんがお茶を運んできました。私、啓介、天音さんの順に置いていきます。

「あっ、ありがとうございます」

「どうも」

「ありがとうございます、三山さん」

それぞれがお礼を言いました。三山さんは最後に自身の席の前へお茶を置き、座りました。

「じゃあ、本題に入りましょうか」

天音さんが口火を切りました。人が揃ったので、当然ではあります。ただ、その前に一つ気になった点がありました。啓介もだったようで、二人に尋ねます。

「京太さんは、いないんですか?」

人は揃ったと言いましたが、彼の姿がなかったのです。

「はい。父は仕事に行ってますから」

こともなげに答えたのは天音さんでした。三山さんが憤慨した様子を見せます。

「まったく、とんでもない父親よ。仕事が大事なのは分かるけど、親なんだからこんなときくらい子供を優先するべきでしょうに」

「まあまあ、三山さん」

天音さんがなだめました。二人のやり取りを見て、私は自分で口を挟みます。

「ずいぶん、京太さんを嫌ってますよね」

すると、三山さんが私に顔を向け、口を尖らせました。

「だって、父親としても、夫としても、しっかりしてないのよ。好きになれってという方が無理だわ」

「しつかりしてない、ですか」

「ええ。だって、勝手に家を出て、麻子と天音ちゃんを置いていくような人なのよ？ 麻子もなんでさっさと離婚しなかったんだか」  
やはり、かなり嫌悪しているようです。横に座る天音さんは、苦笑いを浮かべました。

「三山さんは大げさですよ。父には父なりの考えや事情があるんです」

「甘いわね、天音ちゃんは。父親らしいことなんて、ほとんどしてもらってないでしょうに」

「いえ、そんなことは」

「別に無理しなくてもいいのよ。今はここにいないわけだし」

あくまでお父さんの味方をする天音さんに、三山さんは諭すように言いました。人の親のいけない部分を、直接子供に聞かせるのもどうなのかという感じがしますが。

「無理なんてしてません。三山さんは、お父さんへの勝手なイメージが強すぎますよ」

さっきまでの呆れていた様子はなりを潜め、反論した天音さんの声は尖っていました。三山さんがひるみます。

「全部憶測じゃないですか。三山さんはこの家の人間じゃないんですから、当てずっぽうでものを言わないでください」

かなり強い口調でした。ここまで反発されるとは思ってなかったのでしょうか。三山さんは、顔を強張らせていました。

一段落したところで、私は口を挟みます。

「天音さんは、ずいぶんとお父さんに好意的ですね」

「え、ええ。実の父親ですし、食事のときに向けてくる目がとても優しいんです。三山さんが言うほど、ひどい人じゃないありませんから」

私たちがいることを失念していたのか、話しかけられた瞬間、肩が少し跳ねました。それでも、返答そのものは冷静です。

「なるほど。優しい目をしていましたか。じゃあ、あなたが見たか

ぎり、食事のときの京太さんは、麻子さんに対してはどんな態度でしたか？」

「お母さんに対して、ですか？」

問いかけると、天音さんは左手を口元に当て、私から目をはずしながら考え込みました。さほど時間が経たないうちに、回答がきま

す。  
「普通って感じでしたね」

「普通？」

「はい。淡泊だったり、白々しかったり、ってことはなくて、かといつてもものすごく親密って感じでもなかったです。本当に普通って感じでした。なんというか、夫婦というよりは、兄妹とかそういう感じの、“家族”みたいな落ち着きがありました」

「夫婦よりも、家族……」

難しいニュアンスですが、身近で親しさがあるものの、男女や友人のそれではなく、身内のものという感じでしょうか。

「けど、京太さんはこの家とは別のところに住んでいるんですよね」

「ええ、まあ。でも、私や母が嫌になったからではないと思うんです」

私が別居のことに触れると、彼女は警察の取り調べのときと同じ主張をしました。

「でしょうね。今までのあなたの話を聞いたかぎりは」

その部分には、賛成でした。天音さんと京太さんの両方が嘘をついていたりしなければ、そう考える方が自然です。

「じゃあ天音さんは、どうして京太さんはこの家から出たと思えますか？」

「だからこそ、別居の理由が気になりました。」

「どうしてか、ですか」

天音さんは、再び私から視線をはずし考え込みます。三山さんが何か言いたげでしたが、京太さんへの印象が偏りすぎている彼女の意見は参考にならないので、訊きません。

「一緒に暮らす意味が、なくなつたからじゃないでしょうか。完全にではないにしろ、興味は離れていたみたいですし」

そして、天音さんの出した答えはこれでした。ただ、本人も半信半疑なようで、自信なさげに首を傾けています。

「なるほど。じゃあ、あといくつかだけ。京太さんと食事をするのは、どこにあるお店でしたか？」

「うーん。毎回この近辺のところでした。バラバラでしたけど、何回かは同じお店だったこともあります」

「この近辺……」

彼女の回答をつぶやいて、繰り返します。私の隣では、啓介がペンを走らせています。情報を、メモしていました。

それから、私が最も気にしている事項を尋ねます。

「あと、お母さんは一人で出かけることは多くありませんでしたか？」

「え、ええ。よく、出かけてました。土曜か日曜とかは特に多くて、時たま平日にも。どうして、分かつたんですか？」

「いえ、なんとなくそんな気がして」

本当はとある推測がありました。言いませんでした。もし、合っているなら、このことを天音さんが知らない、もしくは知らないふりをしていることになりません。そこにはなんらかの理由があるはずでした。安易には話せません。

「京太さんは、昨日からはこちらにいるんですよ？」

「はい、葬儀などのこともありませうから、さすがにこっちにいます。いつ帰ってくるかは分かりませんが、そう遅くはならないかと」

「分かりました。お答え、ありがとうございます」

「そんな、お礼なんて結構ですよ」

私が頭を下げると、天音さんは腰を浮かせて両手の手のひらを胸の前に出してきました。

「いいえ。無理を言ったのはこっちですから」

こっちはこっちで、首を横に振ります。本来なら、門前払いされ

ていてもおかしくないのですから、お礼を言うのは、当然です。

「それより、京太さんにも色々和讯きたいので、帰ってきたら私たちのことを話してもらえますか？ 構わないと言ってもらえたら、携帯の番号を教えるので、連絡してください」

急に話題が飛んだためか、彼女は少しキョトンとしてから、

「わ、分かりました」

前に出していた両手を下ろして、うなずきました。

「それから、三山さん」

「えっ、私？」

話は終わったと思っていたのでしよう。彼女は目を丸くしました。

「お聞きしたいのは一つです。京太さんが家を出てから、麻子さんはどんな様子でしたか？」

「どんなって言われても……。どういふことを言えばいいの？」

「元気だったとか、寂しそうだったとか、三山さん個人の印象で結構ですから、教えてもらえませんか」

困惑から顔を歪める彼女に、私は穏やかな声で言葉を重ねました。  
「そうね……。だいたいは電話とかメールだったんだけど、いつもはわりと静かだったかな。寂しそうといえば、寂しそうだった。けど、時々変に元気な日があったわ」

「元気な日？」

「声が弾んで、妙に機嫌がよかったりすることがあったの。毎日話してるわけじゃなかったから曖昧だけど、十回に一回は、そういう日に連絡をしてたわ。一番最近だと、先週の日曜日かしら」

「先週の日曜日ですか。時間はどのくらいでしたか？」

「昼過ぎくらいだったと思うけど」

「分かりました、ありがとうございます」

質問を終えたので、三山さんにも丁寧に頭を下げました。

「お礼なんていいんだけど、これと事件に何か関係でもあるの？」

私には分からないわ」

彼女は頭をポリポリとかきながら、そう尋ねてきました。理解で

きなくても仕方ありません。彼女が持っている考え方は、あまりに私の推測とかけ離れているのです。

「いえ、少し着眼点を変わったところにしてるだけです。普通の見方だと、警察さんに勝てませんし」

「なるほどね……」

とは口にしたものの、彼女は腑に落ちていない様子でした。かといつて、何をどう疑えばいいかも分からないのでしよう、それ以上問い詰めてきたりもしませんでした。

「それじゃあ、私からはこれくらいです。協力ありがとうございます」

また頭を下げ、今度は立ち上がりました。京太さんがいないのであれば、今の私にはここにいる理由がありませんでした。啓介も、私に合わせて立ち上がります。

と、そこでもう一つ訊いておくべきことを思いつきました。

「そうだ。天音さん、もう一ついいですか？」

「えっ、はい。構いませんけど」

天音さんは、目をパチクリさせました。

「先週の日曜日、もしくはその前後一日、お母さんはお出かけになりましたか？」

「えっと……、はい。日曜日の夜に、出かけました。用件は、分からないですけど」

「そうですか、分かりました。それじゃあ、私たちはこれで」

「は、はい」

キョトンとした天音さんに背を向け、私と啓介は日橋さんの家を後にしました。

私たちが向かったのは、駅周辺の飲食店でした。天音さんの証言どおり、家族で食事をしに来ていたのかを確かするためです。どこも

大勢が来店しているので、一組の家族の目撃情報が得られるとは思えませんが、デート兼京太さんからの連絡待ちには、ちょうどいい時間潰しでした。まるつきり知らない人と話すので、表に立つのは啓介にすべて任せ、いくつか回った結果、一店だけ奇跡的に、店員さんの一人が日橋さんたちを覚えていました。

その人によると、よく友達と来る天音さんが、珍しく家族で来店したのでよく覚えていたとのことでした。はた目から見たかぎり、ごく普通の家族で、京太さんとも天音さんはよく話し、麻子さんも楽しそうだったそうです。ここまででは、私にとってさほど大事な情報ではありませんでした。重要だったのは、このあとの話です。

京太さんと麻子さんは、どこか距離を置いている様子だったそうなのですが、天音さんがトイレに立っている間は、かなり親密そうに話していたと言っています。啓介はしきりに首をひねっていました。私には確信と疑問を同時にもたりました。自分への信頼がないので完璧ではありませんが、なぜ不仲であるはずなのに密に連絡を取っていたのかという理由については、かなりの確信を得ることができました。

私の推測は、おそらく正しい、と。

しかしその確信は、避けて通れない疑問も突きつけてきたのです。

「うーん……」

やっと壁を登りきったのに、後ろに新しい壁が現れ、私はうなりました。元々存在を認識してはいたのですが、いざ対面すると、答えが見つかりません。

隣に座る啓介は、色々訊きたいのを我慢し、黙っています。横目で見ると、口を開きたいのをごまかすように、コーヒーをすすりました。普段クールなので、かなり可愛く感じます。

重要すぎる証言が手には入ったので、私たちは飲食店回りをやめ、

昨日とは別の喫茶店に来ていました。持てる知力を絞り出しています。

と、私の携帯が震えました。手にとって画面を見ると、日橋天音の文字があります。慌てて電話に出ました。

「もしもし？」

『あつ、西野さん？ お父さんが話をしてもいいって。もう家に帰ってきてるから、話すのなら来てください』

「本当ですか？ ありがとうございます。すぐに行きますね」

『はい。では、お待ちしています』

足早に、通話は切られました。久々に啓介がしゃべります。

「京太が話に応じるって電話か？」

「うん。さっそく行こう。ちょうど推理も詰まっていたし」

私と啓介は、再び日橋さんの家へ行くことにしました。

## 四章 状況展開

もうすぐで日橋さんの家というところで、再び携帯が鳴りました。すぐに出ると、

『西野さん！ 今、どこですか！？』

天音さんのうわずった声が聞こえてきました。何事でしょうか。

「天音さんの家のすぐそばまで来てますけど。どうかしましたか？」

『お父さんが、お父さんが！』

「落ちていてください。京太さんが、どうしたんですか？」

彼女の慌てぶりは、尋常ではありません。さっき会ったときの静かさとは、かなりかけ離れていました。

『お父さんが、警察に連れてかれそうなんです！ お母さんを殺した犯人だつて！』

「えっ？」

聞いた瞬間、私は思わず歩を止めました。啓介が訝しげに目を細くします。

『と、とにかく早く来ててください！ お父さんが連れてかれちゃう！』

最早、悲鳴に近い言い方でした。

「わ、分かりました。すぐに行きます」

唐突な展開に頭はついていっていませんでしたが、とにかくそう答えて、携帯を切ると、

「なんか、大変なことになってるみたい！ 急ごう、啓介！」

「分かった。行こう」

啓介に呼びかけ、二人で走り出しました。

日橋さんの家の前には、以前見たことのある、鷹井さんの車が止

まっています。車体の上には、テールランプが乗っています。

と、玄関から何人か出てきました。先頭には中村さんがいます。その後ろには、

「あれは……」

「大変なことって、こういうことか」

剣路さんと鷹井さんに両脇を固められた、京太さんの姿がありました。手錠はかけられていないようですが、うつむいているところから察するに、逮捕と見て間違いなさそうです。

「剣路さん！」

とりあえず後先考えずに、彼を呼び止めました。こちらに顔が向けられます。私たちを認識すると、渋い表情になりました。車に向かっていた足が止まります。

「啓介に、沙夜ちゃん。なんでここに」

剣路さんから尋ねられました、

「これはいつたい、どういうことですか？ 京太さんを逮捕するというのは、本当ですか？」

無視して、逆に質問しました。剣路さんは何か言いたげに、口をわずかに動かしましたが、

「本当です」

声を出す前に、中村さんが私たちに答えました。

「どうして……」

なぜ逮捕に踏み切ったのかという意味です。中村さんもそれを察してくれましたが、

「あなた方に話す必要はありません。そもそも、話せることでもありませんし」

堅物である彼女が教えてくれるはずありません。期待を込めて、鷹井さんに目を向けます。

「俺を見られても困るよ」

しかし、彼も肩をすくめただけで何も教えてくれませんでした。

冷静に考えて、剣路さんという監視の目があるのですから当たり前

です。

「ほら、聞いたとおりだ。話せることはない。どいてくれ、沙夜ちゃん。啓介も」

その剣路さんが、あごでどくように言ってきました。

「……嫌です。ちゃんと、理由を教えてください」

ですが、私は首を横に振りました。退くわけにはいきません。なぜなら、私の頭には、京太さんが犯人とは考えがたい推理が組み上がっているのです。相応の証拠がなければ、納得がいきません。

「はあ……。啓介ならともかく、沙夜ちゃんにこんな食いつかれるとは」

剣路さんは右手で頭を抱えてから、私に向き直り、

「リビングにあった指紋と、京太さんの指紋が一致したんだよ。おまけに、壊れていた固定電話のデータを修復したら、彼からの留守電が残っていた。時間は昨日の午後十七時すぎ。ちょうど、天音さんが家を出た後だ。内容は分からなかったが、おそらく家を訪ねるとか、そんなところだろう。さらに、昨日の十七時から十七時半にかけて、多くの周辺住民に目撃されている」

逮捕に踏み切った理由を、次々と上げていきました。しかし、どれもイマイチ決定打とは言えません。そこに反論しようと思いましたが、その前に絶対的な決め手を突きつけられました。

「それどころか、本人の自白がさっきあった。逮捕するのに、これ以上の条件はないだろ」

「自白!？」

自分の耳を疑いました。証拠が十分でない決めつけでの逮捕ならともかく、本人が犯行を認めてしまっていては、たとえ彼が犯人ではありえないと思える推理を持っていても、どうしようもありません。“日橋さん夫婦が本来どんな関係であったか”だけ分かっている、自白は覆しようがないのです。

「分かったら、どいてくれ。何をしていたのかはだいたい想像がつくが、事件に素人が首をつっこむもんじゃない」

剣路さんがこれで十分だと言わんばかりに肩をすくめ、私を見ます。どけということでしょう。

「動機は」

「ん？」

「動機は、なんなんですか？」

それでも私は、最後の抵抗を試みます。推理どおりであれば、京太さんに麻子さんを殺害する動機はありません。

「奥さんと金のトラブルがあつて、そのことで揉めたそうだと、口論の末、怒りで我を忘れ、気づいたら殺害していた。もういいだろ。通してくれ」

粘った結果、ようやく一つの綻びが出てきました。はっきりと、否定を口にします。

「それはないと思います」

「なんだつて？」

私の言葉に、剣路さんが顔色を戻しました。再びシワが出ます。隣でうつむいている京太さんは、肩を震わせたように見えました。

「京太さんと麻子さんは、お金の問題で相手を殺すような間柄じゃありません」

ためらうことなく続けました。剣路さんが苦言を呈します。

「あんまり、でたらめを口にするものじゃない。何を根拠に言ってるんだ」

「端々に見られる、二人の生活の跡です」

「生活の跡？」

「はい」

首を縦に下ろしました。彼に対して、人差し指を立てます。

「第一に、麻子さんの携帯に残っていた、頻繁な京太さんとの連絡記録です」

「金の問題について、話をしたただけだろう。なかなか折り合いがつかなくて、回数が増えたただけだ」

私の上げた要素を、剣路さんは京太さんが犯人であるという仮定

を持つて解釈します。しかし、そうとは思えません。

「確かに、大量の通話記録だけだと、そうも考えられます。けれど、第二にある、飲食店での二人の様子を加えると、まったく見方が変わるんです」

すでに伸ばしてある人差し指に、中指を加えます。

「どうということだ？」

警察さんは、まだ探し当てられていないのでしょうか。剣路さんは、訝しげに表情を歪めます。

「京太さんたちが月に一度、食事に行つてたことは知っていますよね」

「当たり前だ。むしろ、なんで君らが知ってるんだ」

「天音さんから聞きました。それより、重要なのは私たちが今日、偶然に見つけたとある飲食店の店員さんの証言です」

「飲食店？ どの、なんとという人ですか」

いつも捜査には関わらせないようにする中村さんですが、私たちの能力を認めている節があるためか、重要という単語に反応しました。啓介が、店名と店員名を伝えるのを待ってから、私は話を再開しました。

「その人によると、天音さんがいるときは不仲に見えた京太さんと麻子さんが、天音さんがトイレに立っている間は、親しく話していたそうなんです」

「親しく話していた？」

剣路さんは寝耳に水だったのか、今度は顔をしかめず、目を見開いて驚きを外に出しました。

「そうです。これらから導き出される結論は、一つしかありません。彼の顔は私より上にありますが、真つ直ぐに見据えました」

「京太さんと麻子さんはなんらかの理由で、本当は仲がいいのに、まるで仲が悪いかのように振る舞っていたんです」

私が見つけ出した、夫婦の矛盾の理由はこれでした。疎遠になり、仲が悪いように見えていた夫婦は、実際はまったく逆で、仲がよか

ったのです。

「本当は、仲がよかつただと？」

私が示した推理に、剣路さんは声を大きくしました。

「はい。他にも根拠があります」

さらに続けます。鷹井さんと中村さんは口を半開きにして顔を見合わせ、京太さんは変わらずうつむいていました。

「先に細かい部分を言えば、昨日の麻子さんの死を確認して以降の京太さんの態度です。一見、無関心な態度にも見えましたが、拳を強く握っていました。それに、三山さんに詰め寄られることがあったんですが、その時に、握りが強くなつたのを啓介が確認してます。麻子さんの死を、悲しんでいたからです」

昨日、事情聴取を待っている間に見た、京太さんの様子を思い出します。あのときの彼の態度も、矛盾がありました。

「大きいのは、さつきも話に出した、麻子さんの携帯に残されていたデータです。連絡が密であったことが示すのは、お金の話がこじれていたということではなく、それだけ仲がよかつたということなんです」

仲がいいと仮定すれば、別居中である夫婦という情報と矛盾していた部分が、簡単にほぐれていき、逆に証明の材料にもなります。

「それに、私が天音さんと三山さんからもらった証言から、連絡を取り合っていた理由の一つが推測できます」

言いながら、そういえばその二人の姿がないことに気づきました。私に電話してきたのは天音さんですから、彼女は間違いなく家にいるはず。どうして、外に出てきていないのでしょうか。不思議に思いつつも、先を進めます。

「まず、天音さんの証言によると、麻子さんはよく一人で出かけていたそうです。一番最近だと、先週の日曜日の夜。どこに行ったのかは、知らないとのことでした。そして三山さんは、同じく先週の日曜日に麻子さんと話した際、彼女は元気な声を出していたと言っていました。時間は昼過ぎです」

「その二つが、どうしたって言うんだ」

剣路さんの中では、二つの証言が結びつかないようでした。イライラした様子で、先を促してきます。

「分かりませんか？ 二人の仲が良好であったとすれば、二つが交差するはずですよ」

「交差か。なるほどな」

一番に気づいたのは、啓介でした。啓介にチラッと目を向けてうなずき、正面に顔を戻します。

「つまり、麻子さんの機嫌がよかったのと、外に出たのは同じ日なんです。私の予想ですが、たぶん一週間以内に京太さんに電話をかけていると思います」

「京太さんに電話……。まさか」

中村さんが私の導き出した答えに辿り着いたようで、声を出しました。

「そう。この間の日曜日、麻子さんは京太さんと二人で食事をするために、出かけていたんです」

二つの証言の交差点は、これでした。

「夫婦仲がいいのに、なんらかの理由で一緒に生活することはできない。とすれば、頻繁に連絡を取って会う約束をしていたと考えられます。そこで、二人の証言を照らし合わせると、日曜日の昼過ぎ、夜にある京太さんとの食事が楽しみで麻子さんは元気だった、そして予定どおり、夜に家を出た、というようになると」

麻子さんがたびたび一人で出かけていたのは、京太さんと会う約束を頻繁にしていたからで、三山さんが電話したときに時たま元気がだったのは、その日が京太さんと会う日であったからだと、私は考えたのです。ただ、この推理が抱えた欠点は大きすぎました。

「証拠は？」

剣路さんのこの非常に短い一言が、あまりにも致命的でした。京太さんの態度や、麻子さんの携帯に残された記録から、絶対的には夫婦仲のよさを証明できないのです。別の理由がある可能性を捨て

切れません。一応、複数の要素を組み合わせただけのものではありませんが、推理に合致する情報が増えたからといって、他の可能性を潰せるようなものは手持ちにありませんでした。なんとか、できるかぎりの抵抗を試みます。

「正直に言つて、確かなものは一つもありません。日橋さんたちがどうして仲の悪い振りをしてたのかも分かりません。ですが、私の推理が間違つていたら、どうしてお二人の行動に多くの矛盾があるのか説明がつかないんです。そしたら、夫婦仲はよかったと考えるべきで、お金のトラブルで殺人に至ったというのは、不自然になると思います」

「そうかもしれないが、そうではないかもしれない。君の推理は、筋は通るけど絶対じゃないな。証拠がなければ、ただの思い込みだ。君だつて、それは分かつてるだろう」

ですが、やはりあっさりといなされてしまいました。アリバイもなく疎遠になつていた京太さんが、最有力の容疑者になるのは読んでいきましたが、自白はあまりに想定外でした。何も返し手がなく、唇を噛んでうつむきます。

「終わったのなら、早く行きませんか、刑事さん」

聞こえたのは、低く重たい男性の声でした。顔を上げるまでもありません。京太さんです。

「ええ。行きましよう。沙夜ちゃん、どいてくれ」

剣路さんが同意し、三度私に道を開けるように言ってきました。頼んでも京太さんとは話させてもらえないでしょうし、これ以上引き止めても意味がありません。身体を引きました。

そのとき、玄関のドアが勢いよく開けられました。その場にいた全員の目がそちらに向きます。

「お父さん！」

天音さんでした。大粒の涙を流し、京太さんの背中に顔をつけます。

「嘘でしょ？ お父さんは犯人なんかじゃない。行かないでよ。犯

人じゃないって言ってよ！」

突然の出来事に、誰も反応できませんでした。ただ、目の前の光景を見ています。

「やめなさい、天音ちゃん！」

膠着を解いたのは、後から出てきた三山さんでした。京太さんにひつつく天音さんを引きはがそうとします。

「離して！ お父さんは犯人なんかじゃない！」

「お父さんが自分で認めたことよ！ あなたが何を言っても、どうしようもないわ！」

「うるさい！ とにかくお父さんは犯人じゃないの！」

天音さんは聞く耳を持ちません。京太さんの服の背を握り、抵抗しました。京太さん本人は、最初に驚いた顔をしたものの、すぐにうつむき、ずっとそのままです。

「くっ、三山さんじゃ止められなかったか。中村、天音さんを抑える。その間に、俺たちは車まで行く」

「分かりました」

剣路さんの指示に従い、中村さんが天音さんの方へ行き、三山さんと一緒に彼女を京太さんから離します。今のやり取りから察するに、天音さんが外にいなかったのは、必死に三山さんが食い止めていたからようです。

「離してよ！ お父さんは関係ない！ 離せ！」

それにしても、天音さんの取り乱しようは異常でした。確かに京太さんは、親戚を除くと、彼女にとって唯一の家族なので理解できなくもないですが、これまでの彼女の印象とはかなりかけ離れていました。

「行くぞ」

「はい」

剣路さんと鷹井さんが、私と啓介の横を通って、車へ向かいます。振り返って、乗り込むところを見ていました。

「もういいぞ、中村！ 来い」

「はい」

窓から顔を出した剣路さんの呼びかけに応じ、中村さんが天音さんから手を離して、急いで車へ行きます。

「離せ、離せー！」

抑えるのが一人になったため、天音さんの暴れ方が激しくなります。案の定、三山さんは振り解かれました。お尻から地面に倒れ、「痛っ」と声を上げます。

「お父さん！」

そちらには目もくれず、天音さんは車へ駆け寄って行きました。しがみつくように、ドアを叩きます。

「連れて行かないでよ！ ドアを開けて！ 開ける！」

彼女が接近しすぎているため、車は出せなさそうでした。今は、警察に行かせて鷹井さんからの情報を待った方が得策だと考えている私は、

「啓介、天音さんを抑えてきて」

「了解」

啓介にそう指示しました。

啓介が車へ歩いていき、天音さんの腕を後ろから掴みました。仕方なしとはいえ、他の女が触れられているところを見るのは不快です。

「何よ！ 離して！ あんたたちまで、お父さんが犯人だって言うの！？」

「そんなことは言っていない。けど、今は反論のしようがない。ここで騒いでも、今はあなたの父親の無実を証明する方法がないんだよ。時間を無駄にするだけだ」

「うるさい！ そんなこと知らないわよ！」

「だろうな」

冷静さを失っている人間に説得を試みるのは、無駄な労力だと分かっているので、啓介はさっさと強硬手段に出ます。掴んだ腕を引っ張り、無理やり車からはがしました。京太さんに乗せ、発進しま

す。

「お父さん！ お父さん！！」

バタバタと暴れながら、叫びます。しかし、車が止まったりすることはありません。すぐに見えなくなりました。押さえる必要がなくなり、啓介が手を離します。彼女は、その場に座り込みました。

私は、背後で尻餅をついている三山さんの方へ振り向きました。

「大丈夫ですか、三山さん」

「ええ。大丈夫、大丈夫。それより、天音ちゃんの方が心配だわ」

お尻をはたきながら、立ち上がります。門のところで、生気が抜けたように固まっている天音さんに、目をやりました。

「そうですね」

彼女の意見に、私は同意しました。あれほどの取り乱しぶりだったのです。お父さんが連れていかれてしまった今、天音さんの状態は気がかりでした。

「とりあえず、行ってみましょう」

「そうですね」

私と三山さんは、門のところに崩れ落ちている天音さんの下へ行きました。

「啓介、ありがとう」

「おう」

啓介と軽いやり取りをしてから、天音さんに關心を移します。

「お父さん……」

彼女は、足下を涙で濡らしながら、つぶやいていました。今は、何を言っても無駄そうでした。

「三山さんは、以前にもこんな状態の天音さんを見たことがありますか？」

「いいえ。こんなに取り乱したところは、初めて見る」

放心状態の天音さんの隣にかがみながら、三山さんは答えました。片手を天音さんの肩に置き、もう片方で頭を優しくなでます。

「三山さん、私の推理は聞こえてました？」

「沙夜ちゃんの推理？」

推理という単語に、彼女は眉をひそめました。どう思ってるのかは一旦置いておくとして、どうやら聞いていなかったようです。

「はい、実はですね……」

私は手短かに、剣路さんたちへ話した推理と根拠を説明しました。

「あの人が？」

ひと通り話し終わると、三山さんは顔をしかめました。予想はしていましたが、信じられないようです。

「ありえないわ。麻子からも、そういうことは一回も聞いたことがないし」

「なら、京太さんへの不満は聞いたことありますか」

「そりゃもちろん……」

言いかけて、三山さんは固まりました。

「ないみたいですわ」

彼女は何も言い返してきませんでした。それが肯定を示していませんでした。

「それじゃあ、もう一つだけお聞きします。京太さんと麻子さんがわざわざ仲の悪いフリをしなければならなかった理由は、何か思い当たりませんか」

続けて尋ねます。彼女は、少し考えた後、

「いいえ。それに、そもそもわざと不仲を装うなんてことがあるとは思えないわ」

首を横に振って、否定しました。

確かに、一理あります。日橋さん夫妻は仲がよかったかもしれないという推理は、手に入れた情報から組み立てられますが、普通の考え方であれば、不仲を演じるような理由など存在しないのです。

ただし、あくまで“普通なら”です。

「それがあるんですよ、たぶん。不仲でなければならなかった、普通ではありえない理由が」

逆に言えば、そういうことなのです。そして私には、絶対と言い

きれないものの、何かあるはずだという、確信に近いものがありました。

三山さんは、何か文句がありそうな感じで私を見上げていましたが、思いつく言葉がないようで、

「とにかく、天音ちゃんを家の中に運びましょう。藤山くん、手伝って」

話題を変えました。啓介に顔を向けます。

しかし、私はそれを止めました。

「待ってください。私が手伝います」

「沙夜ちゃんが？ でも、力のある啓介くんが支えた方が……」

「いいですから。早く運びましょう」

「え、ええ」

急に強硬な態度をとったために、三山さんは戸惑いを見せました。私は気にせず、天音さんを挟んで反対側にかがみ、肩を持ちます。

二人で、身体を持ち上げて支えました。玄関へ向かいます。

私が自分から支えを申し出たのは、簡単な理由です。啓介をこれ以上、他の触れさせたくなかったからでした。

私たちは放心状態の天音さんを家の中に運び、二階にある彼女の部屋へ入れました。ずっと泣いていましたが、やがて眠ってしまいました。放っておいても大丈夫だろうということで、私たちはリビングへ下りました。

「ふう。しかし、本当にあんな荒れるなんて思わなかったわ」

イスに腰かけた三山さんがまず口にしたのは、さっきも言っていた驚きの感情でした。

「あの反応だと、天音さんはお父さんのことがかなり好きだったみたいですね。三山さんは、ご存知でしたか？」

「いいえ、まったく。むしろ、嫌ってるのかと思ってた」

なんとなく予測がつかますが、

「どうして、そう思ってたんですか？」

一応、根拠を尋ねました。

「どうしてって言われても、麻子の方にいたんだから、そう思うじゃない」

やっぱり、明確なものはないようです。どうにもこの人は、思い込みが多すぎます。頭を押さえました。

とはいえ、そこをぐだぐだ言っている状況でもありません。別の話題を始めます。

「えっと、じゃあ、天音さんと麻子さんの仲はよかったですか？ さっきの様子だけ見ると、お父さんの方が好きそうですね」

昨日、今日と、お母さんの死に対して沈んでいる様子はありましたが、わりと落ち着いていました。ですが、さっきはまるで逆です。慌てふためいていました。

「そんなわけではない……、って言いたいところだけど、あれを見た後だと、ぐらつくわね。とりあえず、あの子と麻子の仲は良好だったとは、はっきり言える」

「良好、でしたか」

母と娘なので、さほど不思議なことではありません。三山さんが話を続けます。

「よく母娘で出かけていたみたいだし、麻子から何度も微笑ましい話を聞いた。あれで、仲が悪いつてことはないと思うわ」

今度は、本人から直接聞いているようなので、まだ信頼できそうです。

だとしても、疑問は拭えませんが。天音さんの反応の差は、いったいどういうことなのでしょう。まったく答えが見えませんが。

とにかく、まずできることからやるしかなさそうですね。

「三山さん。ちょっと、お願いしてもいいですか？」

「何かしら？」

「麻子さんの部屋の中を、見せてもらっていいですか？」

現状できそうなのは、これくらいでした。京太さんについては、鷹井さんからの連絡を待つしかありません。夫婦仲が悪いフリをしていた理由に関しては、まだ取っ掛かりもありません。

警察の手が入った後ですが、麻子さんの部屋を見るのはその取っ掛かりを探す一つの手段でした。

「うーん……」

三山さんは、しばらく判断しあぐね、

「いいわ。本当は、天音ちゃんに確認したいところだけど、あの状態じゃ無理だろうし」

心からの賛同ではなさそうだったものの、許可はしてくれました。腰を上げます。

「ありがとうございます」

私は頭を下げ、啓介と目を合わせてから二人揃って立ち上がりました。リビングを出て行く三山さんに続きます。

天音さんの部屋は、私たちが昨日、取り調べの順番待ちをしていた寝室でした。パツと見た感じ、変化も奇妙な点もありません。

「あらかたは警察の人が調べてたから、あんまりたいしたものはないかもしれないわよ？」

こちらを向いて、三山さんは確認してきました。うなずきます。

「分かっています」

選ぶうる手段が少ないがゆえの行動です。元から、さほど期待はしていません。

「始めよう、啓介」

「ああ」

私たちが声を掛け合い、部屋の奥へ歩き出したところで、  
「待つて。私も手伝わせてもらおうわ」

扉の三山さんが、前に出てきました。

「別に、気を使わなくても大丈夫ですよ。下で、ゆっくりしててください」

暗に、出て行ってほしいというニュアンスを込めました。私と啓

介の二人だけで十分な場面に、他の人が入ってくるのは非常に不快です。

しかし、これまでの彼女の行動、言動から予想できたとおり、遠慮しなくていいわよ。私も、何かわかればと思うし」  
まったく理解していませんでした。

「気持ちは分かりますが、出ていただけませんか。どうせ俺は全部目を通すつもりですし、あまり荒らさないでほしいんですが」  
啓介が、ほんのわずかイライラした感情を声に含みます。言葉にも、棘がありました。

「そう言わないでよ。私に許可を求めたんだから、一緒に作業するくらいいいじゃない」

それでも彼女は、自分がこの場に求められていないことを自覚しませんでした。なかなか動じない啓介でさえ、頭を抱えます。

「どうしたの？ さつさとやりましょう」  
いつの間にか、主導していました。私も、ため息をつきます。  
仕方なく、三人で手がかりを探し始めました。

十五分ほど探したところで、

「沙夜」

本棚の辺りを探っていた私に、啓介が呼びかけをしてきました。

「何かあった？」  
振り向くと、啓介は化粧台の近くにいて、何かメモのようなものを握っていました。

「これ、見てくれ」

軽く腕を上げて、示してきます。言われたとおり見てみると、やはりメモでした。ただ、人為的に千切った痕があります。ようするに、切れ端でした。

「これって……」

啓介から受け取り、見てみると、そこには二行に分かれて、『た。どうすればいい』、『たら殺され』と、それぞれ文の途中が切り取られていました。

「日記の一部かな」

行線があつたので、そう思ったのですが、啓介は首を振りました。「いや。日記はこの部屋になかった。それはたぶん、これの一部だ。途中に、ページを切り離れたところがあつた」

私に示したのは、大学ノートでした。どうやら、落書き程度に絵を描くのが趣味だったようで、中にはラフ描きで景色だったり人間だったりがありました。啓介がページを捲り、そのなくなっている場所を開きます。確かに、人の手で破られた後がありました。

「この切れ端はどこから？」

「化粧台の下だ。たぶん、手でバラバラに千切って捨てたんだろう。ゴミ箱は空だったから、もうゴミ出しされて、場合によっては燃やされ済みだな」

元のページの復元は、非現実的なようでした。人手を回せるなら、ゴミ処理場も漁れますが、私たちには不可能です。早々にあきらめて、手元にある切れ端に残った文字に注目します。

「何か見つかったの？」

私たちが寄り合っているのに気づいたのでしょう、三山さんがクローゼットから離れこちらに来ました。

「はい。これです」

「紙切れ？」

私が渡したものに、最初は顔をしかめましたが、書かれた文字を見て顔色を変えました。

「こ、これって、どういうこと？」

「まだ分かりません。ページ全体はもう失われていて、元の文章を見るのは無理そうなので、それだけを頼りに今から考えます」

事務的に答え、

「先に一つ訊いておきたいんですけど、麻子さんから、誰かに殺さ

れそうだとか、そういう類の話聞いたことはありますか」

続けて、質問をしました。皮肉ですが、ここは彼女がいて助かりました。わざわざ部屋を出て、訊きに行く必要がありません。

「とんでもない。そんなの、聞いたことないわ。私が会ってきた中でも、一、二を争うくらいにいい子で、人に恨まれるような性格じゃないし」

無条件には証言を信じられない人ですが、とりあえず彼女によれば麻子さんは、恨みを持たれるような人ではなく、殺されるかもしれないというような様子もなかったということです。

「この文字が本音だったと仮定して、周りには話していなかったみたいだな」

啓介が私の考えを代弁しました。

麻子さんと三山さんは、これまでの印象から鑑みるに、かなり親しかったはず。それでも知らないとなると、後は家族くらいしか当てがありませんが、今はどちらからも話を聞ける状況にありません。手詰まりでした。

仕方なく、別のアプローチを考えます。さほど時間が経たないうちに、私はこの切れ端自体に引っかかりました。

「どうして、破られてるんだろ？」

そばにいた二人が、私に目を向けてきます。

「紙が破らてるのが、そんなにおかしいのか？」

尋ねてきたのは、啓介でした。顔を向け、答えます。

「私は変だと思う。だって、本来は趣味に使ってるノートに書いたくらいだよ？ 私たちの想像どおりなら、麻子さんはかなりの危機を感じていたために、この文を書いたことになるはず。けど、実際は破り捨てちゃってる。自分用のノートのはずなのに、どうしてもわざわざそんなことをする必要があるの？ もしかしたら、犯人へつながるヒントになったかもしれないのに」

自身の危険を綴った文章を消し去ったというのが、どうしても疑問でした。自分一人の悩みを書き出しただけなら、ページを破る必

要件はないはずです。

「途中で何を書いていているんだろとかって急に思って、気が変わったんじゃないか？」

啓介が反論してきます。ですが、肯定できません。もっと別の理由がある。私にはそう思えて仕方ありませんでした。

誰に見せるわけでもない個人用のノートから、ページを切り取ってしまった事情。どんなものがあるでしょう。考え込みます。

さっきの啓介の意見を否定するならば、次に一番ありそうな理由は、

「誰かに読まれると困るものだった……？」

突然つぶやいたためか、二人がこちらを注目してきました。啓介が口を開きます。

「誰かって、例えば？」

「天音さんとか」

この家の中で書かれたものですから、京太さんと別居中だったことを踏まえると、読ませたくない相手は彼女に限られてきます。

「もしかしたら、天音さんは普段から時々ノートを見ていて、麻子さんは娘さんに余計な心配をさせなくなかったから、ページごと文を消したのかも」

多少、強引な説を上げます。自分で言っておいてなんですが、違う気がしました。

「なるほど。一応、理屈は通るな。本人への確認は、まだできそうにないけど」

啓介は一定の理解を示しましたが、私の心中には何かモヤモヤしたものがありませんでした。

本当に、天音さんに見せたくなくなかったからとかという理由でしょうか。

頭の中で、思考の方向性を変化させます。この部屋にあったイラスト用のノートに触れる人間は、天音さん以外に誰がいるか。

思いついた相手に、首をひねりました。なぜ、彼らに対して、犯

人かもしれない人物を隠す必要があるのでしょうか。そもそも、読まれる前提などあったのでしょうか。

しかし、普通ありえなくても、今回の事件は夫婦の関係からして異質です。考えを止めるには早すぎます。

なので、さらに深く考えます。彼らに、犯人を知らせたくない理由。思いつくのは、せいぜい……。

「まさか……」

思わず、感情が口から零れます。

「どうした、沙夜。何か分かったのか」

啓介が反応し、私に顔を向けてきます。

「ううん。推測ができただけ」

「推測？」

「もしかしたら麻子さんは、天音さんじゃない、ある人たちに見られたくなくて、このページを破いたのかもかもしれない」

「ある人たちってことは、複数なのか」

「うん。でも、どっちかというのと、不特定多数、って感じかな」

「不特定多数……」

静かに、啓介が繰り返します。私の頭にある人たちに思い至らないのでしょうか。難しい顔をして、黙り込みました。

「誰なのよ。その不特定多数って」

代わりに、三山さんが追及してきました。「自信はないんですが」と、前置きしてから、

「自分が殺された後、訪れるであろう人たち、つまり警察の人たちです」

「警察……？」

私の回答を聞き、彼女は素っ頓狂な声を上げました。冷静な表情を繕っていますが、啓介も驚いていました。頬の筋肉がほんの少しだけ硬くなったのです。

「はい。天音さん以外に文を見られたくない相手を見ると、選択肢の一つとして警察の人たちがあるんです」

遺品の整理という機会を持つ京太さんたちよりも先に警察の人たちを挙げたのは、目にするであろう順番の問題でした。麻子さんが殺害された場合、現場検証など、捜査中に彼女の持ち物が調べられる可能性があったのです。

「仮に麻子がノートを破った理由がそうだととして、どうして警察に見られたくなかったのよ？」

「それは……」

私は言葉に詰まりました。分からなかったから、ではありません。ですが、

「まだ分かりません。あくまで、思いついたことを言ってみただけですから」

自分の頭にある考えを表に出さず、首を横に振りました。

「何よ、それ。根拠がないなら、突拍子ないこと言わないでよ。驚いて、寿命が減るわ」

最後の部分が引つかかったのか、啓介はかなり胡散臭そうな顔を彼女へ向けました。殺しても死なないだろとか、言いたげです。思わず、苦笑してしまいます。

「何、笑ってるの、沙夜ちゃん？」

それがバレて、問われました。両手を身体の前で振ります。

「あつ、いえ、なんでもないです」

「ならいいけど」

しつこく訊いてこなかったので、助かりました。ほっと、胸を撫で下ろします。

「それじゃあ、作業に戻りましょう。他にも、何かあるかもしれません」

「そうね」

私の言葉に、彼女は同意を示しました。啓介には目だけで確認して、三人で捜索に戻りました。

結局、あのノートの切れ端以外、何も出てきませんでした。片付けをした後、私はお礼を言っ、啓介と日橋さんの家から去りまし

た。

帰り道、日橋さんの家から十分に離れたところで、啓介が小さな声であることを尋ねてきました。

「沙夜、本当は日橋麻子が自分の書いた文を警察に見られたくなかった理由、何か思いついてるんだろ」

凶星でした。声は出さずに、うなずきます。

「どんな理由だと思ってるんだ？」

「そんなに難しいことじゃないよ」

前提を言ってから、考えを述べます。

「麻子さんを狙っていたのが、彼女にとつて自分が殺されたとしても、捕まつてほしくない人だったんじゃないかな」

ようするに、親しい人間ということでした。警察に犯人候補を知らせたくない理由は、あるとすればこれくらいしか考えられません。「なるほどな。にわかには、信じがたいが……」

一定の理解は示してくれつつも、さすがの啓介も顔をしかめました。私を無条件に信頼はしてくれませんが、それでも違和感があるようです。無理もありません。言ってる私すら、ありえるのかと思っ

ているくらいです。ですが、否定しきれぬ材料がないかぎり、その選択肢を消すわけにはいきません。

「それが正しいとすると、容疑者は絞られるな。ただ、金銭問題はないとしても、京太に犯人の可能性があることにもなる」

「そうなんだよね……」

頭の痛いところでした。麻子さんが、自分を殺すのは身近な人間だと予測していたのなら、京太さんも当然ありえます。犯人が彼だとしても、動機はおそらく嘘でしょうが。

「でも、どうしても京太さんが犯人だつていうのは、釈然としないの」

「まあ、そうだろうな。昨日の、“死を悲しんでいた” 様子が、説明できない」

啓介が冷静な分析をしました。そう、それが引っかかっているのです。

昨日、京太さんが握りしめていた拳。感情を押し隠そうとして、隠しきれていなかった彼が、愛する奥さんを殺害したとは、どうしても信じられませんでした。とすれば、他に目を向けざるをえませ

ん。  
「他に親しい人間って言ったら、現状だと三山か日橋天音ってことだな」

啓介が腕組みをしながら、二名の容疑者候補を挙げます。ですが、それはありえません。

「二人には無理だよ。麻子さんからの電話が切れてから、ずっと私たちといたんだから」

彼女たちには、はっきりとしたアリバイがありました。

「ああ、そうか。日橋麻子からの電話があっただったな」  
失念していたらしく、啓介が顔を歪めます。

そうなのです。天音さんと三山さんは、親しい人間としての条件は満たしますが、絶対のアリバイがありました。死亡推定時刻には引っかかるものの、麻子さんからの電話が彼女たちを疑うことを許しません。現場に落ちていた携帯にも、履歴ははっきりと残っていました。

「ん……？」

何か引っかかりました。現場に、携帯が落ちていた。“落ちていた”……。そうじゃありません。あの携帯は、指紋が拭き取られていたはずです。

「啓介、携帯の指紋が拭き取られてたって言ってたよね」

「ああ。鷹井からの情報の中にあっただけ」

「分かった、ありがと」

お礼を言っ、考え込みます。やがて、ある考えにたどり着きま

した。

麻子さんの携帯に、データを消された痕跡はないとのことだった  
はずです。それなら、京太さんが犯人だとして携帯へ触れる理由が  
ありません。

「まさか……」

もし、考えている通りなら、犯人は“あの人”かもしれません。

## 五章 詰め

現場にあつた携帯電話から、私はある推理をしました。捜査の方向性を見失っていた私たちにとって、それはかなり大きい転機でした。可能性があるなら、調べる価値がある。ゆえに私たちは、ある仮説を基に動くことにしたのです。

京太さんが逮捕された翌日、授業を終えた私と啓介は、例によって自習室へ行き、ある人からの連絡を待っていました。心待ちにしていた電話は、四時くらいにかかってきました。啓介の携帯が震えます。

「もしもし」

通話の状態にして、啓介が呼びかけます。私の耳には、聞き覚えのある声が微かに届きました。

「ええ、待っていましたよ。鷹井さん」

相手は、鷹井さんでした。京太さんの取り調べについての情報を、ずっと待っていたのです。まず、彼からの報告を残らず訊き、それから私があらかじめ上げておいた質問を啓介にしてもらい、最後に、「日橋麻子の携帯の通話記録を調べてもらえますか」

そう頼んでもらいました。なんとかやってみるといふ前向きな返答をもらい、電話を切ります。

今した話題は、大きく分けて三つでした。

まず、京太さんの取り調べについて。彼はずっと金銭トラブルによる犯行を主張していて、事件当日の行動についても筋が通っているそうです。ただ、剣路さんもバカではないので、私の話にも一理あると考えたようで、裏づけをさせているとのことでした。

二つ目は、事件当日に現場付近で京太さんが目撃された時間帯についてです。鷹井さんからの話だと、十七時十五分から、十七時四十五分の間辺りでした。電話が切れたのが十七時二十分なので、ズレはありません。ですが、私の持つ考えを通すと、彼が犯人である証明ではなく、まったく違うことを示すことになります。

最後は、啓介に頼んでもらった通話記録の件です。仮に私の推理が合っていれば、何かが出てくるはずでした。

「困い込みの準備はこんなところかな」

「そうだな。頼んだことに関しては、結果を待つしかない」

私が息を吐くと、啓介も肩の力を抜きました。今、頭にある推理の正否は、情報が揃わなければ判断のしようがありません。ただ、揃いさえすれば、判断は難しくありませんでした。

ただ、待つだけではどうしようもない部分が二つほどあります。

そのうちの一つに関しては、

「それじゃあ、もう一度三山さんのところに行こっか」

彼女に会う必要がありました。啓介と一緒に自習室を出て、昨日、昨日に続き、私たちはまた日橋さんの家へ向かいました。

「あら、啓介くんは沙夜ちゃん。また来たの」

日橋さんの家には、まだ三山さんがいました。そろそろ自宅に戻ってしまっているかとも思っていたので、安心します。

「ええ、まあ。天音さんは、どうしてますか」

「天音ちゃんは……。まあとにかく、上がって上がって。話してあげるから」

他人の家へ、我が物顔で客を上げます。今更、何も言いはしません。彼女に従い、私たちは中へ入りました。

「それで天音さんは」

「意外に沙夜ちゃんはせっかちな。別にいいけど。天音ちゃんなら、

騒ぎはしなくなっただけど、ずっと部屋の中で塞ぎ込んでるわ。ご飯は食べに出てくるから、色々訊いてみたけど、何も教えてくれなかった」

廊下を通り、リビングに着きます。三山さんは、お茶を淹れにキッチンへ行きました。

「天音さんと話すのは、無理そう、かな」

「かもな。でも、一回試すくらいはした方がいいだろ。後で行こう」「そうだね」

イスに並んで腰掛け、言葉を交わします。そのうちに、三山さんが戻ってきました。私たちの前に、お茶を置いてくれます。

「はい、どうぞ」

「あっ、ありがとうございます」

「どうも」

「どういたしまして」

私たちのお礼に彼女は微笑して、席につきました。

「それで、今日はどんな用事？」

本題を促され、私は背筋を伸ばして、問いを口にしました。

「ちよつとだけ、お訊きしたいことがあるんです。三山さんは、麻子さんとよく連絡を取っていたんですよね」

「ええ。前にも言ったとおりよ」

「前に話したばかりの話題を、麻子さんが覚えていなかったなんてことはありませんでしたか」

最初、彼女はキョトンとしていましたが、思い当たることがあったのでしよう。身を乗り出して、

「どうして分かるの？」

高い声を上げました。

「理由はまだお話できません。それより、そのときの詳細を教えてくださいませんか」

興奮した様子の彼女を制し、次に進みます。向こうも一旦自分を落ち着かせ、座り直しました。

「確か先月辺りのことなんだけど、麻子とテレビドラマの話をしたの。すごく盛り上がったから、次の週に電話したときも話題に出したのよ。そしたら麻子が、『そんな話したっけ』って言ってきたのよ。あの子、人並みに記憶力は持つてるから、相当盛り上がった話題なら忘れないはずなのに、忘れてた」

「確かですか」

今度は私が腰を浮かせました。ひるみながらも、三山が返答します。

「え、ええ。こんなこと、嘘つかないわよ」

糸が、繋がりました。

「ありがとうございます。色々と確信に近いものが持てました」

「確信って、どういうこと？」

私の発言を、三山さんが不思議がります。ですが、

「それは後々話します。今は、天音さんのところに行くので、失礼させてください。部屋にいるんですよ？」

問いには答えず、立ち上がりました。啓介も同じようにします。

「えっ、ちよっ、ちよっ」と

彼女が慌てた様子を見せましたが、気にとめずに啓介とリビングの扉へ向かいます。ふと思ったことがあり、振り返りました。

「言い忘れてました。もしかしたら、三山さんがいると話をしてくれないかもしれないので、ここにいてももらえますか」

「な、なんで私がいると話してくれないかもしれないのよ」

三山さんが立ち上がり、どもりながらも問い詰めるような口調で尋ねてきました。今度は要望に応え、理由を告げます。

「あなたが、麻子さんの友人だからです」

「なっ」

目を見開き、彼女は絶句しました。裏に、自分の知らない友人の影を感じたためでしょう。硬直している間に、私たちはリビングを出ました。

「珍しいな。沙夜が嘘つくなんて」

声を小さくして、啓介が言いました。苦笑いを返します。

「あれくらいのこと言わないと、ダメそうなんだもん。むしろ、あれでもまだ盗み聞きの可能性はあると思うよ」

彼女のいないところで天音さんと話をしたいのは本当ですが、私  
が三山さんへした説明は、まったくの嘘でした。できるかぎり、こ  
っちの指示に従ってもらうために、釘を刺したのです。ただ、性格  
的に開き直って聞きたいと思う可能性もありました。正直、賭けで  
す。

「実際、あの人が指示を破って聞きに来たらどうするんだ？」

「そのときはそのときかな。それに、盗み聞きならまだ大丈夫だよ。  
口を挟んでさえこなければ」

そんな会話をしながら、階段を上がり、天音さんの部屋の前へや  
つてきました。扉を叩きます。

「天音さん。西野です。お話したいことがあるので、入れていただ  
けますか」

すぐに返事はこず、沈黙が流れます。ダメかもしれないというの  
を、啓介と顔を見合わせて伝えます。

「天音さん」

名前だけ呼んで、もう一度叩きます。しばらく待つて、また叩こ  
うとしたところで、扉が少し開きました。元気がない天音さんの顔  
が覗きます。

「お話とは、なんででしょうか」

声にも、生気がありません。やはり、麻子さんの死よりも、京太  
さんが逮捕されてしまったことの方が響いているようです。

「ご両親についてです。ある程度は聞いていますが、色々できる  
かぎり詳細に教えていただきたいんです」

切に訴えると、天音さんはうつむき加減になり、しばらくしてか  
ら、

「いいですよ。お話しします」

小さな声を出し、私たちを誘うように部屋の扉を開け放ちました。

「ありがとうございます」

私は扉に手をかけ、お礼を言いました。彼女は何も返事をせず、背を向けて部屋の中へと戻っていきます。

「それで、具体的には何を聞きたいんですか？」

どこか投げやりに言っつて、ベッドの上に座りました。怒っているというより、関心がない様子でした。私たちをどこかへ促すこともしなかったので、勝手に隣へ座ります。チラッと見られましたが、文句は言われませんでした。啓介は、立ったまま壁に寄りかかっています。

「そうですね……、まずは別居する前のご両親について、話してもらえますか。いつも楽しそうだったとか、喧嘩ばかりだったとか、なんとなくどんな感じだったか程度でいいので」

「お父さんとお母さんですか……」

繰り返して、床へ視線を向けます。下をというよりは、どこか遠くの記憶を覗いているようでした。

「私から見たかぎり、両親はかなり仲がよかったです。お父さんはあんまり感情を表に出さなかったですけど、いつもお母さんを気にかけていて、お母さんも他の人は分からないお父さんの考えを理解していました。以心伝心、という感じですかね」

私たちのようなものでしょうか。京太さんほどではないと思いますが、啓介も感情を表に出すことが少ないのです。それでも、何を思っているのか、機嫌はいいのか悪いのかとか、私には分かりません。麻子さんも同じだったのでしょうか。

「でも、私には分からなかったです。お父さんが楽しそうなのか、悲しんでいるのか、もしくは疲れてるのか。お母さんにだけ分かったんです」

私たちに向けてしゃべっているとは思えないくらい、彼女の語りは独白のようでした。

「でも、小学生に上がって何年かしたくらいから、私にもお父さんの感情が、なんとなく分かるようになりました。中学生の頃にはさ

らに理解が深まってましたよ」

ほんの少し、声が弾んだ気がしました。しかし、すぐに沈んでしまいます。

「そのくらいからです。お父さんが家にあまり居着かなくなったのは」

例の疎遠関係の始まりのことのようです。この理由に、私はまだたどり着けていません。

「理由は以前も言ったとおり、分かりません。ただ、両親の仲が悪くなったからではないと思います。むしろ、離れたおかげで余計に深まったように見えましたし」

「深まった、ですか」

「はい」

疑念を含んだ私の言葉に、天音さんはうなずきました。

「月に一度の食事でも、明らかでした。お父さんの態度は変わりありませんでしたし、お母さんも素っ気ないふりをしてましたけど、間違いなく互いへの愛情は強まっていました。ずっと近くで見ている私には分かります」

声は弱いですが、揺らいではいません。彼女へはまだ、本当は京太さんと麻子さんの夫婦仲がよかったという私の推理伝えていません。にも関わらず、すでに彼女は強い確信を持っていました。鷹井さんから聞いた、警察からの取り調べのときは、まったく主張が変わっています。どうやら、こちらが本音のようです。

「そう思っていたなら、どうして警察からの取り調べで、正直に言わなかったんですか」

なので、疑問でした。なぜ隠したのでしょうか。

「それは……」

言い淀んだ彼女の雰囲気、一瞬だけ、異様なものを感じました。しかし、すぐ元に戻ったため、なんだったのか分かりません。

「お母さんが死んでも、お父さんが何も言わなかったからです。事情は今も分かりませんが、お父さんが黙り続けているのに、私が話

せるわけないじゃないですか」

先ほどのことなどなかったかのように、表面上は特に問題のない理由を口にしました。

と、壁にもたれる啓介の眉が、ピクリと動きました。どこかおかしいようです。気になりましたが、後で確認することにします。

「なるほど」

とりあえず、天音さんにはそう言うっておきます。それから、別の切り口にいきます。

「では、どうしてご両親は、わざわざ別居までして仲の悪いふりをしていたと思いますか」

問いかけると、彼女はゆっくりと顔を上げ、私の方を向きました。目を細くし、穏やかに怪しい笑みを浮かべます。

「どうしてだと思えますか？」

逆に尋ねてきました。どこか、壊れてしまっているような感じすらあります。私は背筋が凍る思いがしました。何かがおかしかったのです。

「私たちには、まだ分かりません。だから、天音さんにお訊きしたんです」

それでも、正直な答えをし、再び回答を求めます。すると彼女は、また床へと目を戻し、

「私にも分かりませんよ。まったく、ね」

力ない口調で言いました。これ以上、この話題で情報を引き出すのは無理そうです。次に移ります。

「そう、ですか。なら、それはもうかまわないです。別のことをお尋ねしていいですか」

「ええ。いいですよ」

どこか投げやりな口調でした。

「お父さんが捕まったとき、ずいぶん取り乱してましたよね。お母さんが亡くなったときは、段違いに」

昨日から、ずっと疑問に思っていたことでした。あまりに、彼女

の反応は差が大きすぎました。

「ああ、そのことですか」

ぼんやりとした声でした。かすかに、唇の端を持ち上げています。昔から、私はお父さんっ子だったんです。お母さんが殺されたのもかなりシヨックでしたけど、それ以上にお父さんがいなくなってしまうのは、辛いんです。娘が言うのはちょっと変かもしれないですが、お父さんが大好きなんです。お母さんの何倍も」

「なるほど」

両親のうち、どちらかへの愛情が大きくなることは、それなりにあります。天音さんの場合もそれだったようで、簡単に言えばお母さんよりお父さんの方が好きだったわけです。

ただ、私は引つかかるものを感じました。奥底に、まだ何かを隠しているような気がしたのです。

「何か、他にも訊きたいことはありますか」

下へ向けた目線は動かさなのまま、彼女は確認してきました。私は腕組みをしてしばらく考えてから、

「いえ、今日のところはけっこうです。協力してくださって、ありがとうございます」

お礼を言っつて、頭を下げました。

「どういたしまして」

最後も、彼女は顔を上げませんでした。

天音さんの部屋を出た私たちは、そのまま日橋さんの家もあとにしました。駅へ向かいます。得られた情報を整理する前に、まず啓介へ確認を入れます。

「啓介、天音さんが警察の取り調べで、本当のことを言わなかった理由を話したとき、何か気づいたでしょ。何かおかしかったの？」

「簡単なことだよ。日橋天音は理由として、事件発覚後に京太が何

も言わなかったからだと話したが、あの日京太と顔を合わせたのは、事情聴取の後のはずだ。あの女が聴取のときに、京太の様子から話すことを判断できたわけがない」

「あ、そっか」

そういえばそうでした。京太さんが来たのは、彼女の事情聴取の最中です。

とすれば、彼女はまた嘘をついたことになります。両親の仲がよかったのを隠したのには、別の意図があるはずですよ。

脳をフル回転させます。犯人は、三山さんとの会話で確定できませんでした。じきに、鷹井さんから証拠も手に入るでしょう。後は、動機でした。なぜ、“あの人”は麻子さんを殺さなければいけなかったのか。ずっと疑問に思っていた部分です。

「分かんないな……」

私はそうつぶやいて、頭をガリガリとかきました。傍らの啓介が、気負いなく言葉をかけてきます。

「あんまり、思い詰めるなよ。絶対に捕まえてやろうとか、そういう情熱があるわけでもないし」

「ありがと。確かにそうなんだけど、あと少しで掴めそうなんだから。思い詰めもするよ」

私は感謝しつつも、そう返しました。あと一ページで終わる本を一旦閉じる人は、そうそういません。

「そっか。無理はするなよ」

「うん」

微笑する啓介に、私はうなずいてみせました。

「そういえば、何について考えてるんだ？ 犯人もトリックも分かったんだろ。後、何かあるか？」

いかにも、啓介らしい発言でした。人の心なんて、私のしか興味がないのです。犯人の動機という考えがないのも、そのせいでしょう。

「動機だよ。そこまで解き明かさないと、私は駄目だと思うの」

「動機を？ でも、ドラマとかだと、それは分からないまま犯人を挙げて、動機を話させることも多いじゃないか。なんでわざわざ」

啓介は納得いつていないようでした。言っていることは間違っていますから、当然かもしれない。本来、探偵は犯人を挙げて事件を解決すれば、後は領分ではなくなるのです。

しかし、私はそう考えられませんでした。特に今回の事件は。

「うん。啓介の言うとおり、本当なら解く必要のないものなの。でも、動機だって事件の一部でしょ。そこまで解き明かして、初めて推理は完成って言える気がするんだ。それに、今度の事件の動機は、もう少しで分かりそうなの。だから、なんとか突き止めたい」

“あの人”が犯人ではと仮定した昨日からずっと、私の心中にはもやもやしたものがありません。疑問を感じたからではなく、核心へ至る何かを手に行っているのに、それがはっきりしないことからくるものでした。

「なるほどな。動機か」

啓介は、私の考えに否定を示すことはほとんどありません。確実に間違っているときくらいです。

「俺には、正直想像もつかない」

考えて数分と経たないうちに、啓介はギブアップに近いことを口にしました。観察力があるので、動作から感情を読み取るのは得意ですが、結果から動作を行った理由を導くのは苦手なのです。

「日橋麻子が死んだことで変わることなんて、日橋天音の保護者として、京太が家に戻ることでぐらいいしかなないし」

何気ない啓介の一言が、私に閃きをもたらしました。そうです。

麻子さんが亡くなれば、天音さんの保護者として、“京太さんが家に戻る”のです。

「啓介、それだよ」

「えっ？」

啓介は、なんのことか分からないように、訝しげな表情を浮かべていました。着眼点がいいのに、それを推理に繋げられないのです。

「あの人」は、そのために麻子さんを殺したんだよ」  
言動と態度が、繋がっていきます。この殺人で、犯人は檻を作  
らうとしたのです。認められることのない愛情のために。

## 第六章 狩られる獣

また次の日。私たちは今日も日橋さんの家へ来ていました。ただ、今回は目的が違います。手がかり探しではなく、すべてを話すために来たのです。必要な情報は、昨日のうちに鷹井さんからもらっています。

「啓介くん、沙夜ちゃん」

曇天の下、門の前で呼吸を整えていると、私たちの名前を男性が呼びました。そちらを向くと、車から降りるところである鷹井さんがいました。反対側の助手席から、中村さんも出てきます。剣路さんはいないようです。

「事件の真相が分かったっていうのは、本当かい」

昨日の電話で、散々啓介が言ったにも関わらず、彼はまずそう尋ねてきました。面倒臭そうに、啓介が答えます。

「本当ですよ。内容はこれからお聞かせすることになりますけど、間違いありません」

迷いのない言葉に、鷹井さんは顔の筋肉を引きつらせました。隣の中村さんが、口を挟んできます。

「今更、あなた方の行動を咎めるのも馬鹿らしいのでしないでおきますが、どうということですか。犯人は、自首した日橋京太さんなのは」

相変わらず冷静でした。訊き方が引つかかるところですが、きちんと答えます。

「いいえ。京太さんじゃありません。あの人は、刑務所という檻へ入ることで、別の檻に入れられることを避けようとしているんです」

「別の檻？」

中村さんが、眉をひそめます。おそらく、取っかかりすら掴めていないでしょう。目の前にあるごく普通の一軒家の中では、あまりに普通ではないことが起きていたのです。

「はい。すべて説明しますから、もう行きましょう。話はそれからです」

「そうだな。入るとしよう」

私の言葉に啓介も同調し、まず呼び鈴を鳴らします。しばらくして、『はい』という、女性の声がしました。昨日までのものと違うので、おそらく天音さんでしょう。

「西野です」

『西野さんですか？ ちょっと待っていてください』

ブツツという音がし、数秒の後、玄関の扉が開きました。光のない目をした女性の姿が覗きます。天音さんでした。その後ろには、心配そうな表情の三山さんの姿もあります。二人とも家から出てきて、私たちの方へ来ます。

「西野さんたちに、警察の方も一緒でしたか。いったい、なんの用事で？」

さつそく天音さんは、用件を尋ねてきました。私は胸を張って、堂々と答えます。

「今回の事件の、すべてを明らかにしてきました。入れてもらえませんか」

「事件のすべて？」

若干ひっくり返った声を出したのは、三山さんでした。

「はい。先日お話したとおり、やっぱり京太さんは犯人じゃなかったんです」

「なっ……」

三山さんは言葉を失い、天音さんも目と鼻が微かに動きました。

「詳しくは中でお話します。上がったも、いいですよね」

彼女たちはどちらともなく目を合わせ、こちらに向かって首を縦に下ろしました。

私たちは、例によってリビングにいました。三山さんと天音さん、それから二人と向かい合う位置に中村さんというように、三人はテーブルのイスに座っています。私と啓介は彼女たちを見渡すようにテーブルの前方に立ちました。鷹井さんは席に着かず、二人座っている側の後ろの長い窓へ身体を預けていました。

探偵の舞台が整ったところで、

「では、始めましょう」

緊張で激しくなる鼓動を抑え、私は宣言しました。

哀れな獣を捕獲するための、舞台の開演を。

「まず最初にはつきりさせておきたいのは、京太さんは犯人ではないということです。彼はおそらく、どうやって殺したのかは分からずとも、誰が殺したのかを知っています。そのうえで、嘘の自白をして自ら逮捕されたんです」

「つまり、犯人を庇ったわけですね」

さっそく、中村さんが口を挟みます。探偵の演目はこうでなくてはなりません。観客は、自分の疑問をどんどん探偵へぶつけていいのです。義務を果たすために、彼女の問いに回答します。

「半分正解です」

「半分？」

彼女は眉間にシワを寄せました。

「はい。確かに、“庇った”というのもあるんですが、彼は“怖れ”から、留置場、果ては刑務所に入ってしまったと考えたんです」

「つまり、自分から檻に入ろうとしてるってのか？ そんなバカな」

鷹井さんが、横から反応してきました。中村さんと同じような表情になっています。

「それがありえるんです。そもそもこの事件の背景には、普通ならありえないことがバラバラに点在していました。そして彼の怖れの正体は、それらをすべて繋ぎます。言うなれば、一本の芯です。しかし、その芯すら、本来ならありえないこと、いえ、あってはならないことなんです」

「ありえないことが、ありえている原因ってこと？ イマイチ、よく分からないのだけど」

三山さんが首をひねります。確かに、聞いたかぎりではあまりに矛盾しています。ですが、今回の事件ではその矛盾が現実起きてくるのです。さらに、ありえないという完全な否定では少しニュアンスが違ってきます。

「正確には、あつてはならないことなんです。完全にありえなくはありません」

「あつてはならないこと？」

鷹井さんが首をひねりました。他の人もピンときていないようで、沈黙しています。

「そうですね。そこに、日橋さんたち夫婦が別居までして不仲を装っていた理由があります」

観客に向かつてうなずき、堂々と彼らを見据えました。

「仲のいい夫婦が、なぜ不仲を演じたのか。ヒントは、麻子さんが亡くなることで起きる変化にあります」

「変化？」

「はい。考えてみてください。どんな変化があるのかを」

私の言葉を繰り返した中村さんへ、思考を促します。他の人たちも、同様に考え込みました。

数分しても、答える人は出ませんでした。ストップをかけます。

「そこまででいいです。私も皆さんと同じで、考えつきませんでしたから。気づいたのは啓介なんです」

ちらつと啓介へ目をやります。ポケットに両手を突っ込んで、私に向かい微かに笑いました。エールなのですが、むしろドキドキが増します。自然と浮かんだ微笑を返し、前へ向き直りました。

「啓介自身はその発見の重要性を見いだせていなかったんですが、私の頭の中では、はつきりと繋がりました。皆さんも、一度聞いただけでは、意味が掴めないかもしれせん」

かなり長い前振りをしてから、啓介の見いだした変化を口にしま

す。

「麻子さんが死んだら何が起きるか。実に単純なことです。“京太さんがこの家に帰ってきます”」

予想どおり、全員が沈黙しました。それも、驚きからではなく、意味が分からないからです。考慮したうえで、話を続けます。

「これだけ聞いても、意味が分かりませんよね。これに、ある仮定を足すと、初めて意味のあるものに見えてくるんです」

誰も口を挟みません。もう少し反応があるかとも思っていました。が、想像以上に、耳を傾けてくれていました。

「その仮定ですが、ヒントは京太さんが捕まったときの出来事になりました。皆さんも、思い当たることがあるはずですよ。あまりにもいつもと違っていましたから」

「まさか、あなたが言ってるのは……」

啓介を除いたメンバーの中で、一番察しのいい中村さんが反応を見せます。他の人も、はっとした表情を浮かべました。彼らの視線は私から離れ、たった一人に集まります。

「そうです。あ のとき、いつもと違ったのは、あなたの様子です。お母さんである麻子さんが死んだときも、あまりにも態度が違いました」

隠し立てする必要ありません。まず、最初にはつきりさせておかないといけませんでした。

「そうですよね、天音さん」

“獣”の、正体を。

名前を挙げられた天音さんは、ゆっくりと顔を私に向けてきました。据わった目には、はつきりとした敵意があります。

「確かにあ のときの私は、かなり取り乱していました。落ち着いてから考えてみて、自分でも、お母さんが死んだときとの差に驚きました。でも、理由は説明したはずですよ。私は、お父さんの方が好きだったから、あれだけ取り乱した。ただ、それだけのことでよ」

「そうでしょうね。あなたは、嘘はついていない。でも、表現を変えてあることを誤魔化しています」

彼女の主張を認めつつも、私は隠されている感情に言及します。

「あなたの“好き”は、決して普通の親と子の間にあるものではないはずです」

瞬間、舞台に戸惑いと驚愕の混じった、沈黙が流れました。口をポカンと開けていたり、目を開いていたりしています。今の発言で彼らは“あつてはならないこと”の意味を理解したからでした。

三山さんが喉の奥から絞り出すように、おずおずと言葉を発します。

「それって、まさか……」

「三山さんの考えているとおりだと思いますよ。あのときの極端な態度が一番大きいですが、啓介の観察だと麻子さんの死を悲しんでいない節もありました」

ここまで説明すれば、さすがに伝わったはずですが。導き出される結論を口にします。

「天音さんの京太さんへ対する好意は、異性に対するそれだったんです」

天音さんは眉間にシワを寄せた険しい表情を崩さず、他の面々は彼女へ目を向け、固まっていました。

「いつ頃からなのかは分かりませんが、日橋さん夫妻は彼女の感情に気づいていたと思います。間違いを犯したくないというのに加え、夫婦仲が良好でしたから、京太さんと天音さんが禁断の関係になるのは、絶対にあつてはならないことでした。でも、大切な一人娘ですから、二人共が遠ざけたり、避けることはできない。仕方なく、夫妻は別居という形を取って、京太さんが家を出たんです。そのうちに、彼女の感情が収まるのに期待して」

普通ならありえないことは、こうして現実となったのです。

「ですが、思惑とは裏腹に、天音さんの感情はむしろ深まっていったと思います。それこそ、手段を選ばなくなるほど強く。麻子さん

の寢室に残されていたノートの切れ端にも、その一端がうかがえます」

私が言ったのに合わせ、啓介がテーブルに、寢室で発見した紙の切れ端を出します。

「『た。どうすればいい』に『たら殺され』ですか。確かに、穏やかではない文面ですね。自分が殺されるかもしれないという内容だった可能性も、否定はできません」

切れ端を覗き込みながら、中村さんが言いました。

「はい。可能性としてあります。それに、その予測が正しいとすれば、どうしても麻子さんが、一度書いたものをわざわざ破ってしまったのかも説明がつくんです」

「そういえば、ずいぶんこだわってたわね。警察に犯人がバレないようににしたっていうのも、納得いくけど……」

一度私に目を向け、また天音さんに戻します。おそらく、まだ彼女が犯人だと信じられないのでしょうか。

「なぜ破ってしまったかというのは、どういうことですか」

中村さんが疑問を口にしました。私と啓介、そして三山さんにか分からない話題なので、他の人たちには伝わらないのです。

「私が疑問に思っていたことです。切れ端は寢室で見つけたんですが、殺されるかもしれないという予想を持っていたのに、わざわざ文章を書いた紙を破いたのはなぜなのかと思っただんです」

犯人を逮捕するための重要なヒントにもなりうるものを、なぜ書いたのにわざわざ破ったのか。天音さんが犯人だと分かったとき、私が最初にした推理は、間違いではないという確信が持てました。

「答えとして浮かんだのは、文章を警察が見つけた犯人がわけてしまつのを怖れたからではないかということでした。さっきも言いましたが、夫妻は天音さんの感情を知りながらも愛していましたから、たとえ殺されたとしても、麻子さんは子供に捕まってほしくなかったんです」

「殺されたとしても、家族は家族ってわけか。たいした母親だった

んだな」

鷹井さんが感心を示します。私も同意見でした。子を思う親とい  
うのは、時に驚愕に値します。三山さんは、「麻子らしいわ……」  
と一人つぶやきました。

「そして、麻子さんの予期していたとおり、京太さんへの愛情を大  
きくしていた天音さんは、本当に殺人を決意しました。京太さんは  
警察に捕まっただけで回避しようとするほど、彼女と間違いを犯して  
しまうのを怖れていますから、別居後はおそらく、徹底的に避けて  
いたはず。あなたは、それに耐えられなかったんです」

最後は、天音さんへ向けて言いました。仕方ないことではありま  
す。私も、啓介といられなくなったら、手段を選ばなくなるでしょ  
うから。

「そしてあなたは、実行した。京太さんを半ば強制的に家へ戻し、  
加えて彼からの愛情を受ける麻子さんを消すために」

動機についてはこんなところでしょう。彼女は、叶わぬ恋心を満  
たすために、邪魔なものを消す、目的を選ばない獣となったのです。  
と、ずっと黙って聞いていた天音さんが瞳孔を開き、私へ鋭い目  
を向けてきました。

「ずいぶん、好き勝手言ってくれるものですね」

怒りに満ちた声でした。この手の舞台には必ず存在する、犯人の  
反論です。

「さも、私が犯人のように話してますけど、すべてあなたの憶測じ  
やないですか。何も具体的な証拠がない」

これはジャブのようなものです。もっと強力な防御策を彼女は持  
っていました。

「そもそも、私に母を殺せるわけがないじゃないですか。母から電  
話がきたとき、私はあなた方と一緒にいた。その後も、死体を見つ  
けるまでずっと行動を共にしていたんですよ」

効果抜群の反論でした。そう、彼女はずっと私たちと一緒にいた。  
事件当日この家に来たとき、中を確認しにいつてから、私たちが上

がり込むまでの数分ほど一人にはなりましたが、死亡推定時刻からして、そのときに殺したというのはありえませんが。

さらに大きな壁は、麻子さんからの電話でした。主に会話していたのは、三山さんです。電話がかかってきていたフリということはありません。確実に電話は繋がっていて、三山さんは対話をしたのです。これさえなければ、死亡推定時刻に反することなく、天音さんが喫茶店へ来る前に麻子さんを殺害しているという可能性が上がるのですが、その考え方は封じられていました。

ですが、私はその守りを崩す手段に、既に至っているのです。

「確かに、天音さんの言うとおりです。あの電話が、本当に“麻子さんからのものであれば”」

私の発言に、観客全員が目を見開きました。数秒してから、天音さんが声を荒げます。

「何を言ってるのよ！ あれは確かにお母さんからの電話だったわ！ そうですよね、三山さん」

母親の親友である中年の女性へ、目をやります。問われた彼女は、ひるみながらもうなずきました。

「え、ええ。あの電話は麻子からのものだったわ」

「ほら、見なさい。あれは、母からのもので間違いありません」

勝ち誇ったように、天音さんは両手を開いて私に訴えてきました。

しかし、私には通じません。

「それはどうでしょうか」

「なんですって？」

私の一言に、彼女は顔を歪めました。無視して、三山さんへ尋ねます。

「三山さん。昨日、尋ねたことを覚えていますか」

「昨日尋ねたこと？」

「事件以前の麻子さんとの電話で、話した内容をまったく覚えていないことがあったかどうかです」

「ああ、それか」

思い出したようでした。中村さんが反応します。

「その問いには、どんな意味が？」

「大きな意味があるんです。三山さん、昨日のお話をもう一度お願いできますか」

「え、ええ。分かったわ」

三山さんがうなずき、昨日してくれた話を繰り返します。

「沙夜ちゃんに訊かれて思い出したことなんですけどね、先月辺りに電話で麻子とテレビドラマの話をしたんです。すごく盛り上がったから、次の週に電話したときも話題に出したんですけど、麻子は『そんな話したっけ』って言うてきて。前にした話、それも盛り上がった話なら忘れたことがなのに、なんにも覚えていなかったことがあったんです」

お願いしたのは私ですが、主に鷹井さんたちに向けて話しているようで、敬語になっていました。話し終わったところで、天音さんが口を開きます。

「それがなんだっていうんですか？ 単に母が忘れていただけですよ。母の電話と関係ないじゃないですか」

攻撃的な調子でした。ですが、すでに足首を掴まれているのは自覚しているはずです。ひるむことなく切り返します。

「関係あることは、あなたが一番理解しているはずですよ。三山さんと先月ドラマの話をしたのは、麻子さんではなく、“あなた”だったんですから」

私の言葉に、天音さんが苦々しそうに唇を噛みました。その他は、また一様に動きを止めます。

「そりゃ、いったいどういう意味だ」

ややあつて、鷹井さんが尋ねてきました。すぐに答えます。

「簡単なことです。電話では顔が見えないことを利用して、天音さんは自分が麻子さんと勘違いされるかどうかを試したんです」

「はあ？」

鷹井さんが、素っ頓狂な声を上げました。中村さんが冷静に、私

へ疑問を投げかけてきます。

「確かに、同性の親子で声が似ることはありますが、勘違いなんてするでしょうか。めったに話さない相手ならまだしも、三山さんは長い付き合いがある人です。そう簡単に間違えてしまうとは思えません」

正しい意見でした。ですが、それは私の推理が“正しくない”証明にはなりません。

「確かにおっしゃるとおりです。でも、ありえなくはありません。人間は本来、複数の感覚器官で物や他人を認識しています。でも、電話の場合は耳しか頼るものがない。わずかな違いでは、気づけないことが多々あります。それは、頻繁に連絡を取り合っている間であっても、例外じゃありません」

「ですが……」

中村さんは納得しきれていないようでしたが、三山さんが決定的な証言をもたらしました。

「沙夜ちゃんの言うとおりだね。今までに何回か、最初に電話を取ったのが天音ちゃんだったとき、言われるまで気づかなかったことが、何回かあった……」

親友の娘を追い込んでしまう情報だからか、彼女はかなり表情を歪めていました。

「……だとさ。納得できなくても、現にあるなら反論の余地もない」

「分かってます。実例があるなら、疑念は解消です」

警察官二人がそんなやり取りを交わします。もはや、天音さんの声は麻子さんのもの聞き違えることがあるというのは疑いようがありません。推理へ戻ります。

「おそらく天音さんは、その経験から今回の“トリック”を思いついたんでしょう。一ヶ月前に麻子さんになりましたのは、それがうまくいくかどうかの下準備だった。そうですね、天音さん」

問いかけましたが、返答はありません。彼女は苦虫を噛み潰したような表情で、ただこちらを見るばかりでした。反撃しようにも、

爪も牙も立てられないようでした。獣は既に、手足を捕らえられているのです。

「つまりあなたは、こう言いたいわけですね。事件当日に日橋麻子から日橋天音にかけられた電話は……」

と、中村さんが私に代わり、トリックの核心を口にしようとしていました。私個人は別にかまわなかったのですが、

「中村。今の主役は沙夜だ。脇役が推理を話す必要はない」

それまでずっと黙っていた啓介が遮りました。普段、仏頂面の中村さんが、きよとんとした表情になります。私は私で、横目で啓介を見ながら苦笑しました。何も、そこまで徹底しなくてもいいと思うのですが。

「中村、今はお呼びじゃないってよ。沙夜ちゃんにこの場は預けとけ」

鷹井さんが肩をすくめ、中村さんへそう言いました。彼女は釈然としないという感じで、鷹井さんへ顔を向けていましたが、しばらくしてあきらめたように息を吐くと、小さく「はい」と言って、私へ向き直りました。続きをどうぞということのようです。ありがたい受け取っておきます。

「えと、戻りますね。つまり私が何を言いたいかというと、事件当日に携帯越しに三山さんが話していた人物は、麻子さんを語った天音さんだったということですよ」

「あのとき電話で話してたのは、麻子じゃなくて天音ちゃんだった……」

流れからさすがに察していたようで、驚きからではなく、信じたくないというように、三山さんは重々しくつぶやきました。

「そうです。あのとき、既に麻子さんは殺害された後だったんです。他でもない、天音さんによって。しかし、あなたは電話を使うことで、生存をでっ上げたんですよ」

つまり私たちは、死体発見時ではなく、あの喫茶店で天音さんに会った瞬間、既に事件に巻き込まれていたのです。

「まず、頃合いを見計らい、私たちの視界に入らない場所、カバンの中かもしくは机の下で、あなたは持つてきておいた麻子さんの携帯から、自分の携帯へ電話をかけた。それからコール音で電話に気づいたふりをして、しばらくは一人芝居をしたんです。第一段階の刷り込みでも言っておきましょう。事実、ここで私たちは、いもしない電話相手の存在を認識させられましたから」

それだけ、彼女の芝居は自然でした。意識を向けてなかったからとはいえ、あの啓介の目すらかくぐったのは、驚嘆に値します。

「実際はいない麻子さんと会話しておくことで、相手は彼女に違いないという意識を持たせてから、三山さんに電話を渡し、麻子さんの携帯を持ってお手洗いへ行っただ。麻子さんを演じて、三山さんと話すために。あるとき三山さんは、電話を受け取ってから、しばらく戸惑っていましたよね。どうしてですか」

「それは……、呼びかけたのに返事がなかなかなかったからよ。ちよっと待つてから、やっと声が聞こえたの」

最後の方は消えてしまいそうな声でしたが、三山さんはしっかりと答えてくれました。

「その不自然な間が、あるとき電話の向こうにいたのは天音さんだったことを示しているんです。私たちの視界から出ないことには、麻子さんを演じることができない。お手洗いにたどり着くまでの間は、どうしようもなかったんです。この、間があったことを思い出して、私は初めてあのとときの電話を疑ったんです」

普通に考えて、「代わるね」と言われたのに、一旦電話を離れるなどという行為はまずしません。となると、何か特別な事象があったとしか考えられないのです。

「そして最後に、『訪問者が来たから切る』と言って、電話を終わらせた。後は、何事もなかったかのように席へ戻り、私たちと一緒に家で麻子さんの死体を発見すればいい。それでアリバイは完成です。あなたは、生存を偽装したんです」

リスクはかなり高いですが、三山さんのような自分が正しいと思

い込みやすい人をうまく利用したトリックでした。以前、実際に麻子さんと天音さんを間違えたことがなければ、おそらく間違えるかもしれないというのを認めてくれなかったでしょう。居合わせたのが彼女だけであれば、電話にはなかなか目が向けられなかったかもしれません。京太さんの自首がなければ、そのうち捜査が及んでいただでしょうか。

「でも、だとしたら、携帯はどうしたっていうの？ 麻子の携帯は、遺体のそばに落ちてたのよ」

反論を口にしたのは、三山さんでした。なんとか、天音さんが犯人ではないのではという隙を作りたいようですが、冷静さに欠けています。

「忘れてるみたいですね、三山さん。私たちがこの家に着いたとき、天音さんだけ先に中へ入っていつてます。そのときに遺体のそばに携帯を置いたんです。自分が使ったのがバレないように、わざわざ指紋を拭き取って。それから叫び声を上げて、私たちを中に来るようにしたんです」

指摘されて、すぐに思い出したようで、彼女はまぶたを大きく持ち上げました。

死体発見時、私たち四人は家へ同時に入っていません。天音さんだけ、先上がったのです。麻子さんの携帯を置くために。

「台所にあつた作りかけの料理も、天音さんが偽装工作のために用意したものでしょう。死亡推定時刻を踏まえると、殺害後に作る余裕はあまりなかったでしょうから、おそらくその前に途中まで料理を進め、麻子さんを殺害した。あなたは、あらゆる手を使って、彼女の死を誤魔化したんです」

運も彼女に味方しました。死亡推定時刻は絶対とは言えないにしても、今の技術では相当に信頼が置けます。その予想時刻は、彼女の偽の連絡の後の時間も含んでいましたから。

「証拠は？ あの電話が、お母さんからのじゃないっていう、明確な証拠はあるの？」

隙を見つけたと言わんばかりに、天音さんは牙を剥いてきました。ただ、私に届きもしません。

「ありますよ。鷹井さん、今日の朝にも教えていただいたことを、もう一度お願いできますか」

「ん、ああ。紙を持ってきてあるから、それを見せる」

呼びかけると、彼は平然とした様子で一枚の紙を机上へ出しました。

「こんなことを調べていたんですか。それも、上への報告もなしに」  
中村さんは、今初めて目にしたようで、睨みつけるように鷹井さんを見ました。ですが、彼はというと、

「始末書なら、何枚でも書いてやるさ。犯人さえ捕まえられれば。面倒だけどな」

悪びれる様子もなく、

いけしゃあしゃあと言い放ちました。

「それで、これは？」

脱線した話題を、三山さんがレールに戻します。無意識でしょうが、いいフォローでした。

「私が昨日頼んでもらった、麻子さんの携帯の発信記録です」

「発信記録？」

三山さんが首をひねります。

「はい。重要なのは時間ではなく、住所です」

手を伸ばして、指も真っ直ぐします。指し示したのは、電話番号や通話時間などではなく、経由したアンテナと大まかな電波の発信位置でした。街の名前が書かれています。

「これは、ここ周辺ではなく、駅前の区域の地名ですね」

中村さんが、こともなげに言いました。もちろん、その重要性を理解したうえで。

「そうです。つまり、この家からの発信ではなかったということなんです。遺体を見つけたときの状況から見て、麻子さんが殺害されたのは間違いなく、ここから見えているキッチン。とすれば、死亡

推定時刻の限度ギリギリまで会話していたはずの彼女が、ここ以外の住所の位置から発信できるわけがありません」

彼女にとつては、致命的な情報でした。発信記録から言えば、麻子さんは電話を駅前でかけていたことになりません。ですが、死亡推定時刻を考えると、そんなことはありません。とすれば、あの電話は麻子さん以外の人間が、彼女の携帯を使ってかけたとして考えられないのです。

私は、全体を見渡していた目を天音さんへ向けました。

「電話越しでは、三山さんが麻子さんとあなたを間違えるというのは証明されています。あなたは、ありえない発信記録を説明できますか？　そして、もし電話したのが自分だと認めるなら、どうしてそんなことをしたのか、納得できる理由を説明してみてください」

一気にたたみかけます。彼女に説明できるはずがありません。そして何より、

「あなたが、自分の身を守る意味はないはずです。真犯人であるあなたが捕まるか、“親”としてあなたを怖れながらも、かばっている京太さんが捕まるかしかないんですから」

彼女の目的は、もはや実現不可能でした。選択肢は、天音さんが京太さんのどちらかが捕まることしかないのです。京太さんが娘との間違いを恐れ、娘として愛していたために。

長い沈黙が流れました。破ったのは、不気味な笑いでした。

「ふふふ……。あははははは！」

天音さんが、座ったままで狂ったように笑いました。これくらいの狂気では動じない私と啓介を除き、全員が固まります。

「そうですね。そうなんですよね。こんな最悪な展開になるなんて思ってもみなかったですよ。手に入れようとしていた人に庇われるなんてね」

急に笑い声を上げるのを止め、彼女は高らかにしゃべりました。敬語ではあっても、タガがはずれたような様子でした。

「確かにそうですね。でも、この展開はあることによって必然

的なものになってました。なにしろ京太さんは、私たちよりも先に、麻子さんの遺体を発見してしまっていたはずですから」

「君たちより先に、京太さんが遺体を発見していた、か。確かに、現場に痕跡が残っていたことから、間違いないだろうな」

私の言葉に、鷹井さんが食いつきました。私は首を縦に下ろしません。

「はい。数々のものが、そのときの京太さんの動揺を示しています。ゆっくりと、私は話し出します。」

「京太さんがこの家へ電話したのが、十七時すぎ。なんの用事だったのかは定かではないですけど、天音さんが出るかもしれない固定電話へかけたことと、電話した時間帯にこの周辺で目撃されていることから、おそらく元からここへ来るつもりだったんだと思います。でも、電話は繋がらなかった。そこで直接ここへ来たところ、麻子さんの遺体を発見した。こんなところでしょう」

本人がいないので、確認のしようがありませんが、反論は出ませんでした。話を続けます。

「京太さんがどんな反応をしたかは、想像するしかありませんが、しばらくして彼は、今の状況は自分に疑いが向くということに気づいて、とにかく痕跡を消そうとしました。その結果が、あの壊されていた固定電話と、中途半端に消された指紋です。とりあえず自分が電話したことを隠して、指紋も消すことで、疑いから逃れようとしたんでしょう。動転と一刻も早く現場から離れたたいという焦りのせいで、消しきれなかったみたいですが」

京太さんが痕跡を消そうとした本当の理由は、犯人にされることそのものへの怖れではなく、それによって天音さんと一緒に住まなければいけなくなることだったのかもしれないが、私はそこに触れませんでした。今や、分かり切っていることなのです。

「彼が、犯人はあなただと確信したタイミングは、正直分かりません。でも、間違いなく断定はしています。そうでなければ、愛していた人を殺害した犯人へ復讐を考えかねない彼が、自分から捕まっ

たりはしないでしょ」

そうしたのは、ひとえに犯人が彼女だったからに他なりません。

「彼が苦悩したであろうことは、容易に想像が付きまします。愛する娘を警察に突き出すことも、ましてや手に掛けるなんてこともできない。かといつて、三山さんが家に帰った後に訪れる二人での暮らしにある“間違いを犯してしまうかもしれない”状況も怖ろしかった。結果として、自分に向けた疑いを利用して、すべてを収めようとしたわけです」

「まったく、ついてないわ」

私が解説を一段落させると、天音さんは吐き捨てるように言いました。

私が話すべきことは、もうほとんど済んでいます。舞台のスポットは、然るべき人物に移さなければいけません。推理劇には必ず必要なものがあります。それを促すために彼女へ話を振りました。

「あなたは、どうしてお母さんを殺してしまうほどに、お父さんを愛したんですか」

必要なのは、犯人からの言葉でした。今回の場合、動機は既に明かされていますが、本人から聞くというのが大事なのです。個人的な興味もありました。問われた天音さんは、私を見て目を細めます。「愚問ですね。あなたは、藤山くんをなぜ愛しているのか、言葉にできるものだけで説明できますか？」

声高らかに、答えてきました。見事な返しでした。私は、首を左右に振ります。彼女の本質は、私たちと変わりません。ただ、愛していたのです。他のものの価値がどうでもいいものになるほど、強く。私たちと違ったのは、愛したのが親であったのと、相思相愛ではなかったということでした。

「そうでしょう？ 人によっては違つかもしれないですけど、愛情を抱くことに理由なんていらぬ。ただ、心で感じるだけなんですから」

私の反応を見て、彼女は満足げに微笑みます。

「いつから、お父さんのことを異性として見ていたんですか」

問いかけると、彼女はためらいなく話し出しました。むしろ、進んで話しているようにも感じます。

「小さい頃からですよ。昔からお父さんっ子で、お母さんも好きでしたけど、お父さんに対する感情の大きさは、比べものにならないかったです。物心着いた頃にはもう、お父さんを異性として見ていたくらいです」

この部分も、私に似ていました。私も、気づいたときには異性として啓介に愛情を持っていました。

「でも、お父さんはお母さんのことを、とても愛していました。“娘”としての愛情は注いでもらえても、“女”としては、入る余地がなかったです」

私と決定的に違うのは、ここです。啓介には、私しかいませんでした。また、私には啓介しかいませんでした。二人でいる以外の歩み方は、存在しなかったのです。彼女の場合、その道がありませんでした。

だから彼女は、

「私にとつての唯一無二の人が、他の女のものになっているなら、奪い取るしか選択肢はないでしょう?」

こんなにも、歪んでしまったのです。

「あなたも、もしそうだったら同じことをするでしょう?」

行き過ぎた愛情を抱いた女の目が、私へ向きます。

「そうですね。もしそうだったら、私もあなたと同じことをすると思います」

「やっぱり。西野さんからは、同じ匂いがしたのよね」

私の返答に、天音さんは同類を見つけたと言わんばかりに、口元に笑みを浮かべました。でも、すぐに引き締まります。

「ただ、簡単にはいきませんでした。さすがに、殺そうなんて最初からは考えてなかったですし、お父さんたちも早くから私の感情に気づいていて、警戒が強かったですから」

時期を彼女ははっきりと言いませんでしたが、おそらくかなり前からでしょう。殺しを躊躇わせないほどになるまでは、時間が必要なはずです。

「私も、我慢強く粘りましたけど、両親は警戒を緩めませんでした。そればかりか、とうとう別居なんて手段に出てきたんです」

京太さんたちからすれば、苦渋の決断だったでしょう。夫妻はかなり仲がよかったはずなのです。そうしなければならなかったというほど、二人にとって天音さんは脅威になっていたということになります。

「困りましたよ。そもそも、お父さんが家にいない状態になりましたから。お父さんだけが移り住んだアパートに押し寄せたりもしたんですけど、のらりくらりとかわされました」

それでも、二人はどうか彼女を“娘”で留めようと、手を尽くしたのでしよう、彼女を抑えることに成功していたようです。ただ、その抑止によって、彼女を暴走させてしまいました。

「私は、もう我慢が利きませんでした。お父さんを家に戻すにはどうしたらいいかを考え、私の方を向かせるにはどうしたらいいかを考え、結論として導き出したのが、お母さんを殺してしまうことでした。お母さんがいなくなれば、お父さんは確実にこの家へ戻ってきます。私のことを見てくれます」

抑えつけていた分、彼女という獣は牙を鋭く研ぎすぎていたのです。その牙は、容赦なく敵へ、この場合は母親である麻子さんへと向けられました。

「この家を、私とお父さんの空間にできるはずだったんです」  
そうすることで彼女は、檻を作ろうとしました。家族であるがゆえに作ることができる、家という檻を。自らその中へ入り、さらに獲物である京太さんを入れ、閉じこもろうとしたのです。

まさにそれは、獣の檻でした。

「それなのに、お父さんが犯人だと嘘の自白をして警察に捕まったことで、何もかもが意味をなくしてしまいました。私がお父さんが、

この家からいなくなる展開しなくなってしまった。絶望ですよ。あなたの言うとおり、もう、どうすることもできない」

その企みは、他でもない愛していた京太さんによって、阻止されました。彼女の檻は、もはや作ることができないのです。

「本当に、バカみたいですよ。人殺しまでしたのに、得たかったものが手に入らなかつたんですから」

「天音ちゃん……」

三山さんが、弱い声を出します。天音さんが、殺人を後悔しているのかと思っただけでしょう。そうではないのに。

事実、

「これなら、お父さんを殺した方がよかつた」

次に天音さんが放った言葉に、三山さんは顔を引きつらせました。「そうじゃないですか？ どうせ手に入らないなら、一緒に死んでしまった方が、まだ救われますよ。私以外を見ることはなくなりますから」

若い彼女の狂気は、愛する人に対して直接的な歪みを持っていました。手に入らないのなら、他の人の手に渡らないように、命を取ってしまうおうというものです。一番危険とは言えなくとも、かなりイカれているレベルでした。

そんな彼女へ、問いかけます。

「一つだけ、訊かせてください」

「なんですか？」

「お母さんを殺したこと自体は、後悔していますか」

天音さんは口元に微笑みを湛え、淀みなく答えます。

「いいえ、まったく」

「……そうですか」

私が口にしたのは、それだけでした。何を言っても無駄でしょうし、綺麗事を言いつつもありません。

「あなたなら、理解できるでしょう？ 愛する人を手にするためなら、自分の母親を手を掛けられるほどの狂気を。あなたと同じはず

だもの。独り占めしたいでしょう？ 二人だけでいたいでしょう？ 他に何も必要ないと思うでしょう？」

反応が薄かった私へ、これでもかというほど、問いかけてきました。

「確かに、ところどころは合ってますけど、理解はできません」

「なんですって？ どうして？ あなたは私と同じはずじゃないですか」

私が首を横に振ったことで、彼女の顔が訝しげなものに変わります。腰も浮かせて、身を乗り出してきました。

自覚をしていないのでしょうか。彼女のした問いそのものが、私との違いを示していることに。

「いいえ、違います。現に、あなたは私ならしないことをしています」  
その違いを、指摘します。

「どうして、私に同意を求められますか」

瞬間、天音さんは息を呑みました。そうなのです。本当に他がどうでもよければ、私が同種かどうか、はたまた私が理解できるかどうかなんて、確認する必要がないのです。

「理解されない想いを、私に押しつけてこないでください。私と啓介は、あなたと決定的に違うんですから」

「どこが、違うんですか」

こちらに挑むような目つきを向けてきます。

「簡単なことです」

自然と、口角が上がりました。彼女へ向けて、言い放ちます。

「私たちはあなたと違って、互いに愛を手にしてますから」

これこそがどうあがいても変えようのない、彼女と私たちの大きな違いでした。私たち二人の場合、他人からしたら意味の分からない考えも行動も、すべて私たちの中で完結します。わざわざ誰かに同意や理解を求める必要がないのです。世界が確立されているために。

「あなたのは、どれだけ狂ったところで略奪愛。お互いを縛り合っ

てる私たちの純愛とは交わりません。私は啓介に理解されれば、それでいいし、啓介は私だけが理解できればいい。他の誰のものも必要ありません。私たちに理解を求めた時点で、あなたの狂気なんてその程度なんですよ」

さっきまで天音さんに向いていた関心は、すべて私にきていました。三山さんは目を見開いて完全に絶句していて、多少免疫のある警官さん二人も、真顔を繕っているものの、頬を引きつらせています。けれど、彼らがどう受け取っているのかに興味はありません。私はただ、訊かれたことに答えているだけなのです。

「あなた、おかしいわ」

天音さんが、眼孔鋭くぼそりと口にしました。おかしい人からおかしいと言われるくらいですから、私たちは相当に普通の人からズレているようです。

「いつたい、なんなのあなたたち」

畏怖の念すら感じているのか、彼女は一步後ずさりしました。同時に、私へ疑問を投げかけてきます。

回答は、今までで一番簡単でした。

「ただの恋人同士です」

たった、それだけでした。場の空気が急激に冷えたようにも感じましたが、気にとめるほどのことではありません。

「もう閉幕でいいでしょう。この後は、もう探偵の出る幕はありません。私は、人情的な人たちと違って、アフターケアはしてませんから」

獣を鎖につないだ時点で、私の役目は終わりです。鎖を引いて、檻へと入れるのは、

「鷹井さん、お願いします」

警察さんのお仕事です。ただ、そこには京太さんはいません。孤独な檻です。

「……ああ」

鷹井さんは息を吐いてから、まだ私へ目を向けている天音さんへ

近づき、

「殺人の容疑で逮捕。異議はないな」

容赦なく手錠をかけました。天音さんは、一度だけ手首にある金属の輪へ目をやり、

「本当、最悪ですね」

誰に向けたわけでもなく、一人つぶやきました。

「こつちが言いたいくらいだ。むちゃくちゃな動機すぎて、一ミリも理解できん。別に、できなくていいんだがな」

鷹井さんの返しは、かなり投げやりでした。

「行くぞ、中村。もう、ここに用はない」

それから彼は、中村さんに顎で立ち上がるように促しました。指示に従って、女刑事さんは腰を上げます。

「始末書は書くんですね」

「言つたろ。事件が解決さえすれば、いくらでも書くつて。まっ、誰かさんが報告しなければ、書かなくて済むんだけどな」

彼の言った誰かさんは静かにため息を吐き、

「なら、ちゃんと書いてください」

「はいはい。お前が見逃すなんて言つたら、明日は雨だからな」

あっさりと頼みを退けました。鷹井さんがそれを受けて苦笑した後、二人で私たちの方を見てきました。

「それじゃあ、俺たちはこれで失礼させてもらうよ。もう現場で会わないことを祈る」

「不本意ですが、ご協力感謝します」

それぞれ言つてから、鷹井さんが天音さんの右腕を掴み、空いている手を背中に回しました。中村さんは、二人を先行します。

去り際に、天音さんが私たちの方へ首を回しました。目はギラギラとしたままです。

「あなたたちは私と同じよ！ なんにも違いやしない！」

叫ぶ声が、家の中に響き渡ります。

「最後の咆哮つてとこか」

長く口を閉ざしていた啓介が、たいして関心はないながらも、微かにつぶやきました。

「自分たちの“今”が盤石だから、違うなんて言える！ 本質は変わらない！ それだけは絶対よ！」

そこまで言い終えたところで、鷹井さんが強引に前を向かせました。その後は、何も言ってくることなく、玄関から外へ連行されていきました。

私たちが見た、最後の獣の後ろ姿でした。

「ふう……」

「お疲れ様」

やるべきことを終え、肩の力を抜きました。啓介がすかさず私を抱き寄せてくれます。

「さすが沙夜だな。やっぱり、天性の才能がある」

「そんなことないよ。啓介の記憶力と観察力がなかったら、ここまです組み上げられなかったと思う」

舞台の幕を閉じ、壇上を下りた私は、啓介と笑顔を交わしました。そこへ、客席に残っていた人からの声が入ってきます。

「盛り上がっているとこ悪いけど、ちよつといい？」

「ふえっ？」

完全に気が抜けていた私は、間抜けな声を出し、啓介の腕の中で話しかけてきた人の方へ顔を動かします。

警官さん二人と犯人である天音さんが退場した今、当然ながらその人物は三山さんでした。

「えっと、なんですか」

啓介からは離れずに、返事をしました。三山さんは一度眉をひそめました。特に文句を口にしたりはしてきませんでした。代わりに、問いかけがきます。

「本当に、天音ちゃんが犯人なの？」

「はい。間違いないです。信じられないかもしれませんが、それが事実です」

おそらく、天音さんが子供のときから見てきたために、まだ受け入れられていないのでしょう。それでも現実が変わらないので、私は断言しました。

「そう……。本人も認めていたから、頭では分かっているつもりなんだけど、どうしてもまだ心が納得していません」

三山さんが目線を落とします。親友を殺害された彼女は、間違いなく犯人を恨んでいたはずですが、その犯人が、同じ被害者であるとなつた疑つていなかった親友の娘だったのです。行き場を失った怒りと、増大した悲しみとその他諸々が入り混じって、おそらく彼女自身でも整理できない心理状態になっているでしょう。

「私は……」

うつむいたまま、彼女はポツリポツリと話し出しました。私たちに向けてのものか、独り言なのか、判別しづらい音量でした。

「私には、あなたたちも天音ちゃんも、理解できない。私は既婚者だから、旦那のことをなんだかんだ大切に思ってるけど、あなたたちほど極端な考えを持ってはない。ううん、持てない。他にも大切なものが、あるから。好きな人と比べても、切り捨てるのが難しいものが。あなたたちは、どうしてもそんな簡単に、他はどうでもいいなんて言えるの？」

どうやら、私たちへの問いかけのようです。私が答えようとしたが、啓介が私より前に出てきたので、まかせることにしました。「本当は無理に理解する必要もないんだが、分かりやすい例えを教えてくださいよ」

「例え？」

「あなた、子供はいるか」

「いいえ。色々と事情があつて、いないわ」

顔を歪めたうえに、言葉に濁りがあつたのは、おそらく事情というのが、何かしらの苦悩をもたらすものだからでしょう。身体的な問題か、もしくは過去に亡くしたかというところでしょうか。どおりで、親友の娘さんとはいえ泊まり込みで面倒を見たわけです。子

供のいない彼女にとっても、天音さんはある意味、娘だったのです。「そうか。なら、想像でいい。子供が一番大切だと思っっている親は、たくさんいるだろ」

「それは当たり前じゃない。時には突き放すことが必要なこともあるけど、どんなことがあると、絶対に護りきるのが親だわ。理屈じゃない」

「それだよ」

「えっ？」

「理屈じゃないんだ。愛情なんてものは」

啓介は、さらりと言っただけでした。さすがと言うべきでしょうか。

「親が子を護ろうとする愛情は、他のすべてを犠牲にしてしまうことがある。俺には、それが理解できないけどな。それと同じだ。俺は沙夜に対して、沙夜は俺に対して、そして捕まったあの女は実の父親に対してそういう愛情を持ってただけだ」

啓介の口調は、淡々としていました。

「たとえ自分の肉親だとしても、別の人間への愛情が勝れば切り捨てる。そういうものだとは言えない。ただ、何度も言ってるように、俺たちは理解を求めてない。分からないなら分からないで、そのまま放っておけ」

言っただけ言っただけから啓介は、私の方を向いて、手を握ってききました。

「行こう、沙夜。もうすることはない」

「う、うん」

身体を引かれるままに、私は啓介と二人でリビングを出ようと思いました。

「待って！」

そこで、後ろから声で引き止められました。二人で振り向くと、

三山さんが立ち上がったってこちらを見ていました。

「最後に一つだけ教えて。どうして、あなたたちはこの事件を解こうと思ったの？ 探偵と刑事の子供だから？ 私たちに同情したからっ？」

どこか必死さがありました。私たちの中に、理解できる部分を求めているのでしょうか。それに応じることができかどうか分かりませんが、私が答えを口にします。

「面白そうだったからです。非日常は、楽しいじゃないですか」「なっ……………」

三山さんが絶句します。どうやらこれも普通からズレているようです。横から、啓介が付け足します。

「それに、探偵に事件は付き物だ。ただ解くべくして解いただけのこと。事件に対して探偵が動くことへの理由付けは必要ない」

いつも通りの調子でしたが、有無を言わせない力強さが混じっていました。

「えっと……………、私、探偵って言えるほど立派なものじゃないんだけど」

「探偵だよ、沙夜は。ちゃんと、真実にたどり着いただろ」

「それは、啓介の協力があったのもあるし、なによりたまたまだし……………」

私が横からウダウダ言うつと、

「沙夜は探偵だ。俺が保証してやる」

はつきりした口調で反論してきました。もう何度目か分かりませんが、それでも、納得はできないですが、

「そうかなあ……………。でも、ありがと」

お礼は言っておきます。それだけ、啓介が私の探偵としての能力を信用しているということですから。

そんなやり取りを交わして、今度こそリビングを後にします。もう、呼び止める声はありませんでした。

こうして、許されない恋に捕らわれた哀れな獣の引き起こした事件は、幕を閉じました。彼女の賭けの結果は、惨敗。罪を承知で牙を剥いたのに、何一つ手に入れられず、終わりを迎えたのです。

獣の檻は、完成しませんでした。

## 終章 父として

天音さんが逮捕されてから、三日が経ちました。私と啓介は、変わらない日々を過ごしていました。

鷹井さんから聞いた話によると、天音さんが捕まってから京太さんはしばらくは自分が犯人だと主張し続けていたそうですが、彼が動機として語る金銭の問題がまったく見つからないことと天音さんの告白によって、偽証罪に問われるだけになったそうです。逃亡の恐れもないということ、仮釈放されたとのことでした。

そして今、京太さんは私たちの前にいました。ラフな私服を着て校門で待っていた彼は私たちを見ると、頭を下げてきました。

「どうも」

「ど、どうも」

私もおらずと礼を返します。啓介は一見無表情のように見えませんが、面倒なようでわずかに眉間にしわが寄っていました。

「なんの用ですか」

啓介がぶつきらぼうに尋ねました。声がいつも以上に平坦です。

「いえ、少しお話したいなと思ったので、鷹井さんという刑事さんから、こちらだと伺いました。お時間頂けますか」

啓介は今にも「帰ってくれますか」と言い出しそうだったので、私が代わりに返答します。

「いいですよ。行きましょう。こちらから訊きたいことも、いくつかありますし」

私の決定なので、啓介は何も文句を言いませんでした。不満も、収まったでしょう。

ただし、鷹井さんへの不満は消えていないと思います。悪い人ではないので、後でほどほどにぐらいは言っておくことにしました。

私たちは、駅前の喫茶店にいました。それぞれの前方には頼んだコーヒーがあります。私は甘めで、啓介はブラック。京太さんは普通くらいという感じです。ただ、私の前にはショートケーキも置かれていたりします。美味しそうだったので、つい頼んでしまいました。食べ出す前に、話を振ります。

「それで、私たちと話したいことってというのは？」

「正直、しっかりと言葉をまとめてきたわけではないんです。ただ、話さないといけないと思っただけで」

「どうやら、とにかく気持ちが先走ったようです。感情は、言葉の前を行ってしまうこともあります。啓介は、一層慚然とした感じになりましたが。隠そうとしているあたりが可愛らしいので、放っておきます。」

「やっぱり、犯人は天音でしたか？」

「とりあえずという感じに、京太さんが口を開きました。」

「はい。その言い方だと、犯人は天音さんだと感じいていたようですね」

「はつきりとした証拠は手に入れてませんでしたけどね。ただ、麻子が殺される前から危惧はしていましたから」

彼は、どこか遠くを見る目をしました。

「あなた方は、天音さんの感情に気づいていたんですね」

「同じ家で暮らしていましたから。最初のうちは本当にわずかな疑いでしたが、時間が経つにつれて、徐々に確信になっていきました。麻子がいなくて家に二人になったときなんかは怖かったですよ。明らかに女として私に迫ってきてきましたから。日によっては、外に出かけて逃げたこともあります」

「だから、別居をしたわけですか？」

「私が確認すると、彼はうなずきました。」

「天音に家の位置は知らせませんでした。待ち伏せや、押し入りが怖かったですから。それでもどうやって知ったのか、時たま姿を現

すようになりました。麻子から、あの子が帰っていないという連絡を受けるたび、家の前にいないかどうか怯えながら帰っていましたよ。実の娘に怯えるなんて、変な話なんですけどね」

自嘲気味な言葉でした。ただ、うつむいたものの表情には変化が見られません。彼は啓介と似た性質を持っているようで、感情が見えにくい人でした。

「でも、仕方がなかった。私は麻子を心の底から愛していましたから、天音に押し切られて屈してしまうのが怖かったです。それに娘としては愛しているのもありましたから、間違いを犯してしまつたらと考えると、怯えざるをえませんでした」

それでも、ある程度の本質を知っていると、彼の心が少しは見えてきます。正直な言葉もあるので、何を思っているのかは多少掴めます。ただ、理解できるものかどうかは別ですが。

「だから、今回の行動も予測はしていました。最悪の場合はこの前提だったので、あまり真剣には心配していなかったんですが。ただ……」

そこで彼は、目線を落としました。間が空きましたが、言葉を入れずに続きを待ちます。

「止めることはできたんじゃないかって思っんです。今思うと、麻子は自分が本当に殺されるかもしれないと、気づいていたような節があつたんです」

彼の予想は正しいでしょう。寝室にそれを示唆するような文章の一端があつたことを、思い出します。でも、彼が判断した理由は違っていました。

「事件の一週間前くらいに、麻子が私へ何かを伝えようとしたことがあつたんです。そのときは結局、麻子がなんでもないって言って私も追及しなかつたんですが、あのとき天音が本気で自分を殺そうとしていることを言おうとしたんじゃないかと思っんですよ」

表情に大きな変化はありませんが、声には後悔と自分への怒りが見え隠れしていました。

「あのとき私が、無理にでも話を聞いていたら、麻子は死なず、天音も殺人犯にならないで済んだかもしれませんが、それが、悔やんでも悔やみ切れません」

今度は啓介に言われる前に気づきます。テーブルの上で握られている京太さんの拳が、震えていました。

「一番助けてやらなきゃいけなかったときに何もできなかったのに、何が夫でしょうね。私は、最低です。娘を拒みきる自信がないばかりか、そのせいで妻を失ったんですから」

静かに、激情を外に出します。抑えつけている心中ではどれほどの嵐が吹き荒れているのか、想像もつきません。

「事件の日は、天音の学費とかについて話すつもりでした。あまり天音には聞かれたくはなかったですが、彼女の感情についてのものよりははるかにマシでした。だから、特に天音の在宅などは気にせず、仕事が一段落したら麻子のところへ行くことにしていたんです」

「そして家に着いたあなたは、鍵が閉まっていなのを不思議に思いなから、家の中へ入って、麻子さんの死体を発見したわけですか」私が確認を入れると、彼はうなずきました。

「ええ。電話に出なかつたので、不思議に思っていました。まさか死んでいるなんて想像もしていませんでした。正直、何がどうなっているのか最初はまったく理解できませんでしたよ。それでも、しばらくしてから自分の立場の危うさに気づいて、自分の痕跡を消しましたんです。そのときはまだ、天音が犯人だという考えに達していませんでしたから」

それで、あの壊された電話と半端に消された指紋が現場に残ったわけです。ついでに言うなら、目撃証言も。本来なら姿を見られても問題がない用件だったために、あの状況が生まれたのです。おそらく、一番驚いたのは天音さんでしょう。覚えがないのに、電話が壊れていたのですから。

「でも、一度家から逃げるように離れて、冷静になればなるほど、

実は天音がやったことなのではないかという疑いがどんどん増していきました。リビングしか見ていませんでしたが、家の中は荒れていませんでしたし、麻子を殺す理由を持っている人間は、思いつくかぎり、あの子ぐらいしかいませんでしたから」

彼の予想は、当たりでした。

「証拠はなくても、天音と会ったときにすべてを察しました。間違はなく、犯人はこの子だと。目がすべてを訴えてました。これで二人で生活できる、もう逃がさないという感じてしたよ」

京太さんと天音さんが会ったとき、私たちは直前にあった三山さんのやり取りの方に気がついていたとはいえ、啓介も気づかなかったことを考えると、本当に身近な人でないと分からない違いだっただけでしょう。

「そこからが苦悩でした。麻子が殺されたことは悲しかったですし、犯人への怒りもあつたのに、憎むべき相手が娘だったんですから。もう頭が真っ白でした。いっそ、麻子の後を追って死んでしまおうかと思いましたよ」

「でもあなたは、そうしなかった。娘さんを残して、死ぬ決心ができなかったから」

私の指摘に、彼は目を見開きました。ですが、さほどの考えにたどり着くのは難しくありません。

「あなたが娘さんとして天音さんを愛していたのは、自己申告からして明らかです。もっとも麻子さんと会うのとは別に、一カ月に一度家族での食事をしていたことから予測がきます。また、間違いを犯したくないという考え方からもうかがえます。それほど気にかけているのなら、彼女を残して自殺という選択肢は選ばないでしょう」

「まったくその通りです。娘が犯人だと分かっただけであつた、私はあの子を残して死ぬという事はできなかった。思い上がりかもしれないかもしれませんが、私が死んだら天音まで命を絶つかもしれないという不安もありましたし」

恐らく、思い上がりではないでしょう。絶対には言えませんが、京太さんの存在は殺人を犯すほどに彼女の価値観を占めていますから、可能性は高いはずです。

「ですが、同じ家にいることのリスクもかなりの恐怖でした。ただでさえ、麻子という大きな存在を失ったばかりでしたから、天音を拒否しきる自信は以前に増してありませんでした。だから、警察が私に逮捕状を突きつけてきたとき、これだと思ったんです」

「自分は死ぬことなく、かつ娘さんを刑務所に入れずに離れて暮らせる手段だと思ったんですね」

「ええ。物証は指紋と留守電がありましたから、あとは動機をでっち上げるだけでした。天音はかなり取り乱していましたが、自殺まではないかなだろうという読みがありました」

おそらく、この世からはいなくならないからでしょう。天音さんも混乱する頭の中で、その考えには至ったはずですが。それでも、目的の達成が不可能になったというのは、精神的にかなり響いたでしょうが。

「しかし、あなた方が犯人は私ではなく天音だと真相を明らかにした。どうせ絶望するのなら、暗い檻の中で一人きりがよかつたんですかね」

彼は自嘲の笑みを浮かべました。結局、彼は家族を誰一人護れませんでした。麻子さんも、天音さんも。残ったのは、彼一人です。娘の暴走を止められず、奥さんの命を助けられず、果ては泥を被ることすらできませんでした。この事件の、一番の被害者であると言っているでしょう。

「それで、あんたはどうするんだ」

彼に問いかけたのは、私ではなく啓介でした。

「俺たちにとっては意味のないことを話して、あんたはこれからどうするつもりなんだ。俺たちは、あんたのカウンセリングをする気はない」

冷たい言い方ですが、もっともな問いでした。私たちが彼の話を

ただ聞いたところで、どうすることもできません。

啓介の言葉を受け、京太さんは驚いたように少し目を開き、それから微笑しました。

「カウンセリングなんてしてもらったつもりはありませんよ。ただ、あなた方と話したかったです。最初に言ったように、何を話すかは決めていませんでしたが、一方的な懺悔のようになってしまいましたね」

「私たちと話したかった、ですか」

「ええ。そのうち警察にはバレるかもしれないと思ってはいましたが、それよりも先に天音の想いに気づいたというあなた方に、興味があつたんです」

彼の目的は、会話の内容よりも私たちと話すこと自体にあつたようです。

「会ってみて納得しました。どうやらあなた方は、私の想像以上に聡明なようですね」

絶賛とも言える評価でした。恐縮します。啓介は元々、私への評価が高いので、当たり前だと言わんばかりに、表情を変えませんでした。京太さんが続けます。

「だからこそ、問いたいことがあります。あなた方が私と同じ立場だったら、どうしていましたか。そして、これからどうしますか」

切実さに溢れた質問でした。訊いたところでどうしようもなく、本当は自分でしか答えを見つけれないことは理解しているでしょうが、それでも訊かずにいられなかったようです。ですが、訊く相手が私たちでは参考にすらならないでしょう。

「私だったら、いいえ、私たちだったら、京太さんと同じ境遇になったとき、子供を切り捨てます。私たちの生活をもっと面白くしてくれるのならともかく、私たちの世界を侵すなら、子供であっても私たちの敵ですから」

「なっ……」

迷いない私の言葉に、彼は面食らった様子を見せました。気にせ

ずに、話を進めます。

「仮定の話ですから、現実は無視しますが、もし啓介が殺されたら、たとえ犯人が血を分けた子供でも、私はその子に復讐を遂げてから、啓介の後を追って命を絶ちます。それが、私が啓介に誓っている愛情ですから」

私が微笑むと、彼は表情を変えました。今まで見た中で、一番感情の見えるものかもしれません。異常なものに理解が追いついていないゆえの、怪訝さがありました。私に反論をします。

「それは、あなたがまだ子供を持ったことがないから言えることです。実際に子供を持ったら、同じことは絶対言えません。愛する子を手に掛けることは、絶対にできない」

静かな口調ながらも、確かな怒りが覗いています。異常である私の意見ですから、普通感覚を持つ彼からしたら、それだけありえないことなのでしょう。ですが、それはあくまで彼のものさしで計った結果でしかありません。

「あなたならできないでしょう。いいえ、大半の普通の親なら、きっとできません。でも、私はできます。啓介が殺されるようなことがあったら、犯人が誰であろうと、たとえ肉親であっても、どんな手を使つても復讐します。今は子供がいまさんから、あなたの反論を論破することはできません。でも、実際私の中で啓介は両親よりも誰よりも位置は高いです。他の追隨を許さず一位です。啓介以上に私が愛している人間は、いません」

断言します。それどころか、この先も啓介よりも愛を向ける人間は決してできたりしないでしょう。子供でも親でも、啓介よりは価値は低い。いなくなれば悲しいでしょうが、啓介がいれば私はいくらかでも幸せに生きていけます。

「それは今だけです。子供が生まれ、あなたが人の親になったら、間違いなく同じことは言えなくなります」

京太さんが真正面から否定してきます。さつきも言ったように、今は親でない私に論破はできません。ただ、証明のできない確かな

自信があるだけです。おそらく彼は、それを認めはしないでしよう。彼は愛する人を奪った娘も、亡くなった奥さんと同等に我が子として愛しているのですから。私と違い、明確な愛情の優劣がないのです。おそらく、種類が違うためについていないのでしよう。私は、啓介への愛情が絶対的な一番優先ですが。

「今はそういうことにしておきましょう。実際に子供がいなかぎり、勝ち目がありませんから」

仕方なく、この場は彼の意見に負けておきます。どれだけ訴えたところで、納得はしてもらえないでしょうし、そうしてもらおう必要もないのです。

「……私も今はもう何も言いません。言っても、あなたは受け入れないでしょう」

私の敗北宣言を受け、釈然としない様子ながらも彼も矛を収めました。彼の今の問いに関しては、そもそも私に訊くこと自体が間違いなのです。

「あなたも、彼女と同じ意見ですか」

京太さんが、私の隣に座る啓介に顔を向けます。答えは、決まりきっていました。

「同じですね。俺があんたの立場だったら、まず沙夜を殺させない。危険性にも因るが、先手を打って子供を遠くに追いやるなりなんなりしますよ」

淀みない口調でした。自分になんの疑問も持っていないません。啓介にとつての一番も私なのですから、当然です。

「そうですか。なら、もうあなた方へは訊きません。極端すぎる」  
自覚しているかどうか分かりませんが、京太さんは嫌悪感を声に込めていました。ただ互いに子供よりも愛する人間がいるというだけのことなのですが、やはり私たちはズレているようです、今に始まったことではないので、気にはしません。

「失礼なことを言いますが、あなた方は思っていたよりも幼稚です。邪魔になっただら殺すなんて、どうかしてる。もっと現実を見た方が

いい。単純な感情だけで、世の中は生きていけませんよ」

さらに彼は苦言を呈してきました。私が口を開く前に、啓介が真顔で言い放ちます。

「でも、俺たちが言ったようなことをしてたら、あんたの奥さんは死ななかつたな」

京太さんは、言葉を失いました。より正確に言つと、何か言おうとはしているのですが、返す言葉が見つからないようで、息ばかりが口から出ていつています。

「あんたが離れるんじゃない、娘を離してしまえばよかつたんだよ。そうすれば、檻にはあんたの娘一人だった。同じ檻に奥さんを残して、あんたが逃げたから、猛獣に噛み殺された。世の中を知つたところで、大事な人間を護れなかつたら、意味がない。違つか？」  
京太さんより遙かに年下でありながら、背もたれに寄りかかつてしゃべる啓介の方が、強い存在感を放っていました。

「沙夜がない世界に、俺は価値を持ってない。逆に言えば沙夜さえいれば、どんな状況だろうと生きていける。邪魔しないかぎりはその中のルールを守つてもいいが、沙夜との世界を否定するなら、そんなもん守るのは願ひ下げだ。二人で世の中に否定されてくたばつても、沙夜と死ぬなら幸せだったと胸を張つて言える。だから、危険なものは排除するにかぎるんだよ」

いつもと変わらない淡々とした話し方ですが、すべて本音でした。「まあ、あんたみたいに、愛情に優劣のない人間には不可能だろう。切り捨てるのができないからな」

「……っ。もう結構です。お代は私が持ちますから、帰らせていただきます」

攻める啓介に耐えかね、京太さんは伝票を乱暴にひつつかむと、席を立ちました。表情にはそれほど感情は出ていませんが、行動には顕著です。

「日橋さん」

「なんですか」

そんな彼の背に、啓介は呼びけます。無視されてもおかしくありませんでしたが、キチンと反応がありました。

「娘さんのことは、どうするか決まりましたか」

問いに対し、彼は間を取ってから、

「護りますよ、今度こそ。あくまで、娘として。殺されるかもしれないと思っていながら、あの子を愛した麻子のためにも」

吹っ切れたような感じで答えました。再び歩き出します。

「母親を殺した子供を“護る”っていうのも、けっこう酔狂なもんだと思っただが」

啓介が今度は私の方を向いて言ってきました。肩をすくめてみせます。私は、微笑しました。

「そうだね。でも、それがあの人の愛情なんだよ」  
「なるほどな」

啓介も私と同じような表情を浮かべます。二人で、決心をした父親の背へ目をやります。会計をしているなんでもない姿でしたが、どこか大きく見えました。

京太さんと話していた喫茶店を出て、駅へと向かいます。日が傾き始めていて、町並みがオレンジ色になっていました。

「それにしても、珍しい事件だったね」

「そうだな。親を好きになるなんて、想像もつかない。沙夜は、よく分かったな。さすがだよ」

私が話しかけると、啓介はすぐに言葉をくれました。褒められて、照れと謙遜を抱きます。

「別にたいしたことじゃないよ。気づけたのだから、きつとたまたまだし」

「またそんなこと言って……。沙夜はもっと自分に自信を持っている。まあ今は、代わりに俺が沙夜の力を認めるけど」

「しばらくは、そうしてもらおうと助かるかな」

目を細めた啓介に、私は苦笑を返しました。

夕日の光が降り注ぐ中を、二人で手を結んで歩みます。私たちは永久に隣合って生きていくつもりです。いくつになっても。たとえ、天音さんのような子供ができようとも、決して変わりはいらないでしょう。

天音さんは、檻の中に京太さんを捕らえることができませんでした。でも私と啓介は、既に一つの檻の中にいます。内側から鍵を閉じた、完璧な私たちだけの世界。誰も入り込むことはできません。強引に檻へ踏み込もうとすれば、全身を食いちぎられるでしょう。

私たちの檻もまた、獣の檻なのです。

私は一人で、そつと微笑みました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3013q/>

---

獣の檻

2011年6月27日12時10分発行